

文部科学省 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

# 2019年度指定 第3年次 研究開発実施報告書

「持続可能なランドスケープの設計」 ～天白川水系から世界を俯瞰する～



2022年3月

名古屋商科大学系列校

**名古屋国際** 中学校  
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL



## ご挨拶

### 《事業実施校》

本校は、文部科学省より2019年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、3年目の最終年度を迎えることとなりました。この指定を受けた2019年度当初は、COVID-19感染拡大の影響で、世の中がこのように一変するとは思ってもみませんでした。しかし、その中でも学びを止めてはならないという気持ちで研究を進めてまいりました。そこで今年度は未来共生ウォーターコンソーシアム主催の「持続可能な未来への対話セッション2022」のテーマを「ニューノーマル時代における中等教育のあり方」として、教育改革を推進しました。この中では、学校とグローバルな世界との関係、学校とローカルな地域社会との関係、そして国内外の学校関連携の3つの対話セッションを行いました。よって3年間の集大成となる本校の研究テーマである「持続可能なランドスケープの設計」を構築することができたと思っています。

さて、最終年度を迎えた対話セッションの基調講演として、愛知県経済産業局スタートアップ推進監の柴山政明氏をお招きし、「AICHI-STARTUP ～愛知から、未来を創る。～」のテーマのもとで講演をしていただきました。その講演の中で、「今こそ、ピンチをチャンスに捉えてイノベーションを起こしていくことが重要である。」という内容が提起されました。まさに本校がニューノーマル時代の地域創生を加速させるイノベティブなグローバル人材育成に取り組もうとする指針が示されたものとなりました。指定3年目を終えても、本校の建学の精神「フロンティア・スピリット（開拓者精神）」の教育理念のもとで、さらなる研究を続けて参ります。

最後に、本研究開発実施報告書に記載の通り、各関係機関の皆様方から厚意的なご支援・ご協力を賜り、本校の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の内容が着実に深化し、指定3年目を終わられますことを心から感謝をし、御礼申し上げます。

2022年3月

学校法人栗本学園  
名古屋国際中学校・高等学校  
校長 小林 格

## 《管理機関》

管理機関である学校法人栗本学園名古屋商科大学より一言、ご挨拶を申し上げます。3年間の活動がこうしたコロナ禍にあり海外渡航が非常に困難な状況下にあったにもかかわらず、学びを止めることなく継続的にかつ発展的に推進され、こうして無事に終了を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。この過程では小林校長先生、黒宮先生をはじめとする名古屋国際中学校・高等学校の教職員の皆様がさまざまな困難を乗り越えて、新しい教育改革を進められたことがまず大切なことであり、ここに心からの敬意を表します。また、運営指導委員である東京大学の北村先生、名古屋商科大学の伊藤先生、天白川で楽しみ隊の岡田様、そしてJTBの中野様には、3年間にわたり本取組が生徒の皆さんにとって、学園にとって、ローカルな地域にとって、そしてさらに大きな視点でSDGs（持続可能な開発目標）を志向する優れた活動になるための数多くの有益な観点やご指導を頂き、この取り組みをさらに前に進めることが出来ました。ここに厚く御礼申し上げます。

さて、生徒の皆さんの成長という点で見れば、この取り組みを通じて確かな成長を実感するような局面が幾度となくありました。2019年度報告会「持続可能なランドスケープの設計～天白川水系から世界を俯瞰する～」では、急速に学びを拡大し深めていく成長過程にあった生徒の皆さんが来場した多くの社会人の方々の前で初々しい緊張感の中でプレゼンをしていました。2020年度報告会「持続可能な未来への対話セッション」では、水に関する国際理解が調査活動や協働活動へと次の段階に進み、着実に成長している様子が見て取れました。そして2021年度報告会「ニューノーマル時代における中等教育のあり方」では、フィリピン、カンボジア、モロッコでの国際研修、地域・学校間・社会連携などの多面的な学びをグループで、一人ひとりでも楽しんで学び、それを来場した方々に想いを届けたいという心に溢れた発表が多数あり、成長の充実ぶりが感じられました。

とりわけ印象的だったことは、最終年度の報告会において愛知県の柴山様をお迎えして行われた基調講演「AICHI-STARTUP ～愛知から、未来を創る。～」でした。中等教育のフィールドがオンラインと対面の境界線を揺れ動きながらニューノーマルを模索しつつあり、メタバースと呼ばれる三次元の仮想空間でリアルを志向するコミュニケーションを通じた学習がワールドワイドに広がり深まっていくこれからの新しい教育のカタチを想像させてくれるものでした。

翻って、名古屋商科大学では商学部を起点として文部科学省の「知識集約型社会を支える人材育成事業メニューIIIインテンシブ教育プログラム」の採択を2021年9月に受け、商学マーケティングの分野の知識を融合させつつ学外の地域社会や産業界のフィールドに貢献し活躍する人材を育てようとしております。本学の中高一貫校でこうして育った

生徒の皆さんが、本学の優れたケース教育とフィールド教育を受けてさらに成長するような高大接続がさらに一段と加速・進展していくものと思われました。本取組の今後の益々のご発展を心より祈念いたします。

2022年3月

学校法人栗本学園  
名古屋商科大学 商学部  
教授 亀倉正彦

## 目 次

【1】	本校の概要	1
【2】	研究開発概要	3
【3】	概念図	5
【4】	研究開発実施状況報告	6
【5】	活動報告について	1 2
【6】	海外研修報告	1 8
	・カンボジアコース	
	・オーストラリアコース	
	社会科教論 佐藤良明	
【7】	天白川白書—グローバルな視点で見た天白川流域のまち—	5 0
【8】	地域との協働による活動	6 1
	〔A〕 学校設定科目SIA特論Ⅱ	
	〔B〕 総合的な探究の時間—キャリア—	
	〔C〕 モロッコ・フィリピンとの交流	
	〔D〕 地域との繋がり—名古屋市昭和区との協働活動—	
	〔E〕 地域企業との連携	
	〔F〕 実践活動の発表及び啓発活動	
	〔G〕 English Zone—留学生との交流—	
【9】	第2回 未来共生ウォーターコンソーシアム報告	8 0
【10】	第6回 運営指導委員会	8 9
【11】	アンケート結果・分析・改善	9 2
	国際教育推進副主任 内藤圭祐	
【12】	講評	9 6
	○北村友人氏（運営指導委員）東京大学大学院教育学研究科／ 東京大学未来ビジョン研究センター 教授	
	○伊藤 博氏（運営指導委員）名古屋商科大学大学院マネジメント研究科 教授	
	○岡田 あつみ氏（地域協働学習実施指導員）天白川で楽しみ隊 代表	
【13】	3年間の活動について	9 9
	国際教育推進主任 黒宮祥男	

## 【1】本校の概要

### 1 学校名・校長名

- (1) 学校名：学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校
- (2) 校長名：小林 格

### 2 所在地・電話番号・FAX番号

- (1) 所在地：愛知県名古屋市昭和区広路本町1-1 6
- (2) 電話番号：052-858-2200・052-853-5151  
FAX番号：052-853-5155

### 3 課程・学年・学級数及び教職員数

#### (1) 課程・学年・学級数（2022年3月9日現在）

課程	学科	高校第1学年		高校第2学年		高校第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全 日 制	普通科 (中高一貫コース)	55	2	59	2	83	2	197	6
	普通科 (国際バカロレアコース)	17	1	24	1			41	2
	普通科					26	1	26	1
	普通科 (グローバル探究コース)	25	1	33	1			58	2
	国際教養科	32	1	28	1	39	1	99	3
計		129	5	144	5	148	4	421	14

#### (2) 教職員数（2022年3月9日現在）

校長	教頭	教諭	養護教諭	常勤講師	非常勤講師	事務職員	委託事務職員	用務員	計
1	2	18	1	3	38	5	0	2	70

### 4 学校の特徴

#### (1) 建学の精神「開拓者精神（フロンティア・スピリット）」

#### (2) 5つのグローバルアクション

- ① 文部科学省地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)指定校
- ② 国際バカロレア・ディプロマプログラム認定校
- ③ 国際教養科の設置
- ④ サステイナブルスクール認定校
- ⑤ 文部科学省教育課程特例校

#### 5 本校では、国際的に活躍できるグローバル・リーダーに求められる国際的素養を次の5つの能力の向上によって醸成されると考えています。

- ① 国際的な視野に立って思考する能力
- ② 外国語でコミュニケーションする能力
- ③ 寛容な態度をもって問題を解決する能力

- ④物事を主体的に探究する能力
- ⑤自らを省察して多面的に評価する能力



## 【2】研究開発概要

(様式4) 2019年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	がっこうほうじんくりもとがくえん なごやくさいらゆうがっこう・こうとうがっこう				②所在都道府県	愛知県
2019～ 2021	①学校名	学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数				⑤学校全体の規模		
	1年	2年	3年	4年	計	普通科(中高一貫コース)	210名
普通科 (中高一貫コース)	76	71	63		210	普通科	84名
普通科	34	19	31		84	国際教養科	164名
国際教養科	62	39	63		164	総計	458名
⑥研究開発 構想名	持続可能なランドスケープの設計 ～天白川水系から世界を俯瞰する～						
⑦研究開発の 概要	持続可能なグローバル社会の実現のために、外部組織と連携したコンソーシアムを構築し、地域と国際社会が抱える諸問題を解決できる人材の育成を目的とした教育カリキュラム開発を実施する。						
⑧研究開発の 内容等	⑧ 1 全体	<p>(1) 目的・目標：本校は、建学の精神「フロンティア・スピリット(開拓者精神)」を軸に国際教育力点を置き、日々力を入れ、「グローバル社会において本当に必要なことを見極めようとする精神を持ち、持続可能な開発を担うことができる」生徒の育成を教育方針としている。そのために①国際的な視野に立って思考する②外国語でコミュニケーションする③思いやりと優しさを持ち、公平な態度をとる④物事を主体的に探究し、問題を解決する⑤ふりかえりの力を持ち、物事を多面的に評価する」の5項目を生徒がとるべきグローバル・リーダーの行動指針とし国際的素養の涵養を目指した。本研究開発では、その教育活動に対して、グローバル社会においても地域社会との共生を視野にいれ、持続可能な社会の実現に向け、自ら積極的に社会と関わることができるグローバル人材育成に適した教育環境づくりを目指す。そのために以下の3つの研究開発を実践する。</p> <p>[A] 地域と連携したランドスケープ推進コンソーシアム構想 [B] グローカル型地域協働教育カリキュラムの構築 [C] 国際教育とキャリア教育の再編成と体系化</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説：その活動において、豊富な外国語学習カリキュラムや海外研修等の国際理解活動により海外志向が強いが、地域における社会的活動が限定的で、外部組織との連携・協力が薄い傾向がある。そこで、本研究開発では、これまで行われてきた国際理解活動(SGHアソシエイト活動含む)、ESD活動(ユネスコスクール・サステナブルスクール)、国際バカロレアで培われた教育活動及びネットワークをもとに、より効果的な地域・国際探究活動を実践していく。本研究開発の実践は、現行の実践活動をより統合的・横断的な視点でカリキュラムを改善・深化することができ、持続可能な開発を担うグローバル人材の育成につながることを考え、仮説①・②・③を設定した。</p> <p>[仮説①] グローカル型地域協働教育カリキュラムの実践により探究的な思考の獲得と地域に参画するリーダーが育成される。 [仮説②] 先進的な指導法・評価法の開発を行うことにより教員の指導法・評価法の向上と質の高い地域・国際教育を提供できる。 [仮説③] コンソーシアムと連動したキャリア教育の実践をすることで、自らのキャリアの構築にむけた積極的な活動ができる。これらの仮説に基づく研究開発により、グローバル課題解決学習の明確化、地域課題解決に向けた活動の継続、生徒のグローバル人材としての素養獲得の効果が期待できる。</p> <p>[5つのグローバル人材像の設定]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 外国人と共生することができる人材</li> <li>2 世界の国々へ発信できる人材</li> <li>3 世界から地域を客観的に眺められる人材</li> <li>4 地域課題を具体的な解決へ導く人材</li> <li>5 コミュニティを形成できる人材</li> </ol>					

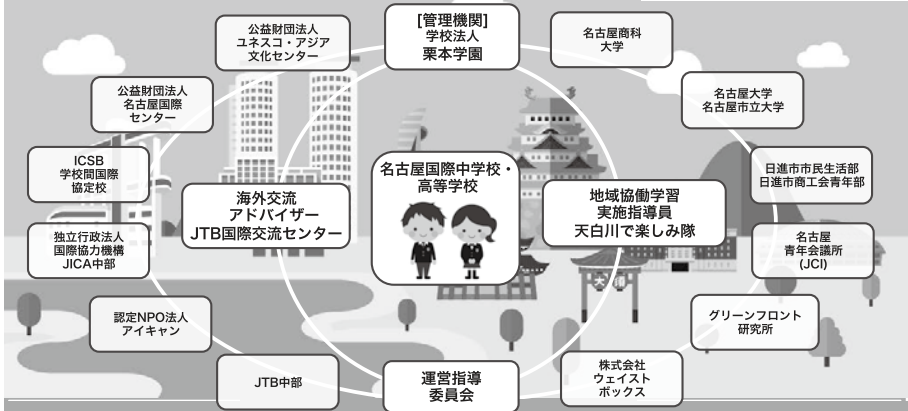
<p>⑧ 研究開発の内容等</p> <p>⑧ ― 2 具体的内容</p>	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>地域協働教育カリキュラム開発を実践していく上で (a) ～ (d) のテーマを設定し、カリキュラムを体系化し検証と改善を行う。(a) アカデミック・スキル獲得プログラムの構築 (b) コース・教科横断型指導法による先進的な学習スタイルの構築 (c) グローバルキャリア教育の構築 (d) 地域課題研究：地域が元気になる持続可能なランドスケープとは？～天白川水系から世界の水と人の関わりを考える～ (a) ～ (d) のテーマのもと、学年ごとにAichi地域探究カリキュラム(1年)、国際理解研修カリキュラム(2年)、キャリアデザインカリキュラム(3年)を設定し、教育活動を行う。[外国語教育] 日本人教員やネイティブ教員によるディスカッションやプレゼンテーションなど主体的・対話的で深い学びによるアカデミック・イングリッシュ・スキル獲得プログラムの構築と実践を行う。また、実践的な語学力を用いて地域の留学生と交流する。[教科教育教科連携カレンダーⅠ～ⅢによるSDGsを軸とする横断型教科教育を実践する。[学校設定科目] SIA特論：探究学習分野「多文化共生と減災(社会的視点)」「経済活動と貧困(経済的視点)」「社会生活と循環(環境的視点)」を設定し、世界規模の広い視野で地域・国際課題を考察していく。また、SIA特論Ⅱ高大連携講座では、名古屋商科大学の教員を招聘し、専門的な視点から教育実践を行い、天白川水系を1つのランドスケープとして地域課題研究を行う。[総合的な学習の時間] 進路指導部と国際理解研修と連携したグローバルキャリア・プログラムの実践を行う。また、国内外の地域開発に携わる専門家による国際理解講演会を実施する。[地域協働コンソーシアムゼミ] SIA特論における地域課題研究を発展させ、フィールドワークによる地域課題の調査・分析を行い、コンソーシアムにおける解決策を提言する。また、地域の社会や環境問題に先進的に取り組んでいる海外の国や地域へゼミのリーダーを中心とした海外研修を計画・実施する。[活動報告会・啓発活動] 研究成果報告会(年2回)</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>年間計画を策定し、定期的にカリキュラム実施内容の確認・改善に関わる体制を整備する。教科主任の指導報告を元に以下の[1][2][3]にて、検証を行い、改善等を行う。[1]教科主任会(月1回)：全教科教員 [2] 地域協働推進委員会(隔週)：地域協働学習実施指導員・国際教育推進部 [3] 国際教育推進委員会(隔週)：学校長・中高担当部長・経営企画部長・教頭・国際教育推進部教員・外国人教員(IBコーディネーター)・事務職員・海外交流アドバイザー</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>英語によるイメージン授業の実践―文部科学省教育課程特例校、探究型学習を取り入れた英語による授業実践―IBDP科目</p>
<p>⑨その他特記事項</p>	<p>IBDP認定校・文部科学省委託事業ESD重点校形成事業サステイナブルスクール認定校・ユネスコスクール認定校</p>

### [3] 概念図

## 持続可能なランドスケープの設計

～天白川水系から世界を俯瞰する～

名古屋商科大学  
名古屋国際 中学校  
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL



#### 研究開発概要

- A 地域と連携したランドスケープ推進コンソーシアム構想
- B グローカル型地域協働教育カリキュラムの構築
- C 国際教育とキャリア教育の再編成と体系化

#### 成果普及に向けた取組

- 研究成果報告会
- インターネット情報公開
- タブロイド判広報紙の発行
- 研究紀要「天白川白書」の作成

外国語教育			教科教育	総合等	[学校設定科目] SIA特論	[探究型ゼミ] 地域協働 コンソーシアムゼミ
(a) アカデミック・スキル獲得プログラムの構築			(b) コース・教科横断型指導法による先進的な学習スタイルの構築	(c) グローカルキャリア教育の構築	(d) 地域課題研究 地域が元気になる持続可能なランドスケープとは？ ～天白川水系から世界の水と人の関わりを考える～	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ コミュニケーション力獲得…ディスカッション、プレゼンテーション、スピーチ、ディベート、論文</li> <li>○ Society 5.0に向けたIT機器/設備の活用による教科のICT化</li> <li>(a) 全教室インターネット環境 (b) iPad/Mac PCの活用 (c) World Online Class Room/ALL教室活用</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際バカロレアモデルと現行指導法のミックスアップ→先進的指導法</li> <li>○ SDGsを軸にした横断型教科教育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 世界を視野に入れたグローバルリーダー</li> <li>○ 地域/国際人の働き方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 世界から地域、地域から世界の双方向の視野で持続可能な地域づくり・まちづくりの探究</li> <li>○ 世界・地域と協働し、将来の生き方・働き方の考察</li> <li>○ 地域リーダーの素養の獲得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 世界の社会課題や多種多様な文化的背景から自らの地域を考察</li> <li>◆ 天白川水系フィールドワーク・コンソーシアムとの協働→持続可能な地域の良さの発見</li> </ul>
【第1学年】Aichi 地域探究カリキュラム						
English Skills I Oral Expression I コミュニケーション英語 I		教科連携カレンダー I の実施		国際理解講演会 総合 ：地域キャリア	SIA特論 I	◆ ゼミ専攻：分野課題設定、天白川調査・協働計画→コンソーシアムとの対話(グローバルリーダーへの取材)
【第2学年】国際理解研修カリキュラム						
English Skills II Oral Expression II コミュニケーション英語 II		教科連携カレンダー II の実施		国際理解講演会 総合 ：国際キャリア	SIA特論 II	◆ 海外研修フィールドワーク→学校間国際協定校と情報交換、留学生等との意見交換会
【第3学年】キャリアデザインカリキュラム						
模擬国連 Oral Expression III コミュニケーション英語 III		教科連携カレンダー III の実施		国際理解講演会 総合 ：生き方探究	SIA特論 II / SIA特論 II 演習 SIA特論 II 高大連携講座 ◆ 持続可能なランドスケープデザイン	◆ 課題研究論文 ◆ 研究成果報告会

外国人と共生することができる人材

世界の国へ自らの考えを発信できる人材

世界から地域を客観的に眺められる人材

地域課題を具体的な解決へ導く人材

コミュニティを形成できる人材

#### 【4】研究開発実施状況報告

- 1 事業の実施期間：2021年4月1日～2022年3月31日
- 2 指定校名・類型：名古屋国際中学校・高等学校（学校長名 小林 格）  
類型グローバル型
- 3 研究開発名：持続可能なランドスケープの設計～天白川水系から世界を俯瞰する～
- 4 研究開発概要：持続可能なグローバル社会の実現のために、外部組織と連携したコンソーシアムを構築し、地域と国際社会が抱える諸問題を解決できる人材の育成を目的とした教育カリキュラム開発を実施する。
- 5 教育課程の特例の活用の有無：学校設定教科・科目を開設している。
- 6 管理機関の取組・支援実績
  - (1) コンソーシアムについて

##### ①コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
[管理機関] 学校法人栗本学園	栗本博行（理事長）
名古屋国際中学校・高等学校	小林 格（校長）
海外交流アドバイザー	中野 憲（JTB教育事業ソリューションセンター長）
地域協働学習実施指導員	岡田 あつみ（天白川で楽しみ隊 代表）
名古屋商科大学	亀倉正彦（名古屋商科大学経営学部 教授） 伊藤 博（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科 教授）
東京大学	秋田 喜代美（東京大学大学院教育学研究科 研究科長）
名古屋市立大学	曾我幸代（名古屋市立大学大学院人間文化研究科 准教授）
du Lycée Clemenceau （クレマンソー公立高等学校）	Christian BERREHOUC（校長）
Immaculate Conception School of Baliuag （イマキュレイトコンセプション学校バリワグ校）	Alexander O CRUZ（上席副校長）
日進市市民生活部環境課	近藤伸治（日進市市民生活部環境課 課長）
国際連合地域開発センター（UNCRD）	浦上奈々（研究員）
独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター	八重樫 成寛（JICA中部 市民参加協力課専任参事）
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）	田村哲夫（理事長）
公益財団法人名古屋国際センター	勝 千恵子（国際協力課 広報情報課主査）
公益社団法人名古屋青年会議所（JCI）	神谷勇輝（SDGs実践委員会）
認定NPO法人アイキャン	蒔 健太郎（事務局長）
株式会社グリーンフロント研究所	小串重治（代表）
株式会社ウェストボックス	鈴木 修一郎（代表取締役）

②活動日程・活動内容

コンソーシアムは、2021年2月21日（土）にて設置要綱を確認

(2) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

海外交流アドバイザー：JTB国際交流センター 中野 憲 氏（非常勤職員・雇用）

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
2020年5月19日(火)	運営指導委員会に出席 ・コンソーシアムについて ・研究開発について（休校期間中の本校の取組、2年目の活動についての改善案）

(3) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

天白川で楽しみ隊・代表 岡田 あつみ 氏：フィールドワーク等での助言等

②実施日程・実施内容

日程	内容
2020年5月19日(火)	運営指導委員会に出席 ・コンソーシアムについて 研究開発について（休校期間中の本校の取組、2年目の活動についての改善案）
2020年10月2日(金)	天白川フィールドワークに関する助言
2021年5月17日(月)	運営指導委員会に出席・2020年度実践活動及び2021年度事業計画についての助言
2022年2月12日(土)	持続可能な未来への対話セッションに出席 ・実践活動に関する助言
2022年3月3日(木)	運営指導委員会に出席 ・2021年度の実践活動及び3年間の振り返り ・次年度以降に対する助言 管理機関からの振り返りと今後の展望

(4) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

管理機関 亀倉正彦 教授

(名古屋商科大学経営学部)

運営指導委員 北村友人 教授

(東京大学大学院教育学研究科／東京大学未来ビジョン研究センター)

運営指導委員 伊藤 博 教授

(名古屋商科大学大学院マネジメント研究科)

海外交流アドバイザー 中野 憲 氏

(JTB教育事業ソリューションセンター センター長)

地域協働学習実施指導員 岡田 あつみ 氏 (天白川で楽しみ隊 代表)

<JTB>

小野田 一樹 氏 (教育事業ソリューションセンター 開発プロデューサー)

松村幸博 氏 (教育旅行名古屋支店 営業部長)

伊藤尚哉 氏 (教育旅行名古屋支店 本校担当)

<名古屋国際中学校・高等学校>

栗本貴行 (中高担当部長) 小林 格 (校長) 大西直子 (普通科教頭)

鈴木 悟 (国際教養科教頭) 片山寿弘 (経営企画部長)

黒宮祥男 (国際教育推進部主任) 内藤圭祐 (入試広報部長・国際教育推進部)

村山瑛紀 (国際教育推進部) Christopher Michael Yap (IBコーディネーター)

Steven McLellan (IBサブコーディネーター)

鈴木真以 (事務局 国際教育推進アシスタント)

## ②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
2021年5月17日 (第4回)	運営指導委員会に出席 2020年度実践活動について ・オンラインによる探究学習 ・国際理解研修等の取組 ・未来共生ウォーターコンソーシアム主催による持続可能な未来への対話セッション2021の実施 2021年度事業計画について ・グローバル型地域協働教育カリキュラムの構築について a オンライン型国際理解研修 b カリキュラム (総合的な探究の時間の体系化) c 天白川流域に関する探究学習 ・地域と連携したランドスケープ推進コンソーシアム構想について
2022年3月3日(木)	2021年度実践活動について <主な活動> ・全国高校生フォーラム ・全国サミット ・持続可能な未来への対話セッション2022 3年間を通じての生徒の変化 名古屋国際が今後目指す教育プロジェクト

## (5) 管理機関における取組について

### ①管理機関 (コンソーシアム含む) における主体的な取組について

(ア) コンソーシアム実施規定の作成

(イ) COVID-19感染拡大に伴う国際理解研修実施方法の見直しと検証

- (ウ) 継続的な取組を行うための教員の人事面における配慮
  - (エ) オンライン授業・オンライン国際理解研修に対応した機器や通信設備の設置
  - (オ) 高大連携による実践活動の支援
- ②事業終了後の自走を見据えた取組について
- (ア) 国際理解研修及び講演会テーマにグローバル型要素を加え改編する。
  - (イ) 3年後までにグローバル型要素をカリキュラム及び行事等に含ませる。
  - (ウ) 3年後に費用面での負担増になる取組をせず、運用面やシステム、カリキュラムの再編を行う。
- ③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について  
名古屋市立名東高等学校・奈良県立国際高等学校・高知県立高知西高等学校等と事業連携協定を締結した。

## 7 研究開発の実績

- (1) 研究開発の内容や地域課題研究の内容について
- ①Aichi地域探究カリキュラムにおいて、総合的な探究の時間「地域キャリア」の実践として、高校2年生（普通科グローバル探究クラス）では、グループごとによる企業調査や現地の訪問・フィールドワークを含めた地域課題に向けた実践活動を行った。その活動内容をポスターやホームページにまとめた。昭和区役所（愛知県名古屋市）との連携も2020年度よりもさらに強化し、八事興正寺公園を中心とした地域でのイベントを企画し積極的に参加をした。
  - ②地域協働コンソーシアムゼミの高校3年生は、地元の天白川水域のフィールドワーク・オンライン国際理解研修（カンボジアコース）による水辺のまちに関する調査・学校設定科目SIA特論や総合的な探究の時間における持続可能なまちづくりによる学びなどを統合したグローバルな視点を持った天白川水域におけるランドスケープを考察したレポートをまとめた。（『天白川白書』）
- (2) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）
- ①各教科：SDGsを軸にした横断型教育から理系・文系の枠を超えたカリキュラムの検討。
  - ②総合的な探究の時間：（高校1年次）地域キャリアをテーマに地元企業に関する調べ学習及び「CMを作ろう」という課題発表を行う。（高校2年次）企業訪問を含めたフィールドワークを実施。（高校3年次）自らの進路とキャリアを考えることをテーマにSIA特論Ⅱと連動し、未来に生きる自分を描いた。
  - ③学校設定科目：SIA 特論Skills・SIA 特論Ⅰ・Ⅱ・高大連携の実施。
- (3) 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させた教科等横断的な学習とする取組について

(4) 類型毎の趣旨に応じた取組について

グローバル型＝オンライン型国際理解研修を実施した。2021年度はカンボジアコースに加え、オーストラリアコースを新設した。

(5) 成果の普及方法・実績について

校内の研修報告会や年次の研究報告会の実施、ホームページの改編・Facebook・Instagramへの投稿、環境デーなごや（9月オンライン開催）、SDGs AICHI EXPO（10月）などの地域イベントにおいて活動の発表・ユネスコスクール交流会、全国高等学校グローバル探究オンライン発表会・全国サミット参加などの文部科学省等の国・自治体や教育機関が関わるイベントにおける発表を行った。

(6) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

国際教育推進委員会（隔週）におけるグローバル型カリキュラム・マネジメントの実施

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

国際教育推進委員会下の組織による計画実践やアイデアの創出を行う。その組織においてプロジェクトの役割を決定し、実践活動を行う。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて国際教育推進委員会がその中心となっている。（学校長・教頭等参加）

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

未来共生ウォーターコンソーシアム主催による持続可能な未来への対話セッション2021にて実施した。

## 8 次年度以降の課題及び改善点

2021年度の実践活動において課題は3つある。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 オンライン構築という最優先事項への影響によるカリキュラム開発の遅れの是正と新しい時代における学びの形の構築</li><li>2 理系や文系の枠をなくした生徒の多様な学びを推進するカリキュラムの構築</li><li>3 ニューノーマル時代における新しい学校の仕組み、新しい学校連携の形、新しい先端技術の活用法への挑戦</li></ol> |
|---|

特に、事業連携協定を締結した学校とともに情報共有することで、オンライン型国際研修を含めICT機器を活用した新しい学び方について公立／私立、愛知県／愛知県外、国内／海外での検証を行うことができる。また、オンラインを活用した会議システムのデメリットの部分を新しいシステムを活用することにより改善することも必要である。今後、COVID-19感染による不安定な社会状況が好転した時は、オンラインとリアルが共存する



新しいコミュニケーションが確立する。そして、コミュニケーションの内容や距離的・経済的な理由でどちらかを選択する社会になるだろう。本校としては、オンラインとリアル  
のコミュニケーション方法以外に学生らしいコミュニケーションの方法を構築することを  
次年度以降の課題として考えていきたい。

## 【5】2021年度活動報告について

2021年度も2020年度同様にCOVID-19感染拡大の影響により当初の計画を変更して実施する年度となった。ただし、2020年度との大きな違いは、オンラインを活用した手法が確立されている点である。2020年度は、通常授業や対話のやり方、他校等の交流、国際理解研修など人と人との接触を避けつつも、いかに探究活動を続けるかを考えながら、チャレンジを繰り返した。そのチャレンジにおいて検証と改善を行い、オンラインの活用手法を獲得した。その結果、2021年度の活動は、こうした手法を本校だけでなく他の学校へ広げ、ニューノーマル時代における高校生の学びのあり方を構築する新しい動きを模索した。以下、その主な5つの動きについて紹介する。

---

### [1] 事業連携協定

2021年度は、他校等の事業連携を強化した。特に以下の3校とは事業連携協定を結び、実践活動の共有や部活動交流などを行った。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 名古屋市立名東高等学校（愛知県）</li><li>② 奈良県立国際高等学校（奈良県）</li><li>③ 高知県立高知西高等学校（高知県）</li></ol> |
|---|

事業連携協定の主な内容は、以下である。

（名称）ニューノーマル時代における国際教育の推進に向けた連携に関する覚書

（目的）新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によって迎えたニューノーマル（新しい生活様式）時代における国際教育を互いに連携することで、コロナ禍で浮き彫りとなった国際教育を実践する上での諸課題の解決を図り、グローバル人材の育成を推進する。

（連携事項）以下、相互の連携

- （1）国際交流に関すること。
- （2）海外留学に関すること。
- （3）持続可能な開発目標に関すること。
- （4）その他、国際教育の推進に寄与すると双方が認めるもの。

（情報の開示）取組の情報開示については、双方及び関係者で協議して決定する。

（有効期間）締結の日から令和7年3月31日までとする。ただし、期間満了の3か月前までに双方から特段の意思表示がない場合には、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。



名古屋市立名東高等学校との調印式



奈良県立国際高等学校との調印式

この事業連携協定は、国際的に活躍できる人材育成に重点を置く高等学校と行い、COVID-19による海外渡航ができない社会状況でも学校と学校が連携し、本校が実践したオンライン型国際理解研修の手法や留学生や自校がある地域での国際的な活動を共有することができるネットワークを構築することができた。

2022年2月に実施した第2回未来共生ウォーターコンソーシアムでは、「国内の学校との交流」セッションで連携3校の生徒が事前にオンライン上で約1時間対話した内容に関するセッションを行った。3校の生徒は、以下の内容で交流を深めた。

- |   |
|---|
| <p>(名 称) 3校交流Zoomミーティング<br/>         (日 時) 2月8日(火) 16:15~17:00<br/>         (参加校) 名古屋市立名東高等学校、奈良県立国際高等学校、名古屋国際高等学校<br/>         (目 的) ① 3校交流を通して、親睦を深め、今後の学校や個人の活動への刺激を得る。<br/>         ② 若者世代(Z世代)の考えを明確にし、大人世代に疑問を提起する。</p> |
|---|

## 〔展望〕

今後は、グローバルな実践活動に関する協働研究や新しいオンラインシステムを活用した環境での交流を視野に入れ、交流を深めていく。また、海外姉妹校との交流の機会も増やすことで、生徒たちにとってよりグローバルな探究活動を深めることになる。将来的には国際系の学校の協働ネットワークの構築を目標としていきたい。

## 〔2〕学校間交流

事業連携協定を結んだ学校以外にも、以下の学校と交流活動を行った。他学校との交流に関して、外部交流会や研修会など本校生徒が学校外へ活動の輪を広げ、SNSなどを利用した外部発信がきっかけになったものが多い。そうした点から、学校間交流は、教員や生徒が積極的に「交流を求める」前向きな姿勢と行動力が必要である。また、交流に関しては、「とりあえず、生徒同士話をさせてみよう」という教員の間での比較的軽いイメージでの交流を両校で持つことができれば実現は容易にできる。交流において、実践報告や発表などの計画を詳細に決めることも必要な場合もあるが、それが教員の業務に圧迫を加える可能性も否めない。論理から入らず、実践からやってみるという姿勢が交流を推進するキーワードではないかと考える。

- ① 私立鹿児島第一高等学校（鹿児島県）
- ② 私立高松中央高等学校（香川県）
- ③ 宮城県仙台第三高等学校（宮城県）

①私立鹿児島第一高等学校との交流は、本校のSDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践活動についての問い合わせから始まった。

鹿児島第一高等学校でもSDGsに関するクラブを立ち上げたが、その活動について本校生徒へどのように活動をすればよいかのアドバイスを受けたという問い合わせである。問い合わせを受け、オンライン上で両校生徒が交流を行った。

最初は、生徒同士緊張をしている様子だったが、しばらくすると友達のような会話へ変化した。そして、「鹿児島第一高校で何を取り組めば良いか探している」という話から、「火山灰」の活用はどうかという話になった。鹿児島では火山灰は当たり前にある課題であったが、当たり前すぎて課題としての認識がなかった点を本校生徒との話の中での気づきとなった。その後、鹿児島第一高校では、火山灰を使ったアートなどのアイデアの創出が行われた。本校には、火山灰が郵送で送られてきて、今後本校生徒が考える活用法も含め、再度交流を持つ予定



私立鹿児島第一高等学校とのオンライン交流の様子

である。

- ②私立高松中央高等学校との交流は、岡山県で開催されたサステナブル・ブランド国際会議（岡山大会）で知り合ったことがきっかけだった。高松中央高等学校は、点字などを活用したボランティアを実践している。本校生徒との交流では、そうした両校の活動を共有し、愛知県と香川県の違いなど地域性について素直に楽しんでいる姿が見受けられた。



私立高松中央高等学校とのオンライン交流の様子①



私立高松中央高等学校とのオンライン交流の様子②

- ③宮城県仙台第三高等学校との交流は、2022年2月22日ACCU主催の「Learning for Empathy：バングラデシュ、インドネシア、パキスタン、スリランカに対する日本との協力による教員交流支援プログラム」における国内最終ミーティングにて行われた。本校生徒は、高校1年生5名と教員2名が参加した。このプログラムは、「Empathy」をテーマに英語で動画を撮影し、上記の国々と共有するものであり、本国内最終ミーティングは、その動画の内容の共有と両校の質疑応答をした。ミーディングは、教員と生徒がオンライン上の別室に分かれ、終始和やかに議論が進んだ。

### [3] オンライン型国際理解研修

オンライン型国際理解研修に関しては、2020年度カンボジアコースを実施したが、その目的は、「海外渡航ができない代わりにオンラインで海外の様子を知る。」ではなく、「オンラインでしかできないような海外フィールドワークを実践し、経済的に安価でかつ魅力的なニューノーマル時代における新しい国際理解研修を開発する。」ことを目的とした。そして、2021年度は、カンボジアコースに加え、オーストラリアコースも増設したオンライン研修を可能にした。海外研修に関しては、必ず「オンラインとリアル」についての議論になる。それぞれのメリットとデメリットがあるのは、海外研修だけでなくミーティングにおいてオンラインシステムを利用した時に誰もが体感することである。以下にオンライン型海外研修と海外渡航を伴う研修におけるメリットとデメリットを挙げる。

	メリット	デメリット
海外渡航を伴う研修	五感による経験 →記憶に残りやすい。	高価・安全面の配慮が必要、時間の制約、対話が少ない。社会的状況の変化に弱い。
オンライン型海外研修	安価・計画の変更がしやすい。 高校生ではできないことへのチャレンジができる。 対話を中心となるので会話が増える。 →情報量が多い。	視覚と聴覚のみの体験になる。

オンライン型海外研修と海外渡航を伴う研修では双方にメリットがある。特に、オンライン型海外研修は、圧倒的に現地の人との会話量が増加した。また、高校生が絶対に立ち入ることができない場所や会うことが難しい人との対話など情報量が多い。海外渡航をしても、コミュニケーションが苦手な生徒は、案内を聞くだけになったり、観光地を見たり、買い物をしたりという経験になりがちだが、オンライン型海外研修だと会話をしないと前に進まない。そうした点も対話力を深めることができる。ただし、海外渡航に比べ、感覚的な情報が乏しい。そうした点を考えると、オンライン型海外研修と海外渡航を伴う研修をハイブリッドに実践すると探究学習においてより効果的な結果が生まれると考える。本校のオンライン型国際理解研修の実践は、旅行業者や現地のコーディネーターにとっても初めての取組であった。その点も考えると、このオンラインでの挑戦がニューノーマル時代の新しい旅行の形として残る可能性もある。今後は、この手法を用い、海外の高校生に対して、日本を紹介する実践に活用していきたい。

両コースの詳細については、【6】海外研修報告にて紹介をする。

#### [4] 交流の多様化

事業初年度と2年目における実践活動の中で産官民学のネットワークが広がった。事業最終年度では、そのネットワークの活用と交流の幅が大きく広がったことが挙げられる。[1] 事業連携協定や [2] 学校間交流で紹介できない交流が授業や部活動、研修会や実践発表会で行われた。こうした交流で得た生徒にとって必要な素養は以下の5つである。

- (1) 平時におけるグローバルな実践の蓄積をしておくこと。
- (2) 常に対話の練習をしておくこと。
- (3) 理想の未来を描けるようにしておくこと。
- (4) 人や環境に対する思いやりを持ち、常に実践すること。
- (5) 誰も考えないことに常にチャレンジすること。

そして、こうした素養を身につけた生徒とそうでない生徒の違いは、その生徒と会話した時にわかる。一時的に実践して一時的に準備して発表した生徒には、欠けているものがある。その欠けているものは、日々の積み重ねで身につくものであり、その環境を整えるのが学校としての役割である。そうした意味も踏まえ、交流のやり方や交流対象者、交流の内容など多様な形で生徒たちに体験させることが大切ではないだろうか。本校生徒が本

年度交流した事例が以下である。

[産] 桂新堂株式会社・株式会社若鯨家・株式会社エコフォレストなど

[学] 名古屋商科大学・なごや環境大学・事業連携校や交流校、海外の小学校など

[官] 愛知県・名古屋市環境局・昭和区役所（地域力推進室）・ユネスコバンコク事務所

[民] 八事里山づくりの会・テラスポ鶴舞

## [5] 愛知環境賞優秀賞受賞及びマスメディアでの報道

愛知環境賞において、多くの企業・団体等の中から本校は優秀賞を受賞した。受賞テーマは、「多様なネットワークを活用した都市型ESDモデルによるグローバル人材の育成」である。本受賞は、愛知県の学校では本校のみであり、多様なネットワークを構築・活用しながら地域と連携しグローバルな人材の育成を目指したことが評価された。指定から3年間の実践活動の集大成であり、本その他にも、CBCテレビの報道番組、中日新聞、中日新聞「ハピなびなごや」、環境情報紙「Risa」などの誌面でも本校の活動が紹介された。また、NHKのSDGs番組「未来王」へのオンライン出場も果たした。



受賞のポイント

国内外の多様なネットワークの活用により、生徒自らがローカルな課題やSDGsに関わる課題を設定し、解決に向けた取組を行うとともに、グローバルに発信・交流する人材を育成する仕組みを構築したことは、環境意識の向上とSDGsの達成に大きく貢献するものと評価された。

概要

- 名古屋国際中学校・高等学校は、グローバルな視点を持ってコミュニティを支える地域（ローカル）のリーダーを育成する「グローバル型」の指定校として、生徒自らが、SDGsの達成に向け、様々な社会課題に取り組みしている。
- 特に、自校の課題（SDGs未来倶楽部 Sus-Teen）は、様々な環境課題の解決に向け、他校の企業を始め多様な主体と連携し、独自のESDモデルを確立している。



先駆性・独創性

- 食品ロス及び廃棄物削減に向けた取組として、地元企業等と連携し様々なアップサイクル商品を開発

「SDGs未来倶楽部 Sus-Teen X 企業」によるコラボ商品

サステナブルえびせんべい	サステナブルおちんどん	サステナブルベトックス
<ul style="list-style-type: none"> <li>●ロハス（ベトナム）産物産品に連携していた企業との共同での開発から新出したえびせんべい</li> <li>●「ベクター」は、SDGs12「つくる責任/つかう責任」をイメージしてデザイン</li> </ul> <p>製造株式会社 株式会社若鯨家</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●商業予定のちやんこ製造過程で発生するろくろの破れから製造したキャンドル</li> <li>●星ヶ丘ガラスや名古屋理科大学等においてワークショップを実施</li> </ul> <p>製造株式会社 株式会社エコフォレスト 東京ローソク製造株式会社 有限会社マルク電機 中環建設工業株式会社</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ベトクからリサイクルされた糸を使用したベトックス</li> <li>●廃棄する予定だった漬物の残り汁を染料として活用</li> </ul> <p>製造株式会社 PURE TRIP</p>

啓発効果

- 企業との連携により開発したアップサイクル商品は消費者の環境意識の向上に寄与する。
- 企業、行政、大学など多様な団体との交流を通じて生徒自らの意識改革につながる。
- SDGsイベントや発表展示会、学内での活動報告会等多方面に対して、取組の紹介や啓発活動を実施している。
- ユネスコ（りま）主催の国際学生フォーラム2021のコースリーダーとして、海外の学生とともに「グローバル貢献」と「学生が疑問ごと」についてディスカッションを実施し、SDGsに対する理解を深めた。



イベント出展の様子

## 【6】海外研修報告

### A オンライン国際理解研修（カンボジアコース）

2021年7月20日（火）～12月11日（土）

#### [1] 研修の目的

カンボジア・トンレサップ湖畔を中心とした課題解決型学習（PBL）によるプロジェクト活動を通じ、海外の生活や文化、歴史や産業を学び、国際的な視野に立って、物事を考える態度を養うことを目的とする。またカンボジア現地調査員と調査内容の計画等を議論、フィールドワークでは現地の方々とのコミュニケーションを重視することで対話する力を身につけることを目指した。本研修は、COVID-19感染拡大により当初予定していた海外での研修からオンラインによる研修に切り替え、また昨年度に実施したノウハウをもとにさらに研修内容をブラッシュアップした。また開催期間も当初は7月から8月の2ヶ月間での実施を予定していたが、カンボジアでの感染拡大を受け、当初のスケジュールを大きく変更し、半年に及ぶ長期間にまたがる形となったが、その中でもオンラインでしかないことを追求し、新しい学びの創出を図った。

<オンライン国際理解研修（カンボジアコース）における3つのテーマ>

- 1 カンボジア・トンレサップ湖畔における社会課題の発見とその対策の考察
- 2 異文化理解と交流
- 3 「水」「まちづくり」に関わるPBL活動

#### [2] 対象生徒

高校2年（普通科中高一貫クラス・国際教養科）23名

引率教員：7名

#### [3] オンライン設備

オンラインツール：Zoom（Zoom Video Communications社）

<学校側>

生徒：iPad（Apple社）23台、教員：iPad（Apple社）7台

教室（5教室）：Wi-Fi設備

<カンボジア側>

現地調査員：iPhone等の携帯電話5台

現地事務所：PC

#### [4] 研修の主なスケジュール

2021年 5月10日（月）：生徒説明会①

5月17日（月）：生徒説明会②

6月30日（水）：研修参加者決定



- 7月10日(土):研修グループ決め(5チーム編成)
- 7月20日(火):事前学習①
- ・1つの教室に生徒全員が集まり、カンボジアやトンレサップ湖についての講話を受け、カンボジアの歴史、文化、社会課題及びトンレサップ湖、コンボンブルック村に関する内容や社会課題を学ぶ。
  - ・講話の内容について質疑応答を行う。
- 7月21日(水):事前学習②
- ・1教室に生徒全員が集まり、コンボンブルック村と中継を繋ぎ、村の現状について見学をする。
  - ・村の様子から生徒はグループごとにミッション作成を行う。
- 7月27日(火):グループ毎にミッションを提出
- ・随時、オンラインでミッション内容の精査を行い、今後のグループワークのスケジュールリングを行う。
- 8月 3日(火):オンラインによるグループワーク①
- ・グループ毎に現地調査を行う。
- 10月 9日(土):オンラインによるグループワーク②
- ・グループ毎に現地調査を行う。
- 10月30日(土):オンラインによるグループワーク③
- ・オールドマーケットの見学と買い物を行う。
- 11月26日(金):オンラインによるグループワーク④
- ・現地調査と記念の植樹を行う。
- 12月11日(土):オンラインによるグループワーク⑤
- ・アンコール=ワットを見学する。
  - ・現地から届いた購入品をグループ毎で開封する。
- 2022年 2月12日(土):持続可能な未来への対話セッション2022
- ・校外の方々への活動報告を実施する。
- 2月21日(月):国際理解研修報告会
- ・高校1年生に対し、活動内容のプレゼンテーションを実施する。

[5] オンライン行程表

日付	場所	時間	日程	その他
8月30日(火)	コンボンブルック村内	10:00～ 12:00	・全体説明 ・現地調査員との顔合わせ (1グループ毎に1名の調査員) ・各グループで自己紹介 ・各グループによる調査	※オンライン開始時は、全員同じZoom Roomに入室。その後、ブレイクアウトルームに分かれ、グループ活動を行う。調査終了時もブレイクアウトルームを退出し、まとめや次回の連絡を行う。 ※当初は8月中に全行程を終了する予定だったが、COVID-19感染拡大の影響で、大きくスケジュールを変更した。
10月9日(土)	コンボンブルック村内	10:00～ 12:00	・各グループによる調査	
10月30日(土)	シェムリアップ市内	10:00～ 12:00	・各グループによる調査 ・市場にて買い物体験 (購入品は空輸で日本へ)	
11月26日(金)	コンボンブルック村内	12:00～ 14:00	・各グループによる調査 ・マングローブ植樹	
12月11日(土)	アンコール=ワット及び周辺地区	10:00～ 12:00	・各グループによる調査 ・アンコール=ワットの見学 ・購入品の開封	

[6] 活動内容について

生徒を5グループに分け、「カンボジア・トンレサップ湖畔における水・まちづくり」をテーマにし、グループごとに以下のテーマを設定した。ミッションとは、現地調査員とともにテーマに関する実践活動を計画、実行することである。

<各グループのテーマ>

Wグループ：「水辺の暮らし～子どもの教育と遊びに迫る～」

Mグループ：「カンボジアの生物と文化について学ぶ」

Iグループ：「コンボンブルック村における村人の対立・犯罪・防犯事情を探る」

GKグループ：「現地の食材を使って日本の食文化をカンボジアへ」

Oグループ：「トンレサップ湖畔で生活をする人々の大切にしているもの」

各グループは、7月27日(火)までに以下のような「ミッション依頼」を作成し、カンボジアに送付した。これを受けて、現地でミッション内容の精査を随時行い、フィールドワークを実施する場所の検討を行った。このミッション依頼は、調査の状況を踏まえ、随時現地と連携を取り、柔軟に変更した。また、当日のスケジュールは、訪問場所やインタビューをする人の選定も事前に決めた人以外にも積極的に行って良いというルールのもと、フィールドワークにおける行動を主体的かつ創造的な発想で実施した。

<例>Oグループのミッション依頼

【調査①】 ミッション依頼		Group No. O
場所	コンボンブルック村	
調査内容	<p>テーマ：『トンレサップ湖畔で生活をする人々の大切にしているもの』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・住む地域によって大切にしているものの違いはあるのか。</li> <li>・湖畔で生活をしている人と街や都市部に住む人で違いはあるのか。</li> </ul> <p><b>【調査①】</b></p> <p>(1) 聞き取り調査&amp;わらしべ長者（物々交換）          (場所) [a] 村の中で比較的、貧困の地域から徐々に裕福な地域へ移動  <span style="float: right;">(道や道路など)</span></p> <p style="padding-left: 40px;">[b] 貧困な家と裕福な家数件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大切にしているものは何か尋ねる。              (比較的多くの人にインタビューできる場所がよい)              (聞き取り対象は、大人、子供それぞれ同数くらい)              →日本でも同様に聞き取り調査を行い比較する。              聞く内容：○大切にしているものはありますか？                        ○ どうして大切にしているのか (理由)                        ○ (欲しいといたらくれるか)</li> <li>・聞き取り調査と並行してわらしべ長者を行う（物々交換）対象は大人のみ、子供のみをそれぞれ行う。              →最終的にどのようなものになるのか？              (どういったものに需要が高いのか？ どのような人が交換に応じてくれるのか？              なぜ交換に応じてくれたのか？を調査する)</li> </ul> <p><b>【場所2】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・村人にインタビューを行うなかで、大切にしている場所があればそこへいく</li> <li>・ない場合は村人の多くが大切にしている場所へ</li> </ul> <p><b>【用意するもの】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイドさんまたは、多賀さんなどで使用していないものやいらぬもの数点 (物々交換用)</li> </ul>	

## [7] 活動の様子



事前研修①



事前研修②

コンボンプルック村と中継をつなぎ、実際の調査現場を視察したり、現地コーディネーターからカンボジアの歴史や文化などの講義を受けた。



事前研修③



事前研修④

生徒はグループでのミッション作成のため、熱心にメモなどを取りながら、真剣な表情で講義や現地の様子を聴いた。



現地の高校生との交流の様子

現地コーディネーターからカンボジアやコンボンプルック村などの地政学的特徴などの説明を受ける。



グループワークの様子①



グループワークの様子②

教室内に1グループがまとまり、現地調査員とオンラインで対話し調査を進める。聞きたいことや行って欲しい場所などは随時指示を出す。



グループワークの様子③



グループワークの様子④

生徒は1人1台iPadを活用し、現地の様子を写真撮影、動画録画などを行い、情報を蓄積する。加えて、重要なポイントなどは手元にメモを取る。



#### 現地調査員による説明

現地調査員は各グループのミッションに合わせ、日本からの指示で調査・行動する。このグループは子ども達から聞き取りを行うため、現地調査員が生徒に代わり、声をかける。



市場での調査の様子①



市場での調査の様子②

市場での調査の様子。グループ毎に現地調査員が興味のあるお店に行き、実際に商品の説明を聞いたり、価格交渉などを行ったりする。日本ではあまり目にしない食材・商品やお肉の解体などを見学することもできた。



小学校見学

現地の小学校で現役の先生にもインタビューを行う。その際に普段使用している教室を見学。



水上生活の調査

水上生活や漁業・観光の現状などを調査。特に観光業はコロナ禍で深刻な落ち込みが出ている。



現地調査員による説明

昨年度に引き続き、SDGsの目標を達成するために、グループ毎にコンブブルック村近辺にマングローブの苗を植樹し、森の豊かさを取り戻す活動を行う。



日本のあやとりを教える



子ども達に自分の夢を描いてもらう

ミッションの1つである「教育と遊び」の一例。現地の子ども達に日本の伝統的な遊びを教えたり、日常的に行なっている遊びの調査を行ったりした。他にも子ども達に「夢」をテーマに絵を描いてもらった。



海老せんべいづくり①



海老せんべいづくり②

ミッションの1つである「日本の食文化」の一例。現地の食材を用いて、海老せんべいを作ってもらい、多くの人に試食してもらう。



海老せんべいの試食

実際に作った海老せんべいを多くの村人に食べてもらい、日本の食文化を知ってもらった。概ね多くの人から高評価をもらった。

## [8] 活動報告会

### ・持続可能な未来への対話セッション2022

2022年2月12日(土)、校外の方々を対象に本校で行われた持続可能な未来への対話セッション2022内にて代表グループが活動報告を行った。本セッションは対面とオンラインの両手段で実施されたので、発表生徒はPCとiPadでスクリーンに投影されたスライドを用い、会場参加の方とオンライン参加の方の両方に研修内容を紹介し、適宜、質疑応答などを行った。



持続可能な未来への対話セッション2022内の発表の様子

対話セッションでは、研修参加者を代表してOグループが「わらしべ長者」についてのプレゼンテーションを行った。



対話セッションの様子

対話セッションは会場を2つに分け、参加者は対面・オンライン問わず、自由に発表を聞きました。



発表者・参加者での記念撮影

当日は計6グループが発表を行い、最後には参加者とともにアトリウムで記念撮影を行った。



・国際理解研修（カンボジアコース）報告会

2022年2月21日(月)、高校1年生全員に対し、活動内容の報告会を実施した。高校1年生の各教室（5クラス）をグループ毎に回り、各グループが作成したスライドをスクリーンに投影する形で発表を行った。高校1年生は各グループの発表を聴き、それを感想シートにまとめた。報告終了後には質疑応答も行われ、様々な質問に丁寧に答えていた。



報告会の様子①

Wグループの発表の様子。現地の子ども達が描いた絵などを見せながら、教育の現状について発表。



報告会の様子②

Oグループの発表の様子。わらしべ長者の結果から、日本とカンボジアの幸せに関する考察を行った。



報告会の様子③

GKグループの発表の様子。クイズ形式などを用いながら、聴き手の興味を引くような発表だった。



報告会でメモを取る様子

高校1年生の生徒は、発表を聴きながら、自身が興味を持ったり、驚いたりした点を熱心にメモしていた。

「他国の教育に関心を持つということ」

和田紗綺（国語科）

他国の教育に関心を持つということは、自分の軸を世界と比べる行為であるため、当たり前であるが、自身の置かれている環境や教育制度を客観視して初めて起こることである。本校では多様な文化背景を持った生徒も多く、国際交流も盛んであるため、「国際教育」に興味を持ち、自分の進路に据える生徒もいる。

Wグループでは、「世界を見られるような高校生を増やしたい」というビジョンを掲げ、「世界の一つとして、日本に興味を持ってもらう」というミッションのもと、調査を実施した。ここで大切となったのは、調査を実施する際の姿勢である。「カンボジア」という国のイメージから、その教育制度や子どもたちの生活を色眼鏡で見えてしまうと、正しい調査ができなくなってしまう。インタビューの際の質問や、抽出する項目に偏りが生まれる可能性があるからだ。そこで我々は、「価値観の違いを尊重し、学ばせていただく気持ちを忘れない」ということを常に心において調査を実施した。

今回、現地の小学校の視察や、教員へのインタビューができたことは、オンライン研修2回目ならではの功績であった。去年度と比べて調査の幅が広がり、生徒が計画したことは全て実施することができた。それだけではなく、現地ガイドは実にフットワークが軽く、道端で課題に取り組む子どもにインタビューができたり、学校帰りの子供を集めて交流をしたりなど、実に多くの体験をすることができた。引率をした生徒は、全員が国際交流未経験者であり、初回セッションでの姿勢は積極的とはいえなかった。しかし、気さくな現地ガイドを間に挟むことにより、生徒たちも徐々に心を開いていき、小さな疑問であっても気軽に質問をできるように成長した。あのような、「なんでも質問していいんだ」という空気は、なかなか作れるものではない。彼らの間には、確実にラポールが形成されていたように見える。もし彼らが現地に行っていたら、積極的な生徒の陰に隠れてしまい、これほど多くの交流をすることができなかつたかもしれない。そう考えると、少人数グループ制のオンライン研修のメリットも見えてくる。

前述したように、Wグループでは「世界を見られるような高校生を増やしたい」というビジョンを掲げた。この「高校生」には、自分たち自身も含まれているのではないだろうか。コンポンプック村の教育に関心を持ち、間にガイドを挟みつつも現地の人々と交流することで、自身も世界を見られる高校生と成長したのである。そこで改めて自身の環境を見つめたときに、今までとは違った視点を得られたことに気づくはずだ。この経験から得た知的好奇心を持って、これからも様々な世界を見てほしい。

---

「カンボジアの文化を学ぶ機会」

村山瑛紀（理科）

生徒達は日頃経験することがない、カンボジアの現地の人との交流から、様々なことを

学ぶことができたのではないだろうか。特に文化に関して、どのように違うのかを知る良いきっかけとなった。

カンボジアでは、井戸の水をよく利用しており、沸騰させることで、飲料水にしたり、お風呂の水として利用したりすることが日常生活の一部だという。現代の日本の生活において、井戸の水をこのように活用することは従来なく、生徒たちにとっては衝撃的であったことであろう。

また、目の前で生きているニワトリをさばいて調理するところも、オンラインで学ぶことができた。現地の食に関する日常の様子を見学することができたわけである。飲食店においては、その場で客の注文したものがメニューになることもあり、観光客や地元の人たちとのコミュニケーションが必要とされる場面であることが伺えた。生徒達もどのようなメニューができるのかを興味深く質問していた。食材は、地元の食材を使い、料理が出されているとのことであった。その中には、ワニを飼育する様子も見られ、生徒達には、新鮮な目撃体験となった。子どものワニを育てていき、それを料理に出して生活している。そのようなお店の状況が分かり、これも良かったと思う。

研修の中では、現地のをリモートで買い物して、配送してもらい実際にこれらのものに触れることが、直接的な体験となったので、単なるインターネットでの研修ではなく、満足感が得られたと思われる。

最後に、コロナ禍でのカンボジア研修では、安全第一に気を遣うこととなったが、現地の人たちや協力していただいた方々には、改めて感謝しなければならないと思う。

---

### カンボジアと我々の生活における『目』の違い

伊藤 惇 (社会科)

今回のカンボジアオンライン研修の中で私のグループは「コンボンブルック村におけるもめ事や犯罪について」を調査した。カンボジア全土の安全について、起きやすい犯罪など、滞在の際に留意することなどは外務省ホームページなどで随時掲載されており、その情報に従えば把握すること自体難しいことではないだろう。しかし、コンボンブルック村においてはどうか。実際にカンボジアの村人があいそうな犯罪はどうか。どのような対策を行っているか。この情報では「目」にすることはできない。そのような疑問から私のグループの調査は始まっていった。

調査してみると、グループの予想は大きく揺らぐものとなった。コンボンブルック村においては夫婦喧嘩や酒に酔った大人の暴力事件などはもちろんあれど、村においては犯罪が多発しているわけではなかったのである。実際コンボンブルック村の家屋には鍵やドアがあるわけではない。商店も品物を屋外においたまま商売を行っている。まるで日本の八百屋のようである。これだけ開放的な村が形成されているのも人々が安全を享受していることの証左と言えるだろう。日本と同様安全を享受するコンボンブルック村であるが、明らかに違うものがある。それは「目」である。日本では都市を中心に至るところに防犯

カメラが設置されているなど機械的監視の「目」によって安全がもたらされている場所がある。一方、コンポンプルック村においては警察官のパトロールやボランティアによる自警団による夜間のパトロールなどにおいて犯罪を未然に防いでおり、人々の「目」によって安全がもたらされているというわけであったのだ。

もちろんどちらの社会が健全であるかは意見の分かれるところだろう。ただ、この事実を「目」にしなければ日本の防犯体制が行き届いており、カンボジアはそうではない…といったステレオタイプに陥る可能性もあったのだ。私のグループのメンバーもこの見方に一石を投じる事ができたのではないだろうか。

翻って考えてみると最初に引き合いに出したカンボジアの渡航における安全情報も自分たちではない誰かの「目」による情報から創り上げられるものではないかと思われる。しかし私も含めてグループのメンバーはコンポンプルック村の現状を見ることによって通り一遍でない情報を「目」にすることができた。このような「目」の違いが今後の私のメンバーに新たな場面で新たな気づきを与えてくれる素地になってくれるのではないかと期待したい。

---

### 「食文化を伝える中で得たもの」

後藤彩可（数学科）

「食」は私たちにとって必要不可欠なものである。その中でも「お菓子」については多くの人々が魅力を感じ、若い世代のほとんどが利用するInstagramを見ても「#スイーツ巡り」「#おやつ時間」などとハッシュタグをつけて投稿している人もいるほど、お菓子を食べることを趣味として楽しむ人が多く、生きていくために必要な栄養源とはまた異なる意味合いで「お菓子」は私たちにとって重要な存在なのである。

GKグループの生徒たちは食文化に焦点を当てて調査をしていたが、その中でもコンポンプルック村の人々に聞き取りを行う中で、私たちの想像するお菓子(チョコレートなど)は値段が高くて買うことができず、お菓子のバリエーションもそれほど多くないという現実を知った。そこで生徒たちは、カンボジアで手に入りやすい食材で作ることができる日本のお菓子をカンボジアの人々に伝えようとした。『嗜好としての食』を楽しんでもらいたいと考えたのである。

生徒たちは色々とアイデアを出し合いながら、最終的には現地で捕れる小エビとお米を使ったエビせんべいの作り方を村の人に教え、結果としてエビせんべいは子どもだけでなく大人も手を伸ばしてしまうほど現地の人に喜んでもらえたわけだが、これは日本が歩んできたお菓子の歴史とつながる部分があると考え。日本のお菓子の歴史を見ても、始めは木の実や穀物で試行錯誤しながら、小麦粉や砂糖の普及によって現在までの進化を遂げたのは確かなことである。今回、日本に住む生徒たちがZoomを通して日本の知識や技術を伝え、その結果村の人々はお米の新たな調理方法を知った。そして、その知識や技術を共有しながら発展させることで後々カンボジアの人々が独自の文化を築き上げるかもし

れない。生徒たちがそこまでの気持ちを持ちながらカンボジアの人々にエビせんべいの作り方を教えていたのかどうかは分からないが、生徒たちの研修の様子を見てると少なくとも「日本をもっと知ってほしい」「日本を伝えたい」という想いが強く感じられた。また、現地で調達できる食材で調理できたという点においても、村の人々にとっては身近に感じられたのであろう。生徒たちの伝えたい熱意が一方的になることはなく、調理している人々も「せんべいの形はこれで合っているのか」「この手順の後にはどのように調理するのか」など、熱心に質問をしている様子が印象的であった。

本研修を通して生徒たちにとっての学びとは何かを考えたとき、自然と「発信力」という言葉が浮かんだ。言葉も文化も異なる人々に、オンラインで日本の食文化を伝えるのは容易なことではない。それでも生徒たちの『伝えたい』という熱意は確実に現地の人にも届いていた。それは生徒たちが何か特別な創意工夫を行ったわけではなく、ただ単にお菓子を通して現地の人たちに喜んでほしい、日本のことをもっと発信したい、カンボジアでも手軽に作れるものを伝えたい、などの想いをグループの中で共有し、そのために何ができるか議論を重ねた結果であろう。「発信力」は一方的な意見の主張になってはいけない。発信者は受信者の需要に耳を傾け、受信者の意見もふまえて相手を意識した伝え方をしなければならないのだ。生徒たちは今回の研修を通して「発信力」を鍛えることができた。この経験を今後も生かし、さらなる学びを得ていくことを期待したい。

---

### 「わらしべ長者～物々交換を通して～」

奥村仁崇（数学科）

私の引率するグループでは、日本のおとぎ話のひとつにもある「わらしべ長者」を実際にカンボジアでもやってみたいと生徒たちが意見をだし、藪から棒に研修が開始した。わらしべ長者とは、モノとモノを交換して大金持ちになる物語である。似たような物語は世界中に存在しており、今でも物語とまではいかないが、ご近所付き合いで、不要になったものや、お土産などを渡してそのお返しとして違うモノをもらおうといった風習がある。この、モノとモノを交換することを通して、トンレサップ湖で生活する村の人々の「大切なもの」は何かに着目して物々交換を実施した。ただ、実際は開始早々何度も交換を断られ、なかなか思うように交換が進まず調査は難航した。それもそのはず、もし我々が見ず知らずの人から「物々交換」をして欲しいと依頼された時、それに応じるだろうか。あなたは、知らない人から手作りの「おにぎり」と何か交換して欲しいと言われた時、応じるだろうか。いや、多くの人は応じないであろう。ご近所付き合いは、ある程度の関係が構築された上に成り立っている。今では物々交換を行うWEBサイトなども多々存在するが、それは「管理者」という信頼のもと成り立っているのである。たとえ、「管理者」がいなかったとして、何かしらのメリットがなければ交換には応じないではないだろうか。しかし、徐々に依頼に応じてくれる人が増え、当初の予想に反して多くの人との交換が実現した。この村では、手作りの「ちまき」（食べ物）や、お店の「商品」などと交換ができ、特に

メリットがなくても交換に応じてくれたのである。「ハンカチ」から始まった物々交換は、最終的に「ワニの剥製」へと変貌を遂げた。これは、我々が普段生活をしている中では考えられないような出来事である。私のグループのメンバーはこの調査を通して人々の「暖かさ」を実感したのではないだろうか。「達成感」を感じたのではないだろうか。「疑う」ではなく、「信じる」を実感できたのではないだろうか。彼らには、昨今の社会情勢だからこそ「信じる」気持ちを持って今後の人生を歩んでいって欲しいと心から願っている。

## [10] 生徒活動報告

### 「コンボンブルック村に継承された日本の食文化」

アリネ カオリ（高校2年）

私たちはこれまで、学校の授業や研修会で様々な異国の文化に触れてきた。そこで、今回は国際理解研修を通してカンボジアについて深く学びたいと考えた。しかし、世界的に流行しているCOVID-19感染症により現地での研修は困難であるため、Zoomを用いたオンライン研修となった。私たちにできることが限られる中、私たちのグループでは「日本とカンボジアの食文化交流」を題目と定めた。

広大なカンボジアの中でも研修の場であったコンボンブルック村はトンレサップという湖の付近に位置し、東南アジア最大の湖である。調べたところによると、クメール語で巨大な淡水湖(sap)と川(tonlé)という意味があることと、世界最大規模で水上生活者が生活しており、1ブロック1万人、つまり100ブロック100万人以上が住むということが分かった。

題目にもある「食文化」だが、コンボンブルック村を含めたカンボジア全体の食習慣として、普段の主食はお粥が主流であり、それに加えて村では早朝に釣ったばかりの魚やエビも一緒に食べるそう。食材の管理は日本とは異なり、そもそも冷蔵庫が各家庭にないため、市販の水をクーラーボックスなどに入れて保管を行っていた。

質素な生活を行なっている印象を持ったのだが、彼らの生活にも日本の文化が定着しており、例えば食卓に必要な調味料として「味の素」があったり、毎日着る服に日本で有名なキャラクターがデザインされていたりと彼らにとっての日本の存在は身近であった。

先行学習段階でカンボジアがどのような課題を抱えているのか調査したところ、カンボジアでは貧困問題が深刻で特に低体重の子どもたちが多く、栄養不良が課題となることが分かった。このことから、食事の栄養面の改善をすべく、子供たちに栄養があり、かつ手頃に食べられるお菓子を作ることにした。どのようなお菓子を作るのかに関しては、日本で幼児から大人に親しみを持つ「海老煎餅」にすることで文化の継承になり、かつ現地の食材で料理ができるので手軽であると考えた。ただの煎餅ではなく、海老煎餅を考案したのは村での漁業をしていた方から魚と海老が多く取れるという聞き取りを参考にした。

実際の調理は1時間ほどで完成した。材料は米、水、油、海老だけを使い、まずは米を炊いてそこに海老を入れる。それからラップがない代わりにバナナなどの葉を用いて丸く

平たい煎餅の形にし、温めた油で揚げる。最後に好みで塩を振りかける。といった手順である。

試食した子どもたちや調理していただいた方たちの感想の中には「美味しかった」「初めて感じる食感だった」「もっといろんな日本食を味わいたい」「また作りたい」などと好意的な意見が多く、私たちも日本食の伝統の継承という意味では成功したのではないかと考える。

今回の研修を通じて体験した国際交流は、日本では見られない光景や生活知識、環境に触れることができ、日本の文化を伝えられたことが確認できたと思う。



### 「わらしべ長者と大切な物」

服部礼音（高校2年）

私はカンボジア国際理解研修で、日本とカンボジアでの生活基準や物価など働き手などを調べました。そもそもなぜこの国際理解研修に参加しようと思ったかという、日本という、恵まれた国で生活してきた私は、日本がどれだけ恵まれているかなどを測る基準を持っておらず、その基準を測るためにいろんな国に関わりを持つとうと思ったのがきっかけです。そして私は日本の昔話にもあるわらしべ長者と、大切な物について調査することにしました。最初に日本の昔話の通り、藁から始めても交換してもらえない可能性があったため藁ではなくハンカチから始める事にしました。最初の交換でハンカチからナスに交換してもらうことができました。カンボジアでは一つの場所に留まって販売をしているものが少なく、バイクなどに商品をくくりつけて場所を変えながら販売している人たちが多くいます。その中の一人の方から、ナスに変えてもらうことができました。次にナスからお菓子里に変わりました。このお菓子里がちまきに変わりました。ちまきになった理由は、私たちが調査していた時期のカンボジアでは、日本で言うところのお盆にあたる時期でした。カンボジアでは、お盆にちまきを食べるといふ風習があるようで、たくさんのお盆と交換してもらうことになり、私たちはたくさんのお盆を手に入れて困ってしまいました。その為、急遽ちまきを二つのグループに分ける事にしました。そして、二つのグループに分けてわらしべ長者を実行しました。しかし、何度も交換を依頼しても再度ちまきになったり、断られてばかりでした。そして、行くあてがなくなり学校に訪問することにしました。その時、学校の先生に何かこのちまきと交換してくれないかと尋ねてみると、学校に置いてあった人形と交換していただきました。人形とちまきを交換していただいた理由を伺うと「ちょうどお昼ご飯の時間でお腹が空いていたから」との返答でした。

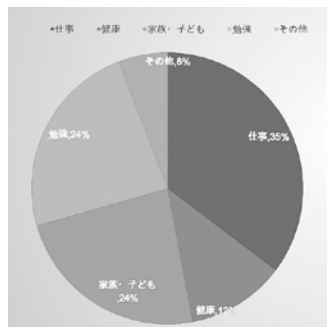
次にもう一つの、ちまきのグループは、道端で呆然と



立っていた三人の子供を持つ主婦に交換の話をもちかけてみました。その結果、全長180cmほどある木の棒と交換してくれました。この方にも交換してくれた理由を聞いたところ、子供たちにご飯として渡すと行っていました。ここでちまきは全て違うものに交える事に成功しました。わらしべ長者も終盤になってきてきました。木の棒を違うものに交換してもらおうと思えば家族で家の下でお店をしている家族に、何かと交換してもらえないかと聞いてみると、父親が家の中まで何か交換できる物が無いか探しに行ってもらえました。そして出てきた時には左手にパチンコを持っていてパチンコと交換してくれました。最後にパチンコと人形が何に変わったかという、パチンコの方はカンボジアで魚を獲る時によく使われるような仕掛けアミ数個と交換してもらえました。もう一つのぬいぐるみの方はワニを剥製などにして販売しているところに行き、交換してもらえないかと交渉したところ、そのお店の人が偶然的にこの人形が好きで、こちらから交換してくれという前に交換してくれと言ってきてもらえ、ワニの剥製と交換してもらうことができました。このワニの剥製は日本に渡ってくることは残念ながらできませんでしたが、今回このカンボジア国際理解研修に協力していただいた会社の事務所に飾っていただけました。

最後に幸せの基準についてですが、私が思う大切な物とはお金に余裕があり、広大な土地を持っていて安全な家があることが私の中での大切な物です。しかし、今回の調査で私の考えは打ち砕かれました。カンボジアでこの調査を行った結果、「一番大切にしているものが何か」と質問したところ、「お金」と答える人は全くおらず、「仕事」、「家族」、「勉強」と答える人が多くいました。そして、日本でも同じような調査をしようと思いましたが、COVID-19の影響もあり、調べるのができなかったため、時期が落ち着いたら改めて調べてみようと思いました。

この研修を通して、日本もカンボジアもさほど変わることはなく、生活の質などは違えど、幸せに生活をしていて驚きました。また、私たち日本人が話しかけて行っても違う国だからという壁などもなく、とても親切にしていただけだったので、このコロナ禍が終わり落ち着いたとき、自分の足でカンボジアに足を運び現地の人たちと関わりを持ちたいと思いました。



### 「コンボンブルック村と日本の犯罪の違い」

井戸悠斗 (高校2年)

犯罪という言葉を想像すると、殺人、窃盗、傷害、詐欺などを想像すると思う。しかし、それは日本のことだけかもしれない。そこで、カンボジアのコンボンブルック村では、どんな犯罪が起きていて、今、どのような現状なのかということについて調べてみた。

まず、村内において、「水」にまつわることにに対する抗争などがあるのかどうかを調べた。



①日常生活での水の取り合いや奪い合いになることはあるのかコンポンプルック村で生活をしている人々は、家に水道というものはない。また、雨季の際には、家の前の道路が水で沈んでいる。その水を家庭に1つや2つほど持っている水を貯めておくタンクのようなものに水を貯めておき、この水で、生活を送っている。また、食器を洗ったり、洗濯などを行ったりする時には、近くの川に行き、貯まっている水を使用している。

次に、「水」以外のことに対する抗争などは起きているのかということ調査を調べた。

### ②コンポンプルック村で、起きやすい争いについて

コンポンプルック村では、主に家庭内での暴力が多いということがわかった。また、村で起きた争いについては村長さんや近所の人たち同士が仲裁に入ってなだめている。また、子供たち同士での喧嘩も頻繁に起きていることがわかった。その際には、周りの大人が仲裁に入り、なだめているということがわかった。

さらに、コンポンプルック村で起きやすい犯罪について調べた。

### ③村で起きやすい犯罪

#### ・バイクの盗難

バイクの盗難が起きやすい理由としては、鍵をコピーできてしまう店が多くあることによって簡単に知らない人のバイクの合鍵を作ることができてしまうからである。

#### ・船のエンジンの窃盗

船のエンジンの窃盗が起きやすい理由としては、雨季の際の移動手段のために、各家庭に1台ほどボートを持っている。そのため、船のエンジンが盗みやすく、売ってしまえば、お金に変えることができるからである。

そして、犯罪が起きないようにするための町の人々や警察の対策について調べた。コンポンプルック村では、日本でいう覚せい剤が広まりつつあるそうだ。その麻薬の使用禁止の抑制を行うための対策として、月に1回ほど村の警察官が村の人々に質問をしながらパトロールを行なっている。また、小学校などの学校で毎回、授業を始める前に先生が麻薬について話をすることによって麻薬の使用禁止の抑制を行っている。しかし、このような話をしているにわかに信じ難いことかもしれないが、村では犯罪というもの起きにくいということがわかった。その理由として、家族の1人が犯罪を犯してしまうと家族全体が他の村人から非難をされてしまうからである。

コンポンプルック村と日本の犯罪の違い日本の犯罪というのは、コンポンプルック村の犯罪とは違い、窃盗がおよそ半数を占めており、その他に「暴行、傷害、横領、詐欺」などがある。そこで、上記で上げた中で最も重い犯罪の殺人事件の発生率を比較してみた。日本では殺人事件の件数が人口10万人に対して、0.2件という発生率で起きている。(総人口約：1億2000万人) また、カンボジアは国全体で人口10万人に対して2.4件という発生率で起きていることがわかった。また、コンポンプルック村と違い、家に直接侵入をして金品などを盗んだりするという犯罪も起きている。また、置引きやすり、車上荒らしなどの犯罪も起きている。しかし、一方で日本での犯罪の件数自体は世界の中で

も窃盗を除けば犯罪が少ない国だということがわかった。そして、日本の犯罪が少ない理由は、日本の不平等度が低いことである。日本独自の「企業社会主義」制度のおかげで、企業全体に支払われる給与はかなり平等であり、雇用は大幅に安定しているということがわかった。また、他にも5つほどある。一つ目は、日本人は「自律心が強い」ことだ。何をしても良いか悪いかを子どものころから教えられ、自分を律する習慣ができていっているとされている。二つ目は、「法の意識が強い」ということ。子どものころから「嘘と盗みはするな」と口を酸っぱくしていわれているため、窃盗は日本人にとって非常に恥ずかしいことだとされている。三つ目は、「警察は小さな犯罪でも逮捕をしてしまう」ことだ。四つ目は、「犯罪に対する代償が大きい」ということ。小さな盗みでも窃盗罪となり犯罪記録が残るため、結婚や就職などに一生影響がついてまわり、犯罪の抑止力になっているといわれている。五つ目は、「警察官が多い」ことだ。いたるところに交番があり、夜にはパトロールをする効果が現れているといわれている。次に、町の人々の家と、村の人々が生活をしている家の違いについて調べた。町の人々は、家の前にそれぞれの門や柵を作っているのに対し、村の人々は、こういった玄関の役目を果たすようなものはないということがわかった。そのため、コンボンブルック村では、消防や警察が少なくても犯罪が起きにくいのではないかとということがわかった。

最後に、コンボンブルック村の概要と今について調べてみた。コンボンブルック村の人々は、経済的に貧しい家庭が多くみられる。日本は、警察が直接的に犯罪などを取り扱うが、カンボジアではボランティアの警備員が怪しい人を見つけたら警察に連絡をするようなシステムになっていることがわかった。また、陸上ではバイク、海ではスピードボートや警備艇を使用して、毎晩パトロールを行なっているということがわかった。一方で日本が世界の中でも治安が良く、平和とされる理由にはさまざまな理由があると思われる。日本の治安が良い理由の1つ目は、日本では法律で銃器を持つことが禁止されており、普段の生活の中で銃犯罪に巻き込まれる危険性が極めて低いということが挙げられる。また、テロなどの発生率も低く、戦後日本では、平和を願い戦争を回避する政策を行ってきた。近年では、中国や韓国などの近隣国家との関係性により、世界平和度指数が下がる傾向にあるが、世界平和ランキングでは10位以内を獲得しており、治安の良い国として認知されていることもわかった。二つ目は、日本の自然や古くからの文化により、観光都市としても、人気であるということである。日本には、伝統文化が根付き、美しい自然にも恵まれ、海外からの旅行者も多い。海外からの観光客が多いということは、その分犯罪も増えるのではないかとと思われるが、日本人は勤勉で、モラルも高く、観光客礼儀正しいといわれている。このことから、日本では観光客を狙った犯罪も他の国と比べると少なく、また観光にやってくる海外からの訪日客も日本の文化や観光地を大切に、日本での旅行を楽しんでいく人が多いということも犯罪発生率を低くしている要因といえるだろう。主に日本の治安がいいとされている例として以下のことが挙げられる。「落とし物をした際に、取らずに警察署へ届けられていること」「無人で販売をしているお店があるということ」「電車で

居眠りをしている盗みなどに遭わないこと」

最後に言える、日本とコンポンプルック村との決定的な違いは、どちらの地域も犯罪が少ないとされているが、コンポンプルック村は、警察官が少なくても犯罪が少ないということに対し、日本ではある程度の警察官を配置して、犯罪を少なくしているということであると考えた。

---

### 「日本とカンボジアの違い」

高田聖七（高校2年）

はじめに、この題名になった理由は、グループ内でカンボジアでの物の価値観はどうなっているのかという疑問から発展していった結果この題名にたどり着いた。主題はそこから主にカンボジアの物価、子供や大人の大切なもの、将来の夢を調べた。

まず、カンボジアの人の暮らし方について述べる。村には電気が通っておらず、冷蔵庫がない。日本では当たり前のようにある「三種の神器」の一つが無いと言う。私はこの事実に驚愕していた。では、どのようにして食料を保っているのか。民家にお邪魔して主婦の方々に尋ねたところ、1日に1回、食料を買いに行っているそうだ。一方、水はと言うと、水道が通ってないため、常温保存ではあるが一回で数日分の水を買いだめしておくそうだ。1日で使用する水は10～15リットルで、料理、飲料、皿洗い、トイレなどの限られた用途でしか使用しない。ここで、「食料」や「水」など出ているが、どうやってそのようなものを手に入れているのかが気になったので調べた。今回、話の舞台になる「コンポンプルック村」から市場まではかなり遠く、食材を買いに行くのは困難だ。ではどのようにして村の住民は食材を買っているのかというと、「移動販売」という方式で商売をしている人から買っているそうだ。移動販売ではお肉や野菜、魚など幅広く売っており村の住民の助けになっているそうだ。その中では生の鶏肉が、1番値が張るそうだ。この移動販売は最近導入されたらしく、昔までは井戸まで汲みに行っていた水が、移動販売のおかげですぐに手に入るようになって村の住民は喜んでた。

そして次に調査したのは、カンボジアでのものの価値観である。今回、調査するにあたってどのような方法を用いて調査したかと言うと、「わらしべ長者」という日本古来から伝わるおとぎ話に出てくる方法である。「わらしべ長者」とはなにか。簡潔に説明すると、思いがけない交換により、利益を得るという事だ。まずは手元に何かしらのものがないと交換が成立しないので、日本からスカーフとコンパスを送り、その2つから始まった。最初に交換に応じてくれた人は移動販売していた人だった。その人はスカーフを「料理ができるため」といってナスと交換してくれた。その次にお菓子やジュースなどが売っているお店に行った。そこではナスとお菓子を交換してくれた。そして次は民家にお邪魔して、先程交換して頂いたお菓子と何か交換できないか尋ねたところ、「ちまき」と交換してくれた。そしてまたブラブラと歩いていたところ、ある問題に気づいた。「どの家にもちまきあるな」と。カンボジアはとある時期にちまきを食べるという習慣があるらしく、ちま

きが大量に余っていたのだ。その時期というのは「お盆」の事だ。何が問題なのか察する通り、ちまきはどの家にも腐るほどあるので交換してくれる人が居ないのではないのか。そこでかなり絶望した。だがしかし、とある小学校にお邪魔し、教員にちまきと交換してくれないかと尋ねたところ丁度お腹がすいていたらしく、ガラスのケースの中に入っていたぬいぐるみを貰った。(気になって後から調べたところ、「LOTTE WORLD」という大韓民国にあるテーマパークのキャラだった)ここでちまきを消費できたのはかなりの豪運である。そして時間が経ち、ワニの剥製などが売っている店に訪れた。そこでぬいぐるみと何か交換して頂けないか交渉したところ、店員さんの1人がこのぬいぐるみが大好きだったらしく、凄く嬉しそうに快く交換に応じてくれた。この時僕らは「ちっちゃい牙とかかな」などと臆抜けた事を言っていたが、現実とは違った。なんと出てきたのは「ワニの頭の剥製」だった。思わず叫んだ。ここで忘れては行けないのがスカーフと同時にわらしべを始めたコンパスだ。コンパスも同じような経過で、パチンコから仕掛け網に変わった。色々あったがここまで出来たのは、成功と言っても良いだろう。少し話は逸れるが、パチンコや仕掛け網などがあるのは食文化が影響していると考えられ、彼らは狩りなどを良くしており、自給自足が出来ていて素晴らしいと感じた。

次にわらしべ長者と同時並行で進めていた「子供や大人の大切なもの」について述べる。事前に私たちはカンボジアの人々は何と答えるのかを予想していた。お金や土地、資産などの所謂「財産」と答えるのではないかと予測していた。だがカンボジアの人々の多くは、仕事や健康、勉強や家族と答える人が大半であった。私たちの予測は大ハズレであった。ここから考えられることは、カンボジアの人々は幸福度が高いのではないかと言うことある。何ものにも変えられないものが大切であると答えたからだ。日本でも調査をしたが、やはりお金や資産などが多かった。大切なものの中に「勉強」があるように、将来の夢で1番多かったのは「先生」だった。カンボジアの人々は教えたり学んだりする向上心が強いかもしれない。

最後に、この研修では日本との違いを身近で見られるいい機会だったと感じた。ガイドさんを通じてやりたいことをやれるのは自由で面白く、得られた情報から結果を考える過程がとても楽しかった。



住井 翔（高校2年）

私はまず、カンボジアの研修で「水」がテーマになると知り、「食文化」と共に調査することを考えた。と言っても、ただカンボジアならではの料理など調べたら出てくるようなことでは無く、日々の生活においてどんな食生活を送っているのかを、我々日本人の生活との比較で着目した。村の住民は、電気が通っておらず冷蔵庫がない。日本では「三種の神器」と呼ばれ、生活必需品に相当するものだが、それ無しでどう生活しているのか。民家にお邪魔して主婦の方々に尋ねたところ、1日に1回、食材を買いに行き翌日の朝ごはんは冷蔵しなくて済む食材で済ましていると言う。一方、水はというと、水道水が無いので、常温での保存になるが1回で数日分の水を買い溜めしておくそうだ。昔は汲みに行っていたが、最近では購入できるようになったという。1日で使用する水は12リットルで、飲料、料理、皿洗いなど限られた用途でしか使用しない。しかし、中には濾過機を設置して自身の飲料水を確保している家庭もあった。食文化もそうだが、コンポンプルック村は水に困っている村だ。まず挙げられるのが、雨季による水位の上昇である。コンポンプルック村の民家はどれも階段（ハシゴ）を登ってから家に入る。イメージとしては日本の高床式倉庫のようなものだ。それよりも少し高い。雨季の生活は陸上では無く水上に切り替わり、各自所有しているボートで買い出しなどに出掛けている。次に、お手洗いと洗い物だ。日本では水を流して下水道に繋がりそのまま処理場へ送られるようになっているが、コンポンプルック村の処理場はもちろん、下水道・水道も通っていない。では排泄物はどうしているのか。便器の下にスペースがあり、そこに溜めていく。定期的に回収用トラックが来て持って行くそうだ。昔の日本では同じボットン式があったが、現在では全く見られない形式だ。また、洗濯物は近くの川で行う。このように、水は最低限しか使わないように工夫して暮らしている。これらの観点から、我々日本人は如何に裕福で贅沢な生活をしているかが伺える。生活保護が整備されていて、「健康で文化的な最低限の生活」には「水」が使用できることから、すべて日本人はこの暮らしに感謝しなければならない。しかし、村の住民も日本に比べれば不自由だが彼らなりの幸せな生活を送っている。人口が少ない分、住民のほとんどと顔見知りになっていて、家にも鍵をかけなくて大丈夫と言う文化が根付いている。これは他の国々ではなかなか体験し得ない事で、人と人の信頼関係で成り立っている生活文化である。

次に調査したのは、コンポンプルック村付近に位置するトンレサップ湖の生態についてだ。今回の研修では、グループセッションの前に2日間ほど座学を行った。その中で、カンボジアという国の基本情報や、歴史、またこのトンレサップ湖についても説明を受けた。中でも私が感銘を受けたのは水上レストランと鼠捕りだ。鼠捕りとは、雨季により水位が上昇した影響で木の枝の上にいる鼠を、ボートで近づいてパチンコで獲るといふ狩猟である。是非これを見せてもらいたかったが、時期の都合上今回は断念せざるを得なかった。片や水上レストランはコロナ禍もあり営業していなかったが、元々半分が住宅となってい

たため、見学させてもらえた。内装は綺麗に整っており、6～7mほどある角テーブルに白いテーブルクロスが敷いてあり、大人数が1つのテーブルで食べる仕様になっていた。また、メニューは無く、希望された料理を作って出すらしい。日本のレストランは少人数用に席が分かれており、部屋割りしている店も多い。また、どの店にも必ずメニューが存在していて、メニューに無い、客が希望した料理を作るのは太客に作る裏メニューでしか存在しない。この両仕様はなかなか見ない光景で、カンボジアならではの人の距離の近さが伺える。だが、残念なことに、内装は見る事が出来たが、実際の料理は都合上見ることが出来なかった。代わりに、もっと面白いものを見せてもらった。トンレサップ湖随一の危険生物である、ワニだ。日本ではレストランでワニを飼育しているという事例は聞いたことがない。飼育方法は、2～3,000円で幼体を購入し、成長して成体となったときに30匹ほど産卵されるためあとはループさせる事が出来るそうだ。水は機械で取り替え、餌は週1回ほどしか与えないため、人間に懐いているということはなく、過去に子供が飼育場に落ちて亡くなった事例があるとのことだ。このワニは成体になったら皮をベトナムに輸出し、肉はレストランで料理にして出すらしい。

最後に、我々の班では食文化にちなんで、鶏の解体を見せてもらった。村の住民は子供を除いて殆どの者が生きている鶏を解体出来るそうだ。解体している描写は割愛するか、解体された鶏で料理を作ってもらった。カンボジアではスープ料理がメジャーで、朝、昼、夜、どのご飯にも大抵スープ料理が入っている。お雑煮に近い見た目、日本人ガイドの方に食してもらったが、日本人でも口に合うそうだ。我々日本人は大勢が市場に出回っている加工肉のみを見て過ごしているが、生きている状態から捌くのをみると、命をいただいているという意味を考えさせられ、命に感謝することを今一度大事に思えた。

後半は少々テーマから逸れてしまったが、私が今回の研修で学んだことは、2つを比較すると、双方に優れている点・劣っている点が存在するという事だ。カンボジアと日本において、例えば、GDPやNIを見ると日本の方が断然上位に位置する。しかし、人々の心理的距離においてはカンボジアの方が圧倒的に近いだろう。また、日本が南海トラフなどの自然災害に見舞われて現在のような高水準な生活をするのが困難になり、コンポンプルック村住民同じような生活を余儀なくされた場合、日本人には生き抜く術が足りていない。極論ではあるが、私が言いたいのは「住む場所・過ごした環境によって、人の幸せは異なる」ということだ。よく、「隣の芝は青い」と言うが、隣の隣は自分の芝だ。他者と比較して自分の幸福度を相対的に決めるより、自分の価値観で判断することがこれから大事になってくると思う。「他人と自分」ではなく、「現在（過去）の自分と未来の自分」でどう変わっているかを大事にしようと思う事ができる研修になった。

㊦ オンライン国際理解研修（オーストラリアコース）

2021年8月18日（水）～8月24日（火）

[1] 研修の目的

オーストラリアへの擬似留学体験と現地の方々との交流などを通して、普段勉強している英語の運用力を強化したり、異文化への理解をより一層深め、寛容な精神を育んだりすることを目的とする。また、キャンパスツアーや現地大学生との交流を通して、自分の進みたい進路について考え、海外進学なども視野に入れたキャリア育成を目指した。本研修は、COVID-19感染拡大により当初予定していた海外での研修からオンラインによる研修に切り替えたが、実際に現地に行けない中でも、生徒の学びを止めず、新しい学びの創出を図った。

[2] 対象生徒

高校2年（普通科中高一貫・普通科・国際教養科）10名

引率教員：2名

[3] オンライン設備

オンラインツール：Zoom（Zoom Video Communications社）

<学校側>

生徒：iPad（Apple社）10台、教員：iPad（Apple社）2台

教室（2教室）：Wi-Fi設備

<オーストラリア側>

インストラクター：iPhone等の携帯電話2台

現地事務所：PC

[4] 研修の主なスケジュール

2021年5月10日（月）：生徒説明会①

5月17日（月）：生徒説明会②

6月30日（水）：研修参加者決定

7月26日（月）：オリエンテーション

8月18日（水）～24日（火）：研修プログラム実施

## [5] オンライン行程表

月日(曜)	9:00~9:50	10:00~10:50	11:00~11:50
8月18日(水)	英語セッション ・自己紹介(日本文化・学校生活・家庭生活など)	バーチャルホームステイ体験 ・ホストファミリー宅ツアー	英語セッション ・オーストラリアの基礎講座
8月19日(木)	英語セッション ・オーストラリアの動物や環境	キャンパスツアー ・大学生とのセッション	バーチャル観光体験 ・動物園
8月20日(金)	英語セッション ・アボリジニ文化	バーチャル観光体験 ・アボリジニ文化センター	現地校交流 ・現地高校生とのセッション
8月23日(月)	英語セッション ・日本とオーストラリア文化の比較	現地大学生との交流 ・愛知県のご当地フードの紹介 ・現地大学生とのセッション	現地校交流 ・現地高校生とのセッション
8月24日(火)	英語セッション ・スピーチの方法と準備	現地大学生との交流 ・家族や学校の紹介 ・現地大学生とのセッション	スピーチ ・研修に関するスピーチ ・フィードバック

## [6] 活動内容について

生徒を2グループに分け、1つ目の英語のセッションは全員で、2つ目・3つ目の交流やホームステイ経験などはグループ毎にZoomを用いて参加した。英語のセッションではその日の交流のテーマやセッションの中で使用するものを中心に学習を行い、その後の交流やセッションで学習した事項を運用する流れで行われた。また、生徒達は事前にホームステイや交流を想定し、自分自身や学校、住んでいる地域、ご当地フードなどについて、個人及びグループでスピーチ内容を検討し、準備など行なって本番に臨んだ。本来は直接海外で研修を受けたかった生徒が多かったため、プログラムは実際に現地に行ったものに近い形・内容で行われ、生徒達も留学生生活をイメージしやすいように工夫を図った。加えて、オーストラリア独自の文化や環境をテーマとし、SDGsとの関連なども踏まえて進められた。

## [7] 活動の様子



オリエンテーションの様子①



オリエンテーションの様子②

オーストラリア現地側とのコーディネーターとしてISAの伊藤氏から今回のプログラムの内容と事前準備・課題の説明がされた。また実際にデバイスを用いて、Zoomの接続テストも行った。



B. Think of some of the best places a tourist should visit in Japan.

Place \_\_\_\_\_ Why? \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_


B. Let's talk about Japan and Australia. Prepare your answer about Japan and ask your Australian friend about OZ. Prepare to talk more detail the topic if you can.

Example Questions	Sample Answers	More detailed answers
What month is hottest?	It is the hottest in June and August.	It is August, the temperature can get to 28 degrees Celsius.
What is a popular food?	Udon is popular.	A food called Udon is popular. It has noodles, vegetable and other things.

C. Here are some questions to discuss with your Australian mates. Prepare to tell them about Japan.

Questions to Ask \_\_\_\_\_ How about in Japan? \_\_\_\_\_

1. Which month is the coldest?
2. Are there four seasons?
3. Are there any universities?
4. Is buying a home expensive?
5. Do people like public transport?




### Australia's Climate

Everywhere in Australia can get very hot and humid; however, the Australian landscape can be divided into the different categories listed below.

The large orange patch of the map shows where the land has become a desert. This part of Australia is the hottest and driest, so not very many people live there as it's hard to grow food and get water.


The blue sections of the map show where Australia is coldest as it is closest to the Southern Pole. Even though Australia is a hot country, it will sometimes snow in these areas during winter.



Climate Classification (1981-1990)

- Subtropical
- Tropical
- Mediterranean
- Desert
- Subarctic
- Temperate
- Polar

The northern parts of Australia are classified as tropical, because this is where it rains the most. A lot of plant life and rainforests are here. In fact, northern Australia is home to the oldest rainforest in the world. It is more than 135 MILLION years old! You are currently in the subtropical and oceanic region of Australia. This is a warm area but there is still enough rainfall to sustain our plant life. We're also very close to the Pacific Ocean!



Page 7

#### 英語セッションで使用したテキスト

オーストラリアの歴史や文化、環境などについて、わかりやすくまとめられたテキストで、生徒も楽しそうに取り組んでいた。



現地コーディネーターからの説明

英語セッションは全員が1つの教室に集まり、教室のスクリーンに投影した映像から説明を聞いた。



オーストラリアの動物に関する講義

コアラなどの有袋類について説明を受ける。またなぜこのような独特な進化をしたのかを考えた。



バーチャルホームステイの様子

実際のホームステイ同様にホストマザーが家の案内をしてくれた。



バーチャル観光（動物園）の様子

現地職員が実際に動物園を訪問し、生徒の要望に応じてくれた。



現地の高校生との交流の様子

簡単な自己紹介の後に、お互いの学校や住んでいる地域の紹介などを行った。言葉の壁を感じさせず、同世代との交流は大いに盛り上がった。

## [ 8 ] 引率教員講評

### 「One of a kind ～唯一無二～」

渡邊えみ（英語科）

COVID-19の蔓延がおさまることなく始まった2021年度。中高一貫5年生及び高校2年生は年度当初から国際理解研修がどうなるのかということをしきりに気にしていた。COVID-19は学校生活にも大きく影響し、生徒たちがオンライン授業を受けることにも慣れてきた頃、今年度の国際理解研修はオンラインで行うということが発表され、生徒たちは嬉しさよりも落胆の方が大きかったように感じた。日頃からオンライン授業を受けてきた生徒たちも私たち教員も、オンラインでの国際理解研修がどのようなものになっていくのか、楽しい気持ちと、受け身の講義にならないかと心配な気持ちとが入り混じった状態で幕を開けた。

生徒たちは初日から何度も現地のコーディネーターやインストラクターから指名され、

英語での発言やリアクションを求められた。現地から生徒たちに話しかけてくださったのは全員オーストラリアの方々に、テンションや話のテンポも普段のものとは異なり、いきなり雰囲気がガラッと変わったのを肌で感じた。ホームステイの代わりとなったオーストラリアのお宅訪問では、こっちに行ってみたい！あれをもっと近くで見たい！冷蔵庫の中も見てみたい！など、生徒たちはどんどんと発言し交流を図っていた。英語が得意な生徒だけではなく、自ら発言したり質問したりする機会も多く、コミュニケーションを取りたいという気持ちが発言につながっていったというのを実感することができた。

オンライン講義では、先住民のアボリジニ文化に触れ、自分たち自身と彼らを比べることで相違点や類似点を見つけ出し、相互理解を深めることができた。アボリジニの人々はドリムタイムという考え方を大切にしている。過去や未来という時間の概念がなく、時間の感覚が私たちとは全く異なることを知ると生徒たちも非常に驚いていた。私たちが過去から現在、未来へ時間が移るのに対し、アボリジニの人々は主観的から客観的に、または夢見から実在に移行する過程が時間ということになる。このようなことをオーストラリアの人々から時間に話を聞き、質問できたことは生徒にとっては視野が広がる経験となったことだろう。

オーストラリアの高校生との交流では、研修の中で一番盛り上がるものとなった。高校生たちは日本もオーストラリアも大差なく、とにかく交流をするのが楽しそうであった。お互いに知っている英語や日本語を披露したり、流行っているものの情報交換をしたりと言語の壁を一切感じさせない状況には、若者たちのエネルギーを感じた。昨今はSNSも発達しているため、直接会えずとも、コロナ禍であっても、この友情が今後も続いていくことを期待せずにはいられなかった。

世界には多様な人々が存在する。私たちひとりひとりもその多様性の中の一要素であり、互いに対立したり、上下関係になる存在ではない。アボリジニの人々が描く絵にアボリジナルアートがある。ドットペインティングとも呼ばれ、いくつもの点で様々なものが描かれている。生徒たち自身が世界を形成しているドットの一つであるということはこの研修を通して体感してくれていることを期待し、講評としたい。

## [9] 生徒活動報告

### 「Warmth of Humanity」

Claude Mori (高校2年)

Please let me say this first. I was born in America and lived there until 5 years ago. So, I have been learning English for whole of my life. So, I think that I'm able to speak and understand English better than ordinary people. So no need to say, I didn't want to join this program at first. But I've decided to join this program after listening to what the teacher said. The teacher said that if you join this program and if you are able to get the school credit you will be able to use it in recommended school entrance exam

and interviews. I thought that was a good point. So that's why I decided to join this program. Through out this report, I'm going to explain what the "Warmth of Humanity" is, and what I have learned and thought throughout the Australian Online International Understanding Trading program.

At first, let's look at the reason why humans interact and communicate with each other. To tell the result, you can grow up through communicating with various people. Everyone has various experiences. So, the best thing of a relationship is that you can learn about their experience through socializing. I think relationships have a huge impact on that person. There are many times in life when you think that life would be more enjoyable if you are able to build a good relationship. This is what I thought throughout the program. And I call this the "Warmth of Humanity".

From now on I will explain why I thought "Warmth of Humanity" is important through out this report. Talking with an Australian people I felt something. Something that is very comfortable. It was the kindness of the Australian people. They really welcomed us. In the ESL class the teacher taught us currently, there are immigrants from nearly 200 countries entering the country and forming a multicultural society where many ethnic groups coexisting. So cultural diversity is very interest. Australians are said to be the most culturally diverse people in the world. The first people to settle on such chuge continent, Australia, were called Aborigines. When Europeans first set foot on the Australian continent in 1788, Aborigines already existed there.

At the Sydney Olympics, 2,000 Aboriginal participants participated in the opening ceremony to promote Aboriginal culture by promising to "host an Olympic Games that contributes to Aboriginal people." These Olympic efforts can be appreciated as the first step toward reconciliation, but they are said to be difficult for Aboriginal people to achieve "true equality and happiness" due to many problems such as living conditions, social status, education and employment.

On the other hand, Aboriginal culture is very spiritual and has developed a unique worldview based on a deep understanding of nature. In particular, his artistic sense is now highly regarded. In addition, Kathy Freeman (34), an Aboriginal runner at the Sydney Olympics, won the gold medal in the women's 400 meters while serving as the final runner of the torch relay at the opening ceremony. In this way, traditional culture and sports have great potential in their quest to improve Aboriginal social status.

Comparing to the time when land was taken away and "protection and isolation policies" were implemented, Aboriginal rights are expanding with citizenship and land ownership. Welfare services, legal services, and medical services are also gradually improving. But on the other hand, however, I learned that Aboriginal people still have

various social problems, such as education and alcoholism.

Let's take a closer look at what I learned about the Aboriginal people. It is generally believed that Aboriginal ancestors began living in Australia about 50,000 to 60,000 years ago. It is said that it is highly likely that they crossed the present Torres Strait and the Arafura Sea to Australia from Southeast Asia. Before white settlers, Aboriginal peoples spread throughout Australia, divided into about 400 to 500 tribes and developed more than 250 languages. The Aboriginal lifestyle was based on hunting and gathering and wandering for food. Therefore, Aborigines used to live in small groups of 2~3 families. They maintained their lives as hunter-gatherers using simple stone tools and wood-ware, and did not farm. Men caught kangaroos and other wild animals with spears and boomerangs, while women used simple tools to collect food plants, fish and shellfish. There were also regular gatherings of one tribe for religious ceremonies and exchange of goods. Aboriginal people didn't have a unified society, but they had very strong attributes and loyalty to the tribe.

The Aboriginal religion, which maintains its most classical form and is considered the primitive form of all religious evolution, is commonly called totemism. To understand Aboriginal religions, it is important to understand the idea of "Dream Time". "Dream Time" explains the origin of Aboriginal life and refers to the world of Genesis or mythology. According to it, there was an era of gods in the past, when the creative god, known as "Rainbow Snake". It is said that the snake spirits worshipped by Aboriginal tribes vary in shape, color and size, but have colorful patterns on their skin indicating Aboriginal tribes worshipping themselves. Rainbow snakes live at the bottom of springs and lakes and control the water and rain that are most important to living things. Therefore, rainbow snakes are also called the spirits in charge of life, and all living things are believed to have come from rainbow snakes. It appeared and created everything, including humans, land, animals, and plants. When everything was created, the Creator hid in the earth, incarnating himself as one of the creatures. In other words, the source of life was the Spirit, and it was believed that spirits lived on the earth and in plants and animals, and it was thought that the Spirit would move freely around the continent, and that if the Spirit moved on to a woman of childbearing age, she would have children. As a result, the animals and plants in which spirits lived were used as totems, and the tribes valued the place where spirits lived and eventually died and were reborn as sacred places Aboriginal people have been centered on spirits that exist from the age of creation (dream time) to the present. I believe it is this spirit that creates everything in nature, controls traditional ceremonies, and brings life to dance, songs, paintings and other things.

They expressed their own ideas through songs, dance and rock paintings and have continued to this day. Here are four particularly famous Aborigines arts.

1. The famous “boomerang” was actually invented by Aboriginal people. The oldest boomerang in the world. The orchid was found in South Australia and is said to be about 15,000 years old. Aborigines used boomerangs for hunting, as well as for festivals and ceremonies.

2. Djuridou is said to be the world’s oldest wind instrument used by Aborigines for more than 1,000 years. Made from eucalyptus wood tubes, it is traditionally considered a male instrument, and women are not allowed to play the instrument in most tribes. It is said that the low notes played have healing effects and can be used not only for festivals and ceremonies but also for treating diseases.

3. Aboriginal art is a dot painting in detail, with a variety of Aboriginal art in Australia dotted with over 200 tribes. Kangaroos, portraits and their lives have been deftly left in caves. Some of the murals in Australia’s Kakadu National Park are thought to be over 35,000 years old and are among the oldest murals in the world. It is well preserved and is visited by many tourists every year after year.

4. Ayers Rock, a huge monolithic rock in central Australia, is designated as a World Heritage Site. It is officially called “Uluru” by Aboriginal people and is a sacred place for Aboriginal people. There, they worshipped God and only a few of the tribes could enter. The area is now managed as a national park.

As a conclusion I think that Aboriginal culture has thus brought great benefits to Australian art. It’s very fantastical that Aboriginal culture, which has been handed down since ancient times, remains as it is today. I found out that how they value multiculturalism is important. Which means that coexistence with multiculturalism like this would give a lot of experience because you would get involved and have conversations with various people. And that’s what I think “Warmth of Humanity” is.

---

〔Australia’s orientation〕

Jin Tomita (高校2年)

In Australia’s orientation I learned many things about Australia in these five days. I learned about places in Australia, culture, animals and life style. It was very interesting. The first thing I found interesting was about their life style. It is very different from Japan. They were many foods that was completely different from Japan. I personally want to try Vegemite. They have morning tea between breakfast and lunch. They even have morning tea break in school. I want to try morning tea.

Second thing I enjoyed learning was about culture. People who lived in Australia

before Europeans arrived are called aborigines. Aborigines have many aboriginal cultures.

They have many cool items for example boomerang, didgeridoo and fish trap. Didgeridoo is an aboriginal instrument which makes beautiful sounds. The fish traps are well made. It is designed to prevent fish from coming out once they are trapped. It is also designed to catch only big fish and let out the small fish.

The third thing we learned was about places in Australia. People in the orientation were from a city called Brisbane in Queensland. The college in Brisbane was very big. Australia has many beautiful cities and beaches but most of Australia is a desert. I was surprised because I didn't know about it. Even though Australia is a big country their population is about twenty five million. In the middle a big desert, there is Ayers Rock. Recently aborigines have banned people from climbing up Ayers Rock because it is very important place for them. Ayers Rock are also called Uluru.

The fourthly, thing I enjoyed learning was about Animals. I knew Koalas and Kangaroos for a long time but I learned about many other animals. I learned about echidna, Tree kangaroo, platypus, kookaburra, green iguana, saltwater crocodile, Quokka and Emu. I always thought Australian symbol animal would be kangaroo and koala but it turns out to be kangaroo and emu. People in Australia loves animal. Most people have pets in their house. Many people have more than one pet. They were shocked at the small number of pet owners in our class.

We also went on a house tour. The houses in Australia looked so nice.

I found out that Australia is a beautiful place with very nice people, places and cute animals. People who took care of me at the orientation were so kind and nice. It was very fun talking to them. When COVID-19 ends I'm planning on going to Australia. According to people in Australia, Gold Coast is a wonderful place. So, I want to go to Brisbane.

The reason I joined Australia orientation is because I was interested in Australia. I like learning about different cultures from other countries and Australia came up in my mind because I did not know anything about Australia. Now I want to tell my friends about Australia. I regret not being able to teach many of Japan to because I didn't know much Japanese culture and history. I want to study more and teach them more if I have a chance to talk to them again.

In these five days, I used English to talk to people from different countries and it was very fun. It motivated me to use more English and speak to many people across the world. I want to study more English to get a job that uses English in the future.

## 【7】『天白川白書』—グローバルな視点で見た天白川流域のまち—

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）において、愛知県日進市を源流とした天白川流域に関するまちづくりを焦点にしたフィールドワークを実施した。上流域（名古屋商科大学域内）での水質調査、上流から中流域までのフィールドワーク、日進市役所などの周辺組織への聞き取り調査を進めた。しかしCOVID-19感染拡大により、その活動が大きく制限がかかった。フィールドワークを中心とした活動計画だったこともあり、活動計画を大きく変更することになった。河川を中心としたフィールドワークでなく、河川につながる森林環境や海外における環境調査、名古屋市内の施設の見学など比較的隣近でできること、また、ICTを使用したオンラインでできることの実践をした。本来の計画通りに実践できなかったという点においては否めない。ただ、その中でもやれることは何かという点において挑戦的・実験的に取り組めたことは今後の活動の糧になった。

以下は、天白川フィールドワークを終えた後、地域協働学習実施指導員岡田あつみ氏による学習支援会の内容である。この内容が本来3年間継続して実践する内容であった。

---

### [地域協働学習実施指導員による学習支援会]

テーマ 天白川フィールドワークにおける質疑と以後の学習の取組の検証

#### (a) 星野昭治氏について

- ・三本木川（天白川上流部）におけるまちづくりを実践されている方に関する意見交換  
星野昌明氏（昭治氏の父）による川の保存活動や資料の検証
- ・星野氏との交流を企画

#### (b) テーマ別に意見交換（○生徒の質問、→岡田氏の回答）

○飲み水を作りたいが、天白川の水は飲めそうにない。

→川の水は生活排水が多いので、難しい。ただ、天白川に流れ込む水は、もとは山の伏流水。家によっては掘抜き井戸が今でもある。ただし、鉄分が多い→川の水が茶色のもそれが原因かもしれない。鉄分が多いから陶器の材料（愛知県瀬戸市）。名古屋商科大学の近くに地下水をポンプアップしている。伏流水や井戸水の水の検証はどうか。

○ゴミが多い季節は？

→活動前（20年前）は、本当にゴミが多かった。その時は、粗大ゴミが多かった。最近ではゴミにも変化がある：最近ではペットボトルが多くなった。浄化能力がある葦が多いが、ゴミが引かかる。葦はある一定の時に刈らないといけない。

○川と関わりのあるイベントは多いのか？

→天白川で楽しみ隊：毎月実施している。まずは、楽しみ隊のイベントに参加。来年は、そのイベントと一緒に考えてみるのはいかがでしょうか。

○上流部で下水を流す管がとても多いと感じたか？

→古い家だとそのまま下水を流す家はまだあるのが理由。合併浄化槽や単独浄化槽を調



べると良い。完全浄化槽の整備が進んでいない。佐賀市下水浄化センターの下水に関するプロジェクトを調べると良い。汚泥を肥料にする。名古屋市の汚泥はどうしているかを調べてみると良い。日進市の浄化センターはなかなか見学できないからアプローチしても面白い。

○川の草の処理は？

→三本木川は、日進市が管理。天白川は愛知県が管理。川の草の処理は、順番に草刈りを実施している。二面の川：土手が人工。三面の川：土手・川底も人工。外来種の草が多い。パロットフェザーが多い。堤防は、道路管理者。その下は河川管理者など縦割り。川に生える植生を調査しても良い。また、縦割り行政の改善を模索してもよい。

○田んぼの水を天白川から引いていたのか？

→三本木川付近：ポンプアップした水を使っている。愛知用水以下は、用水の水も使っている。

○天白川への市民の愛着は減った？

→減ったように感じる。昔は瓶のジュースの時代は、川にそれを捨てていて川が危険だから子どもは遊ばない。今は、何が原因か調べても良い。「良い子はここで遊ばない」の看板の設置は腹立たしい。

○水質は？

→3カ所の簡単な水質検査をしている（毎月1回）。

○源流はどこ？

→本当の源流ポイントは難しい。そのエリア周辺と言う発想が正しい。湿地帯の部分もある。いろいろなところにわき水がある。源流にはいろいろな種類があるので調べるのもよい。

○川底は昔からこのような形か？

→「昔は大きな石があった」と星野さんが言っていた。ヤクルト工場は、昔排水が臭かった。この解決のため、浄化設備を整え、金魚を飼って証明しているらしい。ヤクルト工場付近は生物が多い。

○三本木川と天白川の境はそもそもどこか？

→県道の武田歯科の橋から

○日進そよかぜロードとは？

→前の市長が、天白川に人が歩かないからその道を造った。前の市長は市民型の市長。

○カッパのベンチは？

→車の部品を作っているBeat-Sonicという会社が作った。その意図は何だろう？ インタビューしても面白い。

○草刈りのタイミングは？

→8月～10月はヘビ・蜂が多い。2月がベスト。オウケンケイグクの駆除。

### 【アドバイス】

- とりあえず歩くという単純な作業は有効で大切である。それをやった上で、調査したいポイントを明確にする。現場に出る事でしか得られないことがある。
- それぞれの行政区の話聞く必要がある。



天白川の観察の様子

### <引率教員の感想>

黒宮祥男（社会科）

現地の川を見ることによって、ネット上の情報からでは得られない気づきが多く、岡田氏との意見交換は、生徒たちが調査すべき天白川水系のまちづくりに必要な用語が発見できた。今後の調査は、より具体的なデータ収集が必要になる。また、天白川水系だけでなく、他の都道府県の代表的な事例や海外の河川に関する内容を調査していく方向性が生まれた。個人的には、ゼミという形で現在行われているが、天白川流域研究室という形を学校内に組織し、以後その研究を引き継ぐ形が良いので、以後その名称を検討していきたい。また、岡田氏や星野氏の研究を若い世代が受け継ぐ意味で、その源流域である栗本学園としての責務かもしれないと感じる。

天白川を中心とした探究活動を行うゼミは、以上のような議論をフィールドワーク後に随時計画をしていた。この議論は建設的であり、また明確に課題を発見することができた。しかし、フィールドワークができないという課題が発生し、その社会状況でも新しい学びの形を模索しなければならないという難しい状況になった。新しい生活様式、新しい学びの様式への挑戦が本事業の2年目以降の大きな課題となった。

初年度からの事業対象のゼミ生が2022年3月1日をもって卒業した。その生徒たちは、天白川フィールドワークを実施し、オンライン国際理解研修カンボジアコースに参加し、学校設定科目SIA特論の授業を受け、海外交流や活動報告会などの外部イベントや企業連携を体験している。こうした経験を経て、どのようなことを考え、持続可能な社会や未来の地球に関して思いを募らせ、今に至っているか。

COVID-19感染拡大に伴い社会の価値観が大きく変化した中で、生徒たちは何を思い、何を学び取り、自らの未来を考えたか、天白川との関わりをどう捉えたか、以下は、そう

した生徒たちのレポート（「天白川白書」）である。このレポートからこの3年間の歩みを感じ取ってもらえればと考える。

---

### 「地上の星」が地域を創る？！

石川愛子（高校3年生）

「地上の星」という中島みゆき氏の歌がある。この曲は、多くの人が見ている上空にある星だけでなく自身の足元、つまり地上にも星があるということを歌っている。地上の星は目に届きやすいものの影に埋もれがちで、その存在自体が気付かれにくいという特性をもっている。しかし、地上の星は知れば知るほど面白く、魅力で溢れている。さらに、見つけた者の心を豊かにしてくれる。私はグローバル事業を通して天白川とそこで織り成してきた人々の生活はまさに「地上の星」であると感じた。

天白川は愛知県日進市米野木町三ヶ峯付近を源流とし、名古屋市東南部を流下しながら名古屋港に流出する河川だ。私が通う名古屋国際中学校・高等学校からもほど近い。それにもかかわらず私は、この事業に参加する以前天白川について多くを知らなかった。また、その魅力について理解していなかった。しかし、天白川を探究するにつれて天白川は地域に欠かせない大切な地域資源であることに気が付いた。そして、この地域資源を用いることで持続可能なまちを創ることができるのではないかと考えるようになった。以下よりこの思いに至った探究活動について詳しく2つに分けて記す。

まず1つ目は「天白川ウォーキング」からの学びについて述べる。天白ウォーキングとは天白川の源流から下流部に向かって歩く取り組みである。歩くことで普段なら気付かない、ディテールに満ちた天白川流域の実態を学ぶことができた。実際に、上流部の透명한水とそこに生息する小魚、草むらから出沒するヘビ、下流部に生息している外来種の魚、川の幅が広がるほど悪化する水質などという様々な川の実態を目の当たりにした。その中で特に印象に残っているのは上流部の川沿いに植えられていた桜の苗木の存在である。そこには数十本の苗木が連なって植えられていた。後日調査すると、その苗木はある地元住民の方が「何十年後かに後世に人に残せる美しい桜並木を作りたい」という想いで自ら植えたものであることがわかった。私はこのことを知り、地域の方の未来を想う温かい気持ち心が焼き付いて離れなかった。それと同時に、知らない・気付かないということは地域の様々な可能性を壊しているのではないかと感じた。このような「地域の人の想い」という大切な地域資源を発見し、その魅力を多くの人に広めていくということが持続可能なまちづくりに必要だと考える。

2つ目に『天白川で楽しみ隊』の方々との交流について記す。天白川で楽しみ隊とは愛知県日進市で活動する市民団体のことである。活動はゴミ拾いや川の散策、生き物を捕まえる「ガサガサ」と呼ばれるイベントなど多岐に渡る。私は楽しみ隊の代表を務める岡田あつみ氏へインタビューを行ったり、活動に参加したりするなど交流を深めた。その中で楽しみ隊のメンバーの方々为天白川について熟知した上で川を心から愛していた姿が印象

に残っている。水質や生態系、川や地域の歴史などの多様な知識を元にその魅力を子供へ発信しようとする強い思いこそがサステナブルではないかと感じた。そして、このような思いを持ち地域で活動している人たちの存在つまり、人という地域資源を知った上でこの天白川地域を見ると、その見え方は大きく変化した。そのため、1つ目と同様に地域資源を発見し、発信していくことの重要性を再認識した。

以上の2つの経験から私は「天白川」を取り巻く様々な環境は地域に欠かせない地域資源であると感じるようになった。また、天白川のみならず他の地域にもその土地ならではの地域資源が必ず存在し、それが地域の持続可能性を創る鍵を握っていると考える。

これらのことを踏まえた上で私は「グローバル化」という言葉の真の意味について考えた。私はグローバル化とはどこかの国の真似をすることではなく、「その国らしさ」を守り、その「らしさ」同士を認め合い繋がっていくことを指すのだと考える。だが、現在の「グローバル」の状況はどうだろうか。私は「ローカル」の要素が抜け落ちており、「らしさ」を守れていないのではないかと感じる。「らしさ」はその土地の気候、風土、歴史、文化など様々な要因によって成り立っており、地域の生態系を守る上で欠かせないものだ。したがって、「らしさ」の喪失は地域の持続可能性を脅かしかねない。今一度、地域資源を再発見しそれを用いて街を「らしさ」で溢れさせることが必要だ。

地域の地上の星、つまり地域資源を見つけ「らしさ」を育てることは多方面において持続可能と言える。例えば、「ふるさと意識」を身につけることができることが挙げられる。現在は、川と触れ合う機会が減少したことが原因でふるさと意識が希薄化している。この課題が引き起こす問題は、単に愛着や誇り、帰属意識を失い、居住者が精神的ストレスを抱えるといった精神的・心理的問題だけでなく、協働による地域づくりをも阻害してしまう可能性がある。そのため、「らしさ」を感じられるまちを創ることでこのふるさと意識の向上にも貢献し、協働が活発に行われるまちを築くことができるだろう。

私は将来、「都市化」から「地域化」に移行させる一端を担いたい。地域化とは都市のみに人口が集中することを是正し、その土地ならではのものを使って、地域に持続可能な循環を生む取り組みのことだ。地域資源を用いて日本のみならず、世界中の地域に都市にはない魅力を生み出し、人々が持続可能に住み続けられる街を創っていく。そして、各地の「地上の星」を見つけ、地域の人々とその輝きを共有しあえるプラットフォームを築きたい。

天白川は私に地域資源の可能性を教えてくれた存在であり、天白川流域から私の地域化の取り組みははじまるのだ。

---

## 天白川に秘めたる可能性

南 優音（高校3年生）

天白川について様々な角度から調査していく中で、天白川には人と人とを繋ぐ資質があるとわかった。しかし、その資質を活かせていないのが現状だともわかった。だから、天

白川の在り方を変えれば、天白川流域のまちは持続可能な地域になると考える。

そう感じたきっかけは、高校2年生のときに参加したカンボジアとのオンライン国際理解研修にある。カンボジアのコンポンプルック村とオンライン上で交流し、実際にそこに住む人の家や生活を見た。私たちのものとは大きく異なっていた。家は川の上に位置し、川の水からお風呂の水やトイレを流す水を得て、その生活排水もまた川に流す。貧しい家では、川の中でお風呂や排泄を済ませていた。よって川の水はお世辞にも綺麗なものとは言えず、茶色く濁っていた。私はその状況を見て、とても不便だろうと感じた。しかし、村に住む人はそのようには見受けられず、楽しそうに、かつ仲睦まじく暮らしていた。隣人との距離も近く、村長の娘さんが他の村人の家に遊びに行くほどであった。このとき、コンポンプルック村は物質的に豊かではないかもしれないが、精神的に豊かであると感じた。同時に精神的に豊かになれるのは、コンポンプルック村全体を流れる川のおかげであると考えた。コンポンプルック村は川という土台の上に様々な家が立ち、一つのコミュニティが成り立っている。川を通じて人と人との繋がりが強くなっていると言える。

日本では、情報技術の発展や水難事故の多発によって、子どもから大人まで皆、川に行く機会が少なくなった。水道設備が充実したおかげで、飲み水や洗濯するときの水を川から得る必要もなくなった。物質的に豊かになったために、結果として川と関わる機会が減ってしまった。また、マンションの増加により、住民会や地域イベントが減少したことで隣人との関わりも減ってしまった。挨拶をすることもなく、そもそも隣人の顔や名前すら知らない人も多い。人と人との繋がりが薄くなったことで精神的に豊かとはあまり言えなくなった。日本は、コンポンプルック村とは正反対の存在になったと言えるだろう。では、日本でも川を介せば、その流域に住む人たち同士の繋がりが強くなるのではないか。

持続可能な社会を達成するには、持続可能な地域がたくさん存在する必要がある。持続可能な地域を達成するには、地域住民の協力が不可欠である。コンポンプルック村には川の上のコミュニティがあることで、持続可能な地域を達成する要素があると言える。だから、天白川流域のまちなも川を介して、コミュニティを作れば、カンボジアと同じ要素を持てると考えられる。しかし、いきなりコミュニティは形成されないため、まずは天白川と深く関わることを今後の課題にすべきだと思う。すでに天白川では気軽に参加できるイベントが行われていて、その活動を啓発して天白川流域のまちに住む人に参加してもらうのも一つの手だろう。他には、学校の授業の取り組みの一環として天白川と関わるのも良いのではないかと私は考える。例えば、小学校や中学校なら、川で遊ぶ機会を設けたり、川に落ちているゴミ拾いを体験したりすることで、学びながら川と深く関わるができる。高等学校では、高校生に自分たちで天白川を盛り上げるイベントを考えてもらい、良い案を実行するのはどうだろう。そのイベントに天白川流域のまちに住む人が参加してくれれば、結果として天白川を介してコミュニティの形成ができ、人と人との繋がりが強くなるのではないか。

天白川流域のまちに住む人の生活は天白川と共にある。それはコンポンプルック村の人

の生活が川と共にあることと同じだ。天白川と深く関わり、コミュニティを形成すれば、天白川流域もカンボジアのような精神的に豊かな地域になる。天白川流域のまちこそ、持続可能な社会を達成するための、最初の持続可能な地域になれるに違いない。

---

### 持続可能な未来への始めの一步

小島雪花（高校3年生）

高校3年間の活動から得られた経験を基に私は天白川流域の街の持続可能な未来について考えていきたい。私は天白川流域を持続可能な街にするために大きく分けて2つの課題があると考えます。

まず1つ目の課題として天白川との共存が出来ていないことが挙げられる。実際に天白川を上流から歩き続けた結果、休日であるにも関わらず人が少ない印象が強く残っている。現在、コロナ禍の影響もあるかもしれないが川が人々の生活に生かされていないと考える。高校2年生の時に参加したカンボジア研修で、私は川がカンボジアの人々の生活に深く関わっていると感じた。カンボジアは発展途上国であり、日本のように設備が整った水道はほぼ設置されていない。人々は雨水や川からの水が非常に重要な資源の1つである。その水は日本とは違い、決してきれいとは言えないがカンボジアの人々は川との共存ができています。私は川と一体化した生活によりカンボジアのコンブンブルック村では村全体が家族のような温かさがあると感じた。私はこの研修から天白川流域の街も川との共存ができれば、カンボジアのように近隣とのコミュニケーションが増え、街の発展につながると考える。この課題の解決策として私は川との関わりを増やすイベントや活動をしていくことを提案する。日進市が提供している「天白川で遊ぼうマップ」というパンフレットにはいくつかの団体が記載しており、天白川で魚釣りや虫取りを行っているところがある。そのような遊びに多くの人が参加してもらうため、情報を発信しながら世の中に知ってもらうことが重要であると考えます。このような活動をしていくことで私はSDGsの11番「住み続けられるまちづくり」に効果があるのではないかと推測する。なぜなら、活動がきっかけで天白川が街のアピールポイントになったり、イベントによって地域で関わりを持つことができるからだ。コミュニティが増える結果、天白川流域の街が活性化され、愛知県の魅力の一つになるだろう。私は地域との関わりを持つことも「住み続けられるまちづくり」の実現のために重要な役割の1つだと考える。

次の課題として川の清掃が挙げられる。歩いた道のりの中で上流と多くの住宅が存在する区域の川の水が汚かったり、整備がされていないと感じた。私は事前の推測や調べでは何らかの生物がいるだろうと考えていた。しかし、実際はほとんどみることができなかった。川の上流では下水道の設備が行き届いておらず、家庭から排出される下水がそのまま天白川に垂れ流しになっている家がある。上流だけでなく、住宅街周辺の川では家庭で使用する洗剤が水面に浮かんでいた。他にも川の水が見えないほどの雑草が生えている場所があった。これらの事柄を総合して私は天白川流域の街の持続可能な未来のためにまずは

川の清掃をすることを提案する。清掃は簡単に行動に移すことはできないと考える。しかし、日進市にある団体の中に清掃作業を活動の一環で行っているところがある。そこに若年層が参加することによって大幅に作業が進み、天白川に幅広く生き物が生息することができるだろう。この結果、最初に提案した解決策と合わせることで持続可能な街の未来に大きく貢献ができると考える。

この2つの課題から生まれた解決策を実施することができれば、天白川流域の街を持続可能な未来へ導くことができるだろう。私は天白川流域が将来、持続可能な街になることで他の分野や活動に様々な可能性を与えるのではないかと考える。そのため、私はこれからの4年間の大学生活も高校とは違う視点に立ちながら天白川流域の街の発展に関する活動や研究に携わっていきたい。

---

### 「友」になるチカラ

大島 梨紗子（高校3年生）

2019年度からの高校3年間に渡って、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型」に参加してきた。この中で私が習得した最大のものは、視野の広がりである。本稿では、大きく3つに分けて、この「視野の広がり」について述べていく。

1つ目は、「天白川」そのものについての視野についてである。天白川はあまり有名な川ではなく、流域である名古屋市の市民でも知らない人が多いだろう。しかし私は、幼い頃から知っていた。徒歩10分ほどのところに住んでいるからである。ただしその一方で、単に川があるということは知っていたが、自分の生活とは関係がなく、あまり意識したことがなかった。それほど近所なのに、自分の地元という感覚はなく、誇りなど持っていなかった。初めて地域社会に存在する天白川のことを意識したのは小学校4年生のときであっただろう。総合的な学習の時間に、天白川の野鳥について調べるというテーマが設定され、「川辺の楽校」の方の話を知ったり、実際に川に行って水中生物を獲ったりした。しかしその後も継続的に交流や行動をするわけではなく、児童たちの心の中にも天白川への関心は残らなかったように感じる。私自身、小学校1年生のときから意味もわからず口ずさんでいた校歌に「まどにきらめくてんぱくはおがわあつめてえんだいの」という部分があったのだが、それが「窓に煌めく天白は小川集めて遠大の」というように、天白川について歌っていたのだということは卒業後に気づいた。それはさておき、この歌詞は実は今は通用しない。今から50年程前、この歌が作られた頃には、小学校の窓から天白川が見えたというのは驚きだ。今では多くの建物に遮られて少しも見えない。私はこの事業において3年間天白川について調べる中で、初めに「まちづくりの歴史」をテーマに設定した。天白川水系のランドスケープのまちづくりについて考えるためには、今の天白川だけではなく、どのように形成されてきたのかについても知りたいと考えたからだ。3年間過ぎてみて、知る範囲の幅を広げることはやはり必要なことであったと考える。しかし、広げ

るべき範囲は時代のみではなかった。私は小学校4年生のときに学んだ知識のみで、天白川のイメージを持ってしまっていた。それは、大きくも小さくもない、地域社会の中で特に役割を持っていない川というものだった。当時私が知っていた天白川は、家や学校に近い、植田川との合流地点付近のみだ。活動を通じて、名古屋商科大学内の源流から名古屋港に流れるまでの長い流域の中でそのイメージはほんの一片だと学んだ。源流に近い上流では小川として流れていて、横にある畑には、川の水を引く装置がある。現在も利用されているのかは分からなかったが、農業用水として利用される形跡を確認できた。川の流れに沿って歩くと、異臭とともに緑色になっていたり、愛知用水に繋がっていたり、地域の方が自主的に桜を植えていて桜並木になっていたり、「ニッシーそよ風ロード」という散歩道になっていたり、川辺でゴルフの練習をしている人がいたり、場所ごとに川の役割が異なっていた。「天白川で楽しみ隊」の方々は天白川を本当に大切に思っていることも知った。植田川との合流地点付近しか知らなかった私は、視野が広がった。

2つ目は、「持続可能な社会」の概念についてである。中学生のときからSDGsに関する活動を続けてきた私は、SDGsの全項目を達成することが持続可能な社会を創るためのゴールだと信じて疑わなかった。今でも確かにそれは必要なことであると考えている。しかし、そこには主に物質的な豊かさが謳われている。SDGs 5や10、17など、一部の例外を除いて、多くは数値化できるような豊かさだ。この事業でオンラインでのカンボジア国際理解研修に参加したことで、この考え方に疑問を持つようになった。まず、カンボジア研修についてだが、これは、持続可能な水系のまちづくりを考えるために、カンボジアの中の水との関わりが深い地域を訪れるものだった。私のグループでは、「世界をより持続可能なものにするために本当に必要なものは何か」を探ることを研修のテーマとした。人々の水に関する環境への考え方や地域への想いを知ることで、人と水との関係性について詳しく考えることができると考えた。私はこの研修の意義について、実際に参加する前には、日本が持続可能な社会、カンボジアが持続不可能な社会だから、私たち日本人がその持続不可能な面を突き止め、そこから世界全体をより持続可能なものにするためのヒントを見つけ出すことだと考えていた。しかし、研修に参加し、カンボジアには日本にはない持続可能性や豊かさがあると知った。それは、精神的な豊かさだ。現地の人々は、家に電気が通っておらず、不衛生でも排泄や洗濯をする湖で獲った魚を売っている。これは私の感覚からすると「貧しい」生活である。しかし、研修に参加している間、これと対照的に印象的だったのが、現地の人々の笑顔だ。オンライン形式で私たちが話しかけると大きな笑顔で応えてくれた。また、泥棒が入ったときには、警察が来る前に地域住民が協力して捕まえるという話を聞いたり、大人のボートに相乗りさせてもらう少年たちの姿を見たりしたときには、地域の絆の強さや、人々が協力しあって日々を過ごす様子がうかがえた。確かに、インフラ不足や不衛生な生活、機能不足の公共機関といったものは課題であるが、開発途上国と言われるカンボジアに豊かさ、持続可能性を見出せたのは大きな発見だった。それは、日本や他の先進国の持続不可能性を見つけることでもある。どちらにも、持続可



能性も持続不可能性もあり、どちらがいいということは言えない。だから世界は、どちらかに近づけようとするのではなく、両方が寄り添い合って共に持続可能な世界を創ってほしい。この経験を通じてそう考えるようになった。私の中の「持続可能な社会」の概念が広がった。

3つ目は、日常生活の中での視野の広がりだ。日々触れるものに対して常に考える力を持ち、疑問や関心、問題意識を抱くようになった。例えばスーパーにいたとき、店員が明らかに小さなカバンしか持っていないお客さんに有料レジ袋購入の声かけをしたり、お弁当を購入したお客さんにお箸が必要か自ら聞いたりすることに疑問を感じた。店員やお店からはお客さんの状況を見極めて、お客さんをより大切にしたいサービスを行いたいという姿勢が感じられる。一方で、地球環境のことを考えたとき、その行動は正しいと言えるのだろうか。お店側は、自分たちが何を目的にレジ袋を有料化したのか忘れてしまっているのではないだろうか。私は自身がこのような物事の根本的な部分に目を向けられるようになってきたと感じる。日常生活の中でこのような事柄に気づくことは一見ちっぽけなことである。しかし、この力こそが私が活動の中で得た最も大きなことなのではないかと考える。培ってきた、身近な一つ一つのことからよりよい世界について考える能力は、今後ずっと生かすことができる。つまりサステナブルではないか。

日頃から周りに関心を持つようになり、ふとしたときにも天白川との関連を考えるようになった。京都に行ったとき、鴨川では、まさに人と川が共生していると感じた。京都市左京区にある鴨川デルタは、川の形や環境自体は天白川と植田川の合流地点に似ている。しかし、地域社会での役割は異なる。鴨川では多くの人が散歩をしたり、凧揚げをしたりと思いついたことをして自由時間を過ごしている。また、四条の先斗町では鴨川に納涼床が敷かれ、京都の夏の風物詩となっている。天白川が人工物に埋もれ、コミュニティでの役割の多くを失ったように見える一方で、京都は鴨川あつての京都で在り続けている。その違いの原因には愛知と京都の歴史の残り方の違いがあるのではないかと私は考える。京都は特に歴史を守る街だ。また、鴨川が流れるすぐ近くにはかつての京都御所がある。このような理由から、自然が人との繋がりをもちつづけられたのではないか。やはりまちづくりを考えるとときには歴史を踏まえるべきだと考える。そして時代軸だけでなく、現代の中の物事の複元的な部分にも視野を広げるべきだ。このグローバル型事業を通じて私はその必要性と能力を学んだ。天白川自体に関する知識は今後の人生で役立つかは分からない。しかし、多くの視点から物事を柔軟に考える能力、多様な意見に耳を傾け、そこから自分の意見を形成していく能力は、皆と協力してより協調性のある持続可能な社会を創っていく上で必ず宝物になっていくだろう。今後の人生、それを存分に生かして、皆と「友」になり、より持続可能な社会を創っていく。

## 「自然を殺している」

渡辺結愛（高校3年生）

「自然を殺している」という実感はあなたにはあるだろうか。また「自然を殺す」とはどういう意味なのだろうか。

私が天白川流域を調査し感じたことは私たちが自らの手で自然を殺してしまっているということだ。それは直接的なことでもあり間接的なことでもあってどちらでも捉えることができる。2020年9月、私たちは天白川沿いを自らの足で歩くフィールドワークを行った。すると天白川に対する印象やイメージが大きく変わったと同時に色々なことに気づくことができた。天白川沿いを歩く以前は、何もないごく普通の川だと思っていた。しかし、実際に足を運んで歩いてみたところ行ってみないと分からないことがそこには山ほどあった。上流には小さな魚がいたり、亀がいたり。想像以上に川の水が綺麗であったものの中流は草木で川が覆われていた。写真だけではわからないことが実際に足を運ぶことで初めてわかるということの大切さをとても強く感じた。ここまで川が綺麗なのは誰かが何かをしているから、草が切れ手入れされているのは誰かの力が働いているから。自らの目で観察することで力の働きの大切さも学ぶことができた。しかし、それと同時にわたしが一番に感じたのは誰かの力が働いて作られている自然を他の誰かが殺してしまっているということだ。それはせっかく綺麗に保たれている自然を壊してしまうことも殺してしまっているという意味でとらえることができるが一番はそれを何もなく通り過ぎてしまったり、関心を持たずにいるという行為が殺してしまうと考える理由だ。せっかくあるものを無駄にしている=殺してしまっていることだと考えた。

では一体どうしたら自然を殺さずに済むのだろうか。やはりそこにはわたしたち若者の力が必要不可欠なのだ。これからの時代を生きていくのは私たちであるからこそ私たちが自然を生かしていく必要がある。自然を守り続けていく必要がある。そして自然に生かされる必要がある。そのためには若者の興味を惹きつけるなにかをすることが一番の解決策だと考えた。今の時代、SNSの力がもたらす影響は私たちの想像をはるかに超えている。そのSNSを使い若者の興味を惹きつけ天白川に足を運ぶ人数が増えると自然は自然と生かされ続ける。殺す必要は一切なくなり自然も殺されずに済むのだ。実際若者世代であるわたしの視点から見ると今の天白川にはこれといって多くの若者を惹きつけるものはないと考える。何かひとつ実行してみるだけで未来が変わるかもしれない。それは物であったり食であったり溢れるほどの候補が転がっている。あらゆる可能性が目の前にあるのにそれに目を瞑ってしまうのはすごく勿体無いことだ。またSNSを使って人を集めるという考えは決して特別なものではなく多くの人がアイデアのひとつとしてあげると考えるがなぜそれを実行することができないのだろうか。それだけではなにも変わらなく0から1をやることすらできていない状況に当たってしまう。考えただけ終わってしまうのならばそれは持続可能とはいえない。実際に行動に移し結果を出しそれを続けていく。それが持続可能だと考えられる。人が集まり自然を自然と生かす。0から1を作り出すだけでなく1から2を作り上げる。これこそが持続可能な未来がつくられる第一歩だと考える。

## 【8】地域との協働による活動

地域との協働による活動について、地域とはどのような人を指すのか。協働はどのようなことをしたら協働と言えるのか。そのパターンはいくつもある。名古屋国際高等学校の生徒と他校の生徒や先生、企業や自治体、国際機関、あるいは海外から来日している留学生などと交流会の実施や企業訪問、ワークショップや協働作業によるボランティア活動というさまざまな協働形態の組み合わせを行った。また、国外における社会課題に対して、日本の地域レベルの実践による解決法で検証することで海外の地域社会の解決を図った。そもそも地域との協働をすることで生徒たちにどのような学びが生まれ、将来に向けたヒントを創造してくれるのだろうか。〔1〕学校設定科目SIA特論Ⅱは、高校3年生の選択科目であり、持続可能な社会の実現のために高校生は何かできるかを考える授業である。特に、本年度は「授業を作ろう」や「未来を描く」というテーマで授業が展開され、理想的な未来の学校や未来を生きる自らの社会を過去・現在の様子から未来を創造する。協働というよりは、地域の情報や声を拾い、未来を地域に提案する形と言える。〔2〕総合的な探究の時間では、高校1年生では「地域企業のCMを勝手に作ろう」というテーマで地域の企業に視点を向けた。高校2年生では、自らが興味を持つ企業などを調べ、訪問をした。〔3〕モロッコ・フィリピンとの交流は、海外の社会課題を解決するためのアイデアを考え、それを実践した。〔4〕地域との繋がりとして、名古屋市昭和区との協働活動をした活動は、学校近辺の公園をテーマにしたワークショップや森林地区による間伐作業などを実践した。〔5〕地域企業との連携は、地元企業とのコラボ商品を開発した。〔6〕実践活動の発表及び啓発活動は、上記の活動の成果を学校内外、そしてオンラインを使用して、自らの実践を表現した。その結果、多くのマスメディアからの取材も増えた。そして、〔7〕English Zoneでは、地域の留学生を招き、本校生徒と交流を重ねた。

誰とどのような形で協働をするか、その組み合わせを高校生のどの発達段階で実践するとどのような効果が生まれるか。その組み合わせをすべて比較し検証するのは難しい。しかし、その組み合わせがなく、「地域課題を見つけ、課題解決の方法を考え、それを実践し、検証して、報告する」というワンパターンでは、生徒たちの思考が偏ることは確かである。また、生徒たちの思考が多様化している現世代において、協働のやり方を一つにすることがその多様性を阻害することになる。そうした意味において、生徒の発達段階に加え、生徒の素養の獲得段階も考慮に入れ、その生徒にあった協働のあり方と協働相手をうまく組み合わせ提供することが教育環境には必要であると考えられる。そのためには、指導者としての教員がそれに耐えうる思考を持ち得ることが急務である。教員がいかに地域と交流するか、いかに新しい時代、新しい思考、新しい知識に興味を持ち、追い求めるか。そうした教員の姿を見せることが、生徒が自分にあった協働活動を見つける第一歩になると考える。以下、そうした教員の授業実践を紹介する。

[1] 学校設定科目SIA 特論Ⅱ

教科：サステイナビリティ

科目：SIA特論Ⅱ（単位数：2）

学年：高校3年生

スケジュール：

(1) 本当の学びとは～学びの流儀～：3年間のサステイナビリティに関する授業を受けた生徒たちが、「学び」について考えてみる。自らの成長した「学び」やどのような成長が見られたかをリフレクションする。

(2) 未来の学校：昭和初期に描かれた21世紀の学校の絵を提示し、生徒が30代になった時の「未来の学校」を創造してみる授業である。創造する段階でSDGsの目標が達成されているという想定で行う。

(3) SDGsに関する授業をやってみよう。：SDGsに関する授業案を考え、実際に45分間の授業を実践してみる。プレゼンテーション・ポスターセッションは、本教科では実践したが、「授業」というカテゴリーにした場合、どのような違いが生徒たちの心の中に生まれ、また、「学ぶ」と「教える」の立場の違いを知ることによる新しい素養の獲得を目指した。

①大規模な授業案の例

〈テーマ〉 未来がどうなるのか  
 ・未来がどうなるのかを想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。  
 ・未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。  
 ・未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。

領域	目標	到達目標	評価の観点
導入	未来の学校を想像する。 未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。
展開	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。
結核	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。

領域	目標	到達目標	評価の観点
導入	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。
展開	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。
結核	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。	未来の学校を想像する。未来の学校を想像し、その未来を表現する。

(4) 君たちはどう生きるのか—対極の流儀—

(5) 未来を語る

[13文字で自分をまとめる。]

自分自身の生き方や3年間の実践を13文字以内という制限を設けて表現する。

(生徒回答例)

心の持久力と余白からのやりたい精神。協力性、探究心で包まれているのが私です。

誰も成し得なかった夢への挑戦。

[ジョハリの窓]

開放・盲点・秘密・未知の4つの窓を紹介し、自分自身を分析する上での視点の獲

得を目指す。

[他人をプレゼンしてみよう。]

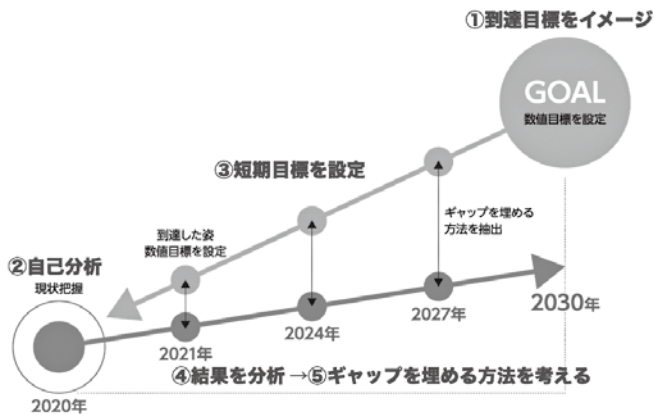
ジョハリの窓を参考に、2人1組になり他人に自分の性格や良い点・悪い点、成長すべき点などのインタビューを受ける。そのインタビュー内容とSDGsを基本とした未来の社会を考えながら、「他人について」のプレゼンテーションを行う。プレゼンする他人を深く観察し、その素養を見つけ、未来の社会でどのような活躍をするかを考えることは、相手にとって自分自身を再認識すると共に、自らの再発見にもつながる。

[自らの生きる未来を考える。]

他人プレゼン後、未来の社会で自分はどう生きているのかをイメージしてみる授業を展開した。以下の①～④で将来設計を考える。本授業では、①を実施。

- ①到達目標をイメージ：自分が生きる2030年をイメージする。イメージは、自分の周りのみ。例えば、職場や家庭など狭いエリアを考える。
- ②自己分析：他人プレゼンなどを活用。
- ③短期目標を設定：①までの短期目標を具体的に考える。
- ④フォアキャストイングとのギャップを埋める作業を考える。

①について生徒各自が自ら生きる未来を創造する。各生徒の狭いエリアでの未来を集めることで、広いエリアの未来の社会が形成され、理想の未来像を構築することを目標とする。高校3年生は、受験に向けた不安や勉強に集中する大切な時期である。そうした時期に自らを見つめ直し、何のための「学び」なのかを再認識する必要がある。また、卒業後に目標を見失うことなく、サステイナブルな社会のためにリーダーシップを発揮する生徒の創出を目指している。



## [2] 総合的な探究の時間

名 称：高校1年生—地域キャリア「勝手に宣伝！～CMを作ろう～」

授 業：総合的な探究の時間（単位数：1）

内 容：時代の移り変わりとともに様々な仕事が見られては消えていく。生徒たちは、多様な生き方が可能な時代に生まれたからこそ、自分自身でキャリアを設計していく力が必要となる。さらに、モバイルデバイスの普及によって、多くの情報が溢れているからこそ、自身の興味のあるものにしかがいれないという問題点もある。そのような時代において、生徒の世界を広げ、社会とのつながりを作っていくためにも、自身で探究していく力がつくようなキャリア教育が必要とされているのではないだろうか。

上記の現状を踏まえ、中高一貫クラス4年生の「総合的な探究の時間」では地域キャリアと称して愛知県にゆかりのある企業・団体に注目させ、その企業を宣伝するCMを作ることにした。ステップは以下のとおりである。

ステップ①：愛知県にゆかりのある企業・団体をリスト化し、その中から一つ、宣伝したいものを選ぶ（グループで作成をしてもよいが、メンバーは2人までとし、かつグループ間で宣伝したい企業・団体の重複はないこととする）

ステップ②：既存のCMを分析することで、「そもそもCMとは何か」「良いCMの条件は何か」「CMを作る際に気をつけるべき差別表現」を考える。

ステップ③：自身が作成するCMの構想を練り、絵コンテに起こす。

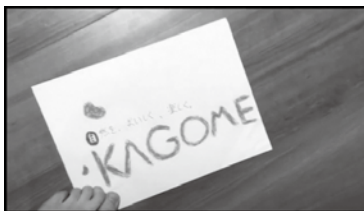
ステップ④：撮影、録音、編集など。

ステップ⑤：観賞と評価会。（評価の観点は、編集上の工夫、企業・団体の魅力を伝えられているかどうか、である）

上記のステップを経て、キャリアを探究するだけでなく、愛知県にゆかりのある企業・団体という制限を設けることで、地域の魅力の再発見につながった。また、生徒たちはデジタルネイティブ世代であるからこそ、簡単に動画を作成してしまう。そこで、ステップを明確にし、教員のチェックを挟むことで、あえて簡単には作らせないようにした。クラスメイトの作品を面白いと感じるのは当たり前のことである。しかし、それを一つのCM



生徒作品例① 犬山城は、このCM制作のために生徒自身がマイクラフトで作成したものを使用。



生徒作品例② 逆再生や実食、アフレコなど、編集のセンスが光る。



生徒作品例③ 地域の企業・団体がSDGsにどのような貢献をしているかに注目した。

として考えたとき、果たしてその面白さは「世間」に通用するのかを考えなければならぬ。CMの本質は、観た人の意識を変えることである。クラスメイトの「ウケを狙う」という内側に籠るのではなく、実社会のオーディエンスを想定することで、社会を意識することができた。来年度に企業・団体と直接繋がる足がかりになったのではないだろうか。

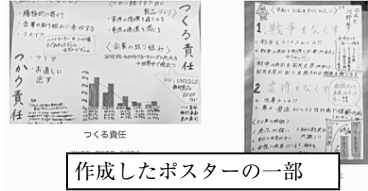
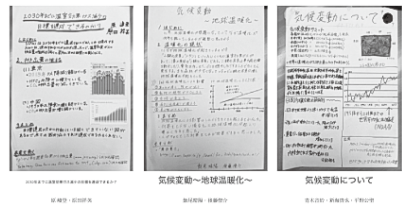
名 称：高校2年生—地域キャリアフィールドワーク

授 業：総合的な活動（1コマ）

内 容：今や世界や日本では、SDGsの目標達成と持続可能な社会の実現に向けて様々な活動や社会貢献に取り組む企業がたくさんある。街を歩くだけでも、インターネット上でも生活をするだけで目にするようになったのではないだろうか。本校の普通科グローバル探求コースでは、地球規模の視野で考え、地域視点で行動・活躍できる人材育成を目指しており、高校1年次には、SDGsや身の回りの物事を事象として「知識を得る」・「課題を



ポスターセッションの様子



作成したポスターの一部

考える」・「情報を収集する」・「整理する」といった活動に取り組んできた。そこで、高校2年次では、「情報をまとめる」・「発表する」・「課題を見直す」といった活動を、愛知県でSDGsや社会貢献活動を行なっている企業や団体に着目して総合的な活動の取り組みを行なった。

1学期の取組では、“ポスター作成”と“ポスターセッション”を実施。

ポスターの作成は何度かあるものの、グループで集めた情報を精査し、どの情報を使用するのか、文字の大きさや内容、配置などを考えてポスター作成するのは、新鮮であった。ポスターは、「SDGsをより深く知ること」と「企業や

「誰のために行動するか」と「具体的な行動の仕方」について	
活動の目的	SDGs達成に向けた具体的な行動計画を策定し、実践する。
活動の場所	本校の校内で実施する。
活動の時期	10月～12月
活動の参加者	本校の生徒、教員、保護者、地域住民
活動の予算	10万円以内
活動の成果	SDGs達成に向けた具体的な行動計画を策定し、実践する。
活動の評価	活動の進捗状況、参加者の反応、成果の達成率
活動の課題	活動の進捗状況、参加者の反応、成果の達成率
活動の感想	活動を通じてSDGsの重要性を学び、実践する。

企業・団体の取組の抜粋

団体がどのような取り組みを行っているか」を基盤として作成し、完成したポスターを使用して、高校1年生を対象にポスターセッションを実施した。普段は人前で発表する機会が少ない彼らにとって、自分たちのクラス以外の生徒や先生を対象にした発表は良い経験であったのではないだろうか。

次に、2学期の取組では、グループに分かれてより詳しく企業や団体を調査する活動を進めた。1学期では世界規模での活動で調査し発表を行なったが、今回は各グループ、それぞれが愛知県で「社会貢献」や「SDGsに取り組んでいる企業や団体」に絞って詳しく調査を行うことにした。「どのような活動をしているのか」、「どのような企業・団体が活動をしているのか」、「誰のために活動をしているのか」を調査して、「自分たちにもできる活動」を各グループで考えて、取り組もうと計画を立てたが、なかなかアイデアが出なかった為、実際に地元地域で活動を行なっている企業・団体へ取材・訪問を行うことに内容を変更した。取材・訪問をすることへ変更をした目的は、実際にSDGsへの取組や社会貢献活動などのお話を伺うことで、より現実的に物事を捉え、自分たちにできること(活動)やアイデアが湧くのではないかと考えたからである。企業へ訪問を行うにあたり、質問項目の設定や、写真撮影、記録の仕方や先方へのアポイントなど、生徒一人一人にそれぞれ異なった役割がある。また、生徒たちだけで訪問を行なったグループもあった。生徒や教員を相手に発表を行うのではなく、実際に活動をする社会人を相手に自分たちの意見を伝え意見交換をして、活動内容を伺った経験は彼らにとって大きな財産となっただろう。2学期の当初の予定とは大きく異なってしまったが、結果的に各々が責任感や緊張感を持って活動が実施できたのではないだろうか。

最後に3学期の取り組みでは、2学期に調べた・訪問した企業・団体の取り組みを紹介するホームページの作成を行なった。各グループそれぞれが取材内容や活動写真、企業の取り組みを紹介するHPをGoogleのアプリケーション機能を使用して作成をする。最初こそ戸惑ったものの、Z世代の彼らはすぐに順応しHPの作成を進めていった。その業界だからこそのこと、その会社だからこそ実施して意味のあることなどを各々のページに記載した。オンライン授業や進路指導、新型コロナウイルスによって活動が制限される中、決して十分な時間が確保できたとは言えないが、SDGsの目標達成と持続可能な社会の実現に向けて様々な活動や社会貢献に取り組む企業、団体につ



生徒が作成したHP



いて考え方や見方が変わったのではないだろうか。

この活動を通して、今後の彼らには今回学んだこと、調査したこと、取材したこと、感じたことを基に自分たちに何ができるか考え、自ら行動できる人へと成長していった欲しい。

## [C] モロッコ・フィリピンとの交流

### [モロッコ国際交流]

#### [1] 交流日時

- ① 2021年11月08日（月） 16:00～17:30 \*日本の3校のみ参加
- ② 2021年11月29日（月） 16:30～18:00
- ③ 2022年01月13日（木） 16:00～17:30 \*日本の3校のみ参加
- ④ 2022年02月21日（月） 16:30～18:00

交流はすべて双方向通信アプリ（Zoom）を用いてオンラインで実施した。

#### [2] 参加校

名古屋国際中学校・高等学校、昭和学院中学校・高等学校、東海大学山形高校、タンジェ・バンク・ポピュラー私立学校、アフメッド・ベン・デラ・アル＝イドリッシ学校、オウム・エルファドル公立学校（日本の高等学校3校、モロッコの小学校3校の計6校）（オブザーバー）El Moundir MAYDARAK（駐日モロッコ王国大使館 文化参事官）Mouna Belbekri（モハメッド6世環境保護財団 Eco-School Program Manager）

#### [3] 内容

国連が毎年3月22日に定めている「世界水の日」（World Water Day）に向けて、日本とモロッコにおける環境教育、文化の違いを互いに共有し、各学校で世界水の日に向けた取り組みを実践する国際交流活動を実施している。モロッコはアラビア語またはフランス語圏であるので、日本語—アラビア語の通訳を介して交流を図った。オブザーバーでマイダラック氏（モロッコ王国大使館）やモウナ氏（モハメッド6世環境保護財団）とは英語を用いて交流した。

交流①：モロッコ文化の概要と、環境に関する取り組みへの理解

初回の交流ではモロッコ王国大使館のマイダラック氏より、モロッコ文化についての講話と質疑応答を行った。生徒にとってモロッコは身近な国とは言い難いが、茶道やバブーシュ（履物）などの文化的類似点や2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」においてモロッコのララ・ハスナ王女が来日したこと等を学習した。モハメッド6世環境保護財団のモウナ氏からは、財団発足の経緯や、現在モロッコで注力している再生可能エネルギー、水資源の衛生管理、ごみ処理管理、産業汚染の除去についてのプロジェクトについて学習した。

交流②日本—モロッコにおける文化・学校生活についての紹介

生徒主体による日本—モロッコの文化紹介を実施した。日本の四季（春・夏・秋・冬）

を日本の3校が持ち回りで説明し、自校の学校生活についてもスライドを用いて紹介した。モロッコ側からは、夏休みの生活、ラマダン（断食）、アショア（こどもの日）についての説明を受けた。交流後半では、世界水の日に向けた各校の取り組み計画を作成することと、次回交流時にプレゼンテーションすることが伝達された。

#### 交流③水の循環についての学習

モロッコとの交流に先立ち、日本の3校で世界水の日及び自然界における水の循環について学習した。2022年の世界水の日テーマは「GROUNDWATER - MAKING THE INVISIBLE VISIBLE」で、本校教諭よりワークショップ形式で日常生活と地下水の関連や、水循環から見た地下水の重要性について学習した。

#### 交流④各校における「世界水の日」に向けた取り組み紹介

前回の交流を受けて、各校で計画した取り組みを発表した。

- ・名古屋国際中学校・高等学校 『1/2（にぶんのいち）チャレンジ』  
炊事・洗濯などで使用する水量を半分に抑えて行い、水の大切さを喚起させる。
- ・昭和学院中学校・高等学校 『有名になろう』  
Instagram上に専用のアカウントを作り、水についての投稿を発信。フォロワー数1万件を目指す。
- ・東海大学山形高校 『水資源の大切さを理解してもらおう』  
意図的に不純物の入った水を作り、それを飲むことできれいな水の大切さを理解する。
- ・タンジェ・バンク・ポピュレール私立学校 『水への意識を高めよう』  
学年で水に関する施設見学を行い、その後ポスターコンテストを実施する。
- ・アフメッド・ベン・デラ・アル＝イドリッシ学校 『校内で節水しよう』  
学内に水道委員会を設置し、毎月の学校における水使用量を把握し、水の大切さを訴える。
- ・オウム・エルファドル公立学校 『水の枢軸について理解を深める』  
適正な水使用について学習し、樹木への水やりにおいて水の再利用を考える。  
上記の実践報告について、6校が参加しての第5回交流会を2022年5月に実施予定である。

## —活動の様子—



[写真左]マイダラック氏との質疑応答(交流①)  
[写真上]現地からのプレゼンを視聴(交流④)

### [4] 生徒の変容

英語圏以外の国との交流経験はない生徒が多く、通訳を要することへの歯がゆさを感じている者もいた。ただ画面越しではあるが身振り手振りや話すスピードを工夫して互いに意思疎通を図ることができたという点は自信に繋がっていると感じる。テーマである水はどの国にも存在しており、各自の生活環境に応じた取り組みが可能であることに生徒自身で気がつくことができた。モロッコでは小学生のほとんどがSNSを利用しているので、各自の取り組みをSNS発信することを通じて、若者ならではのユニークな社会貢献の手法を見出してほしい。

### [NGOと連携した学校設定科目の運営]

#### [1] 活動時期

学校設定科目「SIA特論Ⅰ」における2・3学期の授業

#### [2] 対象生徒

中高一貫高校課程5年生の履修生徒27名

#### [3] 内容

認定NPO法人アイキャン（以下、アイキャンとする）が事業として行っているフィリピン・マニラでの児童養護施設「こどもの家」で生活する子どもたち（9歳～15歳の男の子18名）を相手として、本校生徒が教材を制作し、現地に届けることを目的とした授業展開を行った。

課程①：貧困に関する定義の理解

絶対的貧困と相対的貧困の定義の違いについて学習し、今回生徒が制作する教材の受

け手である子どもたちは絶対的貧困に類する生活状況にあることを理解した。その後「力の剥奪モデル」の観点から、「こどもの家」の子どもたちに欠けているものは何かをグループで議論した。

参考図書：『豊かさの開発』（開発教育協会、2016）

視聴覚資料：『神の子たち』（四ノ宮浩、2002）

課程②：教材計画

グループで制作する教材を計画し、①「こどもの家」の子どもたちは何が剥奪されているのか、②制作する教材の内容、③子どもたちが教材を使用した場合の効果予測、の3点をまとめ授業内でプレゼンテーションを行った。その後他のグループや担当教員より得た助言を踏まえて計画修正を行った。

課程③：アイキャンスタッフへの提案

オンラインでアイキャン職員の西坂 幸氏とつなぎ、グループごとに計画を提案した。現地の子どもの実情（文字の読み書き、生活習慣など）や、教材使用の継続性（材料を要する場合に現地調達が可能か）などを中心に助言を受け、計画修正を行った。

課程④：教材制作

2学期終盤より、グループごとに教材制作を開始した。冬季休業中の活動計画はGoogle Classroom及びGoogle Formで共有した。

課程⑤：アイキャン事務所訪問

有志生徒でアイキャン事務所（愛知県名古屋市）を訪問し、NGOの事業内容についてアイキャン職員の庭田美環氏より説明を受けた。その中で、NGOの活動資金源でもある寄付の重要性を理解し、高校生でも可能なボランティア活動についても学習した。今後の展開予定

3月中に教材制作を終え、アイキャン職員を介して現地に届ける予定である。その後2022年4月または5月を目処に、現地「こどもの家」とオンラインで繋ぎ、教材の使用感を収集するとともに交流を行う予定である。

#### —制作した教材—

	タイトル	内 容
A	紙石鹸と手洗い紙芝居	紙石鹸と手洗いの大切さを説く紙芝居をバナナペーパーで作成。
B	再利用できるものを作品に	現地で手に入る材料を使った工作方法をフィリピン語で作成。
C	Enjoy×Health	布マスクキットと、おはじきが入った固形石鹸を作成。
D	すごろく	基本的な四則演算と英単語が学べるボードゲームを作成。
E	懐かしい、楽しいあそび	日本のあやとりのやり方を英語字幕つきの動画で作成。



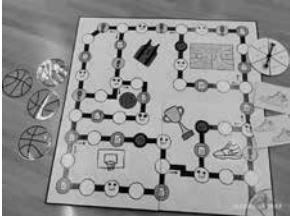
A：紙石鹸と手洗い紙芝居



B：再利用できるもの作品に



C：Enjoy×Health



D：すごろく



E：懐かしい、楽しい遊び

—活動の様子—



固形石鹸を作っている様子（過程④）



NGO事業説明を受ける様子（過程⑤）

〔4〕生徒の変容

NGOからの正確な情報に基づくことで、生徒自身の幼少期と「こどもの家」の子どもの生活環境の差を深くイメージすることができたことが大きい。履修生徒の中から、自発的にボランティアに参加する者も出てきており、学びのフィールドが学校外へ広がりを見せた点も有益だと感じた。

#### [D] 地域との繋がり—名古屋市昭和区との協働活動—

2020年から本校所在地である名古屋市昭和区との連携活動を行っている。昨年度は、昭和区内の公園をテーマにした高大連携ワークショップや昭和区長へのインタビュー活動などを行ったが、本年度はより実践的な活動が増加した。実践活動においては、昭和区役所区政部地域推進室を中心とし、区と連携をしているなごや環境大学や八事里山づくりの会も加わり、昭和区内に止まらず広い範囲での活動を行った。こうした活動において、自治体が抱えるローカルな社会課題を知るとともに、以前よりその課題に向き合っている市民の方々の思いや活動内容を直に触れることで、生徒にとって地域における社会課題の本質を見出すことができたと考える。

八事興正寺公園は、名古屋市昭和区が所有する公園で櫛の群生が残る貴重な森がある。また、範囲は狭い森だが、都市部に残された森であり、市民とともに育む里山として重要な場所である。その保全に関して、昭和区は八事里山づくりの会に委託していた。しかし、会員の高齢化も進み、その保全活動の存続が大きな課題となっていた。そうした中で、本校生徒が八事里山づくりの会に「八事の森人」という部門を立ち上げ、その保全活動を続けることになった。実際の活動は、月一回の間伐作業を基本とし、枝打ちや枯葉の除去などを行う。その作業に関して、八事里山づくりの会のメンバーや環境カウンセラー、八事興正寺の方などに指導をいただいた。

なごや環境大学との連携では、岐阜県御嵩町の山林での間伐作業を行った。その山林は、愛知県を流れる木曾川の水源であり、八事興正寺公園とは違う水源域での本格的な間伐を体験してほしいというなごや環境大学からのお話をいただいたことで実現した。森林区域では、森の大切さや水源区域の歴史などの講和を受け、その後、ヒノキの間伐を実施した。大きな大木が切り倒された時の音、切り倒された直後の木の匂いなどその場でしか体感できない貴重な体験となった。

間伐作業においては、2つの視点から実践できたことが重要であるとともに、水資源と森との関係性を知るきっかけとなった。本校は「水」をテーマにグローバル型の探究活動を行ってきたが、水がどのように巡っているか、巡るために必要な環境とは何かということに気づけたことが大きい。また、オンライン国際理解研修（カンボジアコース）では、カンボジア湖畔のフィールドワークや植樹などを行うことで国内外での森林に関する考え方を比較検証することもできた。

障がい者スポーツイベントのボランティア活動は、昨年度も実施し、本年度はより運営の部分で関わることになった。このイベントは、名古屋市昭和区内の鶴舞公園で実施され、障がい者サッカーを基本とした障がい者への理解の啓発とスポーツ振興、市民との交流を目的としている。本校生徒は、運営関係者、障がい者の方々、多くの市民との交流を通じて、地域振興のあり方やSDGs昨年度、このイベントにおける本校生徒が作成した動画が昭和区役所等で放映されたこともあり、本年度は正式な依頼として動画撮影をするに至った。

## 八事興正寺公園での森林の伐作業



間伐作業



八事里山作りの会と生徒たち

## 岐阜県御嵩町での森林の間伐作業



間伐作業



講話

## 障がい者スポーツイベントのボランティア活動



動画作成



障がい者の方へのインタビュー

## [E] 地域企業との連携

2020年度から地域企業と協働して商品開発が実践された。その商品開発は、商品自体は企業が主体となり、パッケージやネーミングに関することが生徒との協働の部分であった。2021年度は、そうした経験から企業とともに課題を見つけ、解決するためのア

アイデアを創出し、形にすることが目標となった。開発した商品は、主に2つである。一つは、ペットボトルからできた糸から作られた靴下に独自の染色を行った「サステナブルベトックス」。もう一つが、陶器のおちょこ・ろうそくからできた「サステナブルおちょんドル」である。双方ともにアップサイクル商品である。特に「サステナブルおちょんドル」は岐阜県多治見市の陶磁器産業における社会課題とろうそく業界における社会課題を組み合わせることができた点が高く評価できる。また、作るだけでなく、商品を中心に社会課題に関する啓発活動も実践している。地域企業と協働することは、地域の課題を企業の視点から見ることができる。また、企業と協働しなければ実現できなかったことも多い。企業が持つ力と学校が持つ力は違う。その2つが合わさることで解決するとも多くある。ただ実際は双方が出会い、協働することには大きな壁がある。その壁を壊し、チャレンジできた事例は今後の高校教育への指針となるかもしれない。



開発した商品一覧



サステナブルえびせんべい



サステナブルおちょんドル



岐阜県多治見市の陶器との出会い

#### [F] 実践活動の発表及び啓発活動

生徒の実践活動を学校外で発表する機会を多く設定した。学校外での発表は、その発表を受けるのは、今まで会ったことがない人である。その会ったことがない人に自らの活動や考えをどう伝えるか、相手の思考や立場などをどう理解するか、質疑応答において的確に答えることができるかという、多くの力を組み合わせて実行することが求められる。多



くの力とは何か。例えば、以下の3つが考えられる。

### 1 言語化力

自分の考えたことを言語を用いて発信することができる力。自分とは違う意見に対して、言語活動を通して理解を深めていく力。論理的に自他の意見を文章・発表などで表現することができる力。

### 2 発信力

自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝える力。対話に限らず、コミュニケーションツールを活用する力。

### 3 持続可能な地域・国際社会への取組への行動力

地域・国際社会へ自分の考えを発信することができる力。

これ以外にも、持続可能性／SDGsに関する知識・理解や人権や平和の価値、情報収集・選択・(活用力)などの「地域・技能」。応用力や創造力などの「思考力・判断力・表現力」。課題の自分事化やリーダーシップや責任感、傾聴力、公平性や柔軟性、困難を乗り越える意志、合意形成と協力などの「学びに向かう力 人間性」がある。つまり、学習指導要領における3つの柱となる素養の獲得がこのような外部での発表や啓発活動において短期的に可能であると考えられる。3つの柱以下にあるこのいろいろな素養は、本校と連携しているACCUが発行する「変容を捉え、変容につながる評価のカタチ—SDGs時代を生きる学校教員の知恵—」の中に掲載されている素養である。

オンラインによる交流が多くある中で、対面での交流には多くの素養を獲得する要素が多い。社会状況によってはこうした対面での形を取りにくいことが今後も続く可能性がある。だからこそ、できる限り学校を飛び出し、多くの人に会い、語り合う体験を学校が作り出す必要がある。

以下は、愛知県における大規模なイベント、民間企業が実施するサステナブルイベント、教育委員会が開催するイベント、大学でのイベント、そして、国際的な会議の主催者が開催する他県でのイベントと5つのカテゴリにおける実践活動の発表及び啓発活動事例を紹介する。それぞれで獲得する素養が違う。生徒は、発表の場や出会う人の違い、発表のやり方の違いが成長の違いを生み出す。そうした成果を考えると今後も「違い」を求めてチャレンジし、多くの素養の中からどの素養を獲得したかを検証していくことが教員としては大切である。

---

名 称：SDGs AICHI EXPO 2021

日 時：2021年10月22日～23日

場 所：愛知県国際展示場 Aichi Sky Expo

内 容：「地球・まち・ひとが社会できる社会へ」～多世代パートナーシップでつくる

SDGsあいちをテーマに内閣府等の後援を掲げ、日本最大級のSDGs推進フェアが開かれた。本校では、実践活動の発表やアップサイクル商品の紹介、舞台での活動報告プレゼンテーションを行った。ブースには、愛知県知事である大村秀章氏や脳科学者の茂木健一郎氏含め、多くの方々が生徒の説明に興味深く聞いていた印象である。説明は、中学1年生から高校3年生までの生徒が行い、役割分担を生徒たちが計画しながら実践していた。生徒たちは大きく3つの実践活動を紹介した。

- 1 企業と協働して開発したアップサイクル商品の紹介と販売
- 2 SDGs啓発玩具「Sus-ガチャ」を使用したSDGs市場調査
- 3 多様な実践活動についてパネルを使用した紹介

2日間には、中京テレビやCBCテレビの取材を受けることや会場の優秀ブース選挙において優秀ブースに選出されるなど本校生徒のこれらの活動が多くの方々的心掴んだのだ。また、このイベントでは、多くの企業や自治体との繋がりが改めて創出された。また、この3年間のグローバル型事業における生徒たちの活動について、すでに認知している来場者や過去のイベントで知り合った方や協働活動した方と再会することもあり、生徒たちにとっては自らの活動の積み重ねやつながりの大切さを知るイベントとなった。また、生徒たちにとってSDGsを愛知県から発信すると一大イベントの一助になったことが大きな自信になっている。



SDGs AICHI EXPO 2021 ブースにて紹介



SDGs AICHI EXPO 2021 活動発表

名 称：トナリの学校—アップサイクル教室—

日 時：2021年10月16日～17日

場 所：星が丘テラス（名古屋市千種区）

内 容：アップサイクル商品の発表やワークショップなどが名古屋市星が丘テラスのイベントスペースで行われた。本校生徒は、企業と協働して開発した「サステナブルおちょんドル」を制作することができるワークショップを行った。



アップサイクルイベントにて紹介

名 称：2021年度愛知県ユネスコスクール交流会

日 時：2021年10月16日

場 所：ウィルあいち（名古屋市東区）

内 容：愛知県教育委員会が主催した交流会にて活動報告及びワークショップを行った。愛知県内の小学校・中学校・高等学校4校の生徒がそれぞれの学習レベルにおける活動発表及び質疑応答をすることで違う視点や考えを得るきっかけとなった。また、お笑いジャーナリストであるたかまつな氏からコミュニケーション術を笑いと共に学び、対話は「楽しみ」が必要であることを学んだ。



ユネスコスクール交流会にて活動発表

---

名 称：名古屋商科大学三ヶ峯祭

日 時：2021年10月16日

場 所：名古屋商科大学日進キャンパス（愛知県日進市）

内 容：大学との連携を考え、名古屋商科大学で毎年実施している学校祭「三ヶ峯祭」にて、スペースを借りて、活動発表とワークショップを実践した。大学生に対して、高校生が取組がどのように評価されるかを考えるきっかけとなった。



---

名 称：サステナブル・ブランド国際会議（岡山大会）

日 時：2021年11月6日

場 所：岡山大学（岡山県岡山市）

内 容：株式会社日本旅行、国立大学法人岡山大学、NPO法人UMINARI、株式会社中国銀行、株式会社トンボ、岡山トヨタ自動車株式会社、両備ホールディングス株式会社が協働し、本校を含めた複数の高校生と活動発表やテーマを設けたグループ学習とプレゼンテーションを行った。中国・四国地方の高校生と交流することができ、地域性の違いや学校文化の違いを知るきっかけとなった。



SB国際会議（岡山）にて活動発表①



SB国際会議（岡山）にて活動発表②

[G] English Zone —留学生との交流—

日時・場所

[1] —開催日程—

12月1日、12月8日、12月15日、12月23日、1月12日  
1月19日、1月28日、2月9日、2月16日、2月22日

—開催時間—

15:45～16:45（12月23日のみ11:00～12:00）

—場所—

名古屋国際中学校・高等学校

[2] 参加生徒数

名古屋国際中学校1年生 10名、2年生 7名、3年生 1名  
名古屋国際高等学校1年生 1名

[3] 参加留学生数

名古屋商科大学 留学生 6名

（出身国：インド、インドネシア、スリランカ、フィリピン、リビア）

[4] 内容

English Zoneとは、本校生徒が、系列大学である名古屋商科大学の留学生と様々なコンテンツを通じて英語でコミュニケーションを楽しむことを目的として2019年度に開講した講座である。2019年度は本校を会場として対面式で行うことができたが、2020年度はCOVID-19の影響のためオンライン形式で開講することとなった。今年度も、COVID-19は教育現場に大きな影響を及ぼすこととなったが、感染状況の落ち着いた年末から、名古屋商科大学の協力を得て対面で開催することができるようになった。

## [5] 生徒の変容

11月に参加希望生徒を募ったところ、中学生を中心に英語力の高い生徒が数多く集まった。全員がマスクを着用し、距離をとって向き合う必要があったため、最初は互いに様子を見ながらスタートすることとなった。

しかし、参加生徒の英語力の高さに加え、日本語堪能な留学生の存在により、ほどなくして活発な対話が交わされるようになった。

留学生たちはまず、「今後のEnglish Zoneでやってみたいこと」を参加生徒から聞き出し、2回目以降は、その要望に応える形で様々なコンテンツを用意した。留学生たちの狙い通り、最初は緊張気味だった参加生徒たちは、様々なゲームを通じて留学生たちに心を開くようになった。

COVID-19の影響により、料理等の活動は控えざるを得なかったが、一つのテーマで価値観を共有することで、留学生と本校生徒が互いを尊重しあい、異文化間での心の交流ができたようである。



## 【9】第2回未来共生ウォーターコンソーシアム報告

名称：持続可能な未来への対話セッション 2022

日時：2022年2月12日（土）13：00～15：00

形式：対面及びオンラインによる開催

内容：（1）基調講演 柴山政明氏（愛知県経済産業局スタートアップ推進監）

テーマ：「AICHI STARTUP ～愛知から、未来を創る。～」

内 容：1 自己紹介

2 愛知県の概要

愛知県は、リニア中央新幹線が開業予定であり、首都圏と中京圏が一体化した巨大な都市圏（リニア大交流圏）が誕生する。

3 SDGsと愛知県の産業・経済

愛知県の県内総生産は東京に次ぐ全国2位であり、製造品出荷額は43年連続全国1位、11業種で全国シェアナンバーワンなど産業・経済分野において厚い産業集積地域である。ただし、課題として国際社会においてはその競争力が低迷している。今後も持続的に経済成長していくためにはイノベーションを起こしていく／ピンチをチャンスに捉えることが需要である。

4 スタートアップに関する説明

2018年10月Aichi-Startup戦略を策定し、新しいビジネスや世の中に新しい価値を生み出す、イノベーションの主体であるスタートアップ支援の取組を推進する。

5 愛知県のスタートアップ支援関連の主な取組

・STATION Ai

・PRE-STATION Ai

・海外各国の支援機関との連携

・学生も参加可能なプログラム

経済面だけでなく、社会面、環境面でのサステナビリティに貢献しているスタートアップの例をいくつか紹介する。

（2）対話セッション

A 学校と世界

- ①カンボジアとの交流—オンライン型国際理解研修(カンボジアコース)の実践—  
「わらしべ長者」という手法を用い、カンボジアにおける地域ごとの「もの」に対する価値観の違いに関するプロジェクト学習の実践報告を行う。
- ②フィリピンとの交流—児童養護施設の子どもの学びを考える—  
児童養護施設の子どもたちが使用するための教材を提案する学習における実践報告を行う。

## B 学校と地域社会

- ①若者が考える未来の共生社会—高校3年生が考える未来—  
学校設定科目SIA特論Ⅱにおける「未来をつくる」というテーマの授業容を踏まえた、3年間の発表者の歩みを語る。
- ②企業協働事業の成果—SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!の実践—  
地元企業と協働開発した商品に関する実践活動を報告する。

## C 学校と学校

- ①国内の学校との対話—名古屋国際高等学校×名古屋市立名東高等学校×奈良県立国際高等学校の対話から見えた「国際性」とは—  
事前に収録した3つの学校による対話に関するまとめを発表する。収録は、約1時間30分間オンラインにて開催された。対話は、アイスブレイクから始まり、本対話セッションに向けた提言を話し合った。
- ②モロッコの学校との交流—「世界水の日」に向けたアクション—  
国内の学校とモロッコの学校との交流を含めた「世界水の日」に向けた実践活動を報告する。


### (3) 講評

北村友人 先生（東京大学大学院教育学研究科/東京大学未来ビジョン研究センター 教授）

伊藤 博 先生（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科 教授）

亀倉正彦 先生（名古屋商科大学 経営学部 教授）

持続可能な未来への対話セッション 2022 主催 未来共生ウォーカーコンソーシアム  
後援 日産自動車

13:00 開会	
13:10 基調講演 柴山 政明 氏 -愛知県経済産業局スタートアップ推進監-	
14:00 対話セッション	
A 学校と世界 ① カンボジアとの交流 -オンライン国際理解研修(カンボジアコース)の実践 ② アフリピンとの交流 -児童養護施設の子どもの学びを考える-	
B 学校と地域社会 ① 若者が考える未来の共生社会 -高校3年生が考える未来- ② 企業協働事業の成果 -SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!の実践-	
C 学校と学校 ① 国内の学校との対話 -名古屋国際高等学校×名古屋市立名東高等学校×奈良県立国際高等学校の対話から見えた「国際性」とは-	
② モロッコの学校との交流 -「世界水の日」に向けたアクション-	
14:45 講評	
15:00 閉会	

オンラインメイン画面

開催案内：

# 持続可能な未来への対話セッション 2022

主催 未来共生ウォーターコンソーシアム 後援 日進市

文部科学省は、市町村・高等教育機関・産業界等とのコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を実施しています。名古屋国際中学校・高等学校は、「グローバル型指定校」(全国で24校)として、地域との協働による高等学校教育改革を推進しています。



## 2022.2.12 Sat

[時間] 13:00～15:00 (12:45開場・接続開始)

[場所] 名古屋国際中学校・高等学校  
(愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16)

※当日は対面とオンラインZoom配信の同時開催

[テーマ] ニューノーマル時代における  
中等教育のあり方

[申込] 右記QRコードからご予約ください。



[スケジュール]

13:00 開会 (12:45開場・接続開始)

13:10 基調講演

テーマ：(仮)愛知のスタートアップ支援  
～愛知から、未来を創る。～  
愛知県経済産業局 スタートアップ推進監  
柴山 政明氏

14:00 対話セッション

- A 学校と世界 ①カンボジアとの交流  
②フィリピンとの交流
- B 学校と地域社会 ①企業協働事業の成果  
②若者が考える未来の共生社会
- C 学校と学校 ①モロッコの学校との交流  
②国内の学校との対話

14:45 講評

15:00 閉会



地方創生SDGs  
官民連携  
プラットフォーム



国際バカロレア・ディプロマプログラム認定校



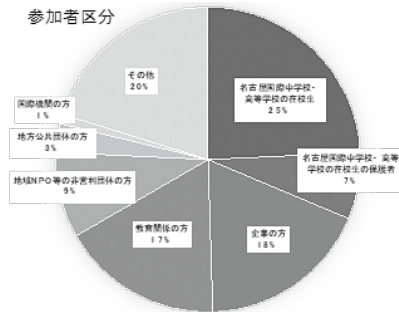
名古屋商科大学  
名古屋国際中学校  
高等學校  
NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

【お問合せはコンソーシアム事務局まで】 名古屋国際中学校・高等学校 consortium@nihs.ed.jp



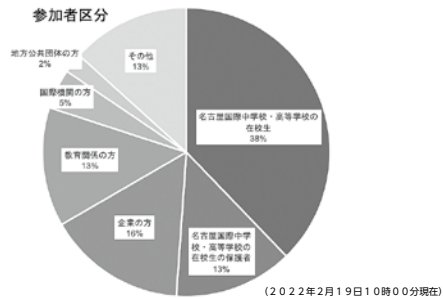
### 【2021年度対話セッション参加区分】

参加者：86名（対面：34名、オンライン：52名）



### 【2021年度の対話セッション参加区分】

参加者：57名（オンラインのみ）



### （参加者区分に関する分析）

全体の人数は、前年度比で大きく増加した。この大きな要因は、本校の活動において外部との連携先・連携回数・連携分野・他のネットワークへの参画があげられる。本校等の繋がりが増え、協働で活動することにより、連携先にとっては生徒がどのように実践活動を考え、どのように成長をしたかが興味の対象となる。また、高校生と繋がることへの優位性の確認にもなると考える。

また、参加者区分においても大きな変化が見られる。前年度の参加者は本校生徒や保護者が半数を占めていた割合だったが、本年度は、32%が本校生徒・保護者になっている。その割合の変化に関して、教育関係の方が4%の増加が見られる。この点は、事業連携協定を結んだ学校や本校と交流した他校からの参加によるものである。また、地域NPO等の非営利団体の方の参加が増えた点は、地域とのつながりが大幅に増加したことによる。



愛知県経済産業局 スタートアップ推進課

スライド：基調講演テーマ



講演の様子



対話セッション全体の様子



対話セッションの様子①



対話セッションの様子②



対話セッションの様子③



講評の様子



対話セッション終了後

**【アンケート結果】**

## 基調講演の内容

大変有意義であった	17
有意義であった	8
やや有意義であった	5
やや有意義ではなかった	1
有意義ではなかった	2

**【参加者の感想】**

- ・先々への行政の動き考え等が分かり大変有意義な内容でした。
- ・今まで社会経済のことについてあまり興味が無かったが、今回の講演でどれほど大切なのか知ることができました。
- ・愛知県の将来展望を知ることが出来胸が高鳴りました。

**【アンケート結果】**

## 満足度（カンボジアとの交流）

大変有意義であった	5
有意義であった	7
やや有意義であった	3
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	0

**【参加者の感想】**

- ・発表内容がネットなどで得ることでなく生徒さん自身が活動した発表を聴くことができたので今の高校生が興味あることがわかった。
- ・活動を通じて感じた現地の方の様子や国民性などが主観的でもいいのでお伺いできるとより興味が感じられるかなと思いました。

**【アンケート結果】**

## 満足度（フィリピンとの交流）

大変有意義であった	13
有意義であった	4
やや有意義であった	0
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	1

**【参加者の感想】**

- ・高校生の工夫、アイデア、非常に面白かったです。コロナ禍で現地には行けない中でも、最大限にやれることにとりくみ、すごいなと思いました。
- ・生徒がなぜその教材開発に着目したのか、具体的な取り組み、今後の課題などが明確に示されていた。

**【アンケート結果】**

## 満足度（企業協働事業の成果）

大変有意義であった	11
有意義であった	8
やや有意義であった	0
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	0

**【参加者の感想】**

- ・企業との協働で新品を提案した成果発表は興味ありました。他の企業とも協働して新たな提案に期待したいです。
- ・もっと販路を広げアピールする場があれば、素晴らしい活動を多くの方に知っていただくことができると思います。発想力・行動力にとっても感心した。

**【アンケート結果】**

満足度（若者が考える未来の共生社会）

大変有意義であった	10
有意義であった	2
やや有意義であった	1
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	1

**【参加者の感想】**

・発表生徒が語っていた、一つの気づきとして、世界を変えるには、ローカルから変えていくことが大切という視点を得られたことは、素晴らしいと感じました。

・6年間の歩みの着地点と次の目標を分かりやすくまとめてあり、素晴らしいと思いました。

**【アンケート結果】**

満足度（モロッコの学校との交流）

大変有意義であった	10
有意義であった	8
やや有意義であった	0
やや有意義ではなかった	1
有意義ではなかった	0

**【参加者の感想】**

・生徒たちが毎回の学びや交流の機会を活かし、国際交流、異文化理解の視点だけでなく、水を守るための具体的なアクションと結びつけ、しかも、世界水の日に向けて、楽しい要素を取り入れながら「にぶんのいち」の活動をスタートさせたことに深い感銘を受けました。

**【アンケート結果】**

満足度（国内の学校との交流）

大変有意義であった	7
有意義であった	4
やや有意義であった	3
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	0

**【参加者の感想】**

・複数の学校との対話はお互いの考えを話し合ういい経験だと思います。

・複数のテーマでも対話して地域による考え、生活の違いを知りそこから新たな目的が見つかるのではないのでしょうか。

・積極的に対話されていていい交流に感じました。

**【アンケート結果】**

全体の感想

大変有意義であった	21
有意義であった	12
やや有意義であった	0
やや有意義ではなかった	0
有意義ではなかった	0

## 【参加者の感想】

・ローカルとグローバルの2つを一緒に行うことは途方もないように思えますが、人と人のつながりを大事にして、両方の関連性を見つけて活動を行っていることに感銘を受けました。SDGsについて広く知られるようにはなってきましたが、まだ課題を自分ごととして捉えるところまでは広まっていないように感じます。

・地球規模の課題を自分の未来の課題として考えるきっかけに地域の課題をまずは解決しようとするのはとても大切なことだと思うので、このような考え方を教員として生徒に広める活動を私もしていきたいと思いました。

・コロナ禍で行動制限や制約があり、疲弊してしまうのでは無いかと思っていましたが、名古屋国際の皆さんは歩みを止めない柔軟な発想や行動力は、驚くことばかりで、新聞や広報誌などに皆さんの活躍の記事を見つけるのも楽しみでした。

・プレゼンが上手ですので、YouTubeなどを活用するなどして活動をどんどん広げていって頂きたいです。

・便利になればなるほど、発達すればするほど、機械化が進めば進むほど「人と人のつながり」が希薄になるのではと懸念しています。リアルの対面でないと伝わらないこともたくさんあると思います。若者（中高生）の事件が新聞に載るのも危惧しています。

だからこそ、人と人のつながり（パートナーシップ?）も忘れないように大切にしていればと思います。

## 【振り返り】

昨年度は、オンラインによる対話セッションであったが、本年度は対面とオンラインを併用して実施した。機器的な面での改善点が多く発見できたことが第一の収穫であった。今後もニューノーマル時代における新しいセッションの形を追求していきたい。また、基調講演では、愛知県のスタートアップに関することをテーマにし、産業や経済面に視点をシフトした。学校教育において環境や人権問題などの視点多い中、新しい視点への挑戦も模索した形となった。MDGs（ミレニアム開発目標）からSDGsへの変化は、まさに「経済」という視点を追加している。そして、学校教育現場においてもそうした「経済」的な視点の必要性が考えられる。それは、生徒の実践活動においても変化が見られている。本セッションの中でも、社会課題を解決する手法の中で「経済」を意識したものが多い。これは、生徒自身の中で自然とそうした視点が必要と気づいたのではないかな。また、セッション参加者においても、企業と学校との連携の可能性を期待する方も多かった。セッションに関しては、今後も持続的に開催をしていき、本校の実践活動を広く啓発していきたい。

## 【10】第6回運営指導委員会

一、日時 2022年3月3日（木）

13時00分～14時30分

一、方法 オンライン・対面同時会議

一、場所 対面（名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室）

オンライン（オンラインシステム：Zoom）

一、出席者 <対面出席>

亀倉正彦 先生（管理機関）、伊藤 博 先生（運営指導委員）

小林 格、栗本貴行、片山寿弘、鈴木 悟、大西直子、黒宮祥男

村山瑛紀、Steven McLellan、鈴木真以

<オンライン出席>

北村友人 先生（運営指導委員）、岡田 あつみ 氏（地域協働学習実施指導員）

一、欠席者 中野 憲 氏（海外交流アドバイザー）

一、議案

（報告事項）

（一）2021年度実践活動について（A）主な活動（B）全国高校生フォーラム

（C）全国サミット（D）持続可能な未来への対話セッション2022

未来共生ウォーターコンソーシアム

（二）3年間を通じての生徒の変化

（三）名古屋国際が今後目指す教育プロジェクト

一、議事の経過および結果

13時00分、小林 格校長が議長となり開会する旨を宣言した。議長より本会はプロジェクトの3年間の集大成のまとめとなると説明があり、その後議案の報告に入った。報告および審議の結果は次のとおりである。

一、報告事項

（一）2021年度実践活動について

黒宮祥男国際教育推進主任より本事業3年目となる実践活動について報告した。

A オンライン国際理解研修ではカンボジアに続き、オーストラリアを追加した。今年度はCOVID-19の関係で、現地の内容の変更が続いたものの、現地のスタッフと引率教員で協力して実施した。海外交流は、モロッコやフィリピンという学校を軸とした交流を行った。受賞・報道実績としてはビジネスコンテスト受賞、愛知環境賞優秀賞、SDGsアイデアコンテスト優勝を獲得し、新聞やラジオ、テレビ等のマスメディアにも出演した。また名古屋市立名東高等学校、奈良県立国際高等学校、高知県立西高等学校の3校とニューノーマル時代における国際教育の推進に向けた連

携を行い、オンラインによる生徒間の交流から活動をスタートした。さらに愛知県SDGs登録、名古屋市SDGs推進プラットフォームという加盟活動も行った。

- B 全国高校生フォーラムでは全国約150校が参加し、審査員コメントでは本校の企業との協働による取り組みがダイナミックな展開とし、学校全体として草の根的な取り組みを期待された。
- C 全国サミットでは全国52校が参加し、令和元年度指定の推進校・指定校の研究発表が行われた。「ニューノーマルに対する新しい学びの構築」としてカンボジアの内容を中心に説明した。オンラインで海外の研修は全国でもほぼ皆無であり、学校・企業連携のやり方の質問が多かった。本校の強みとなった。
- D 2月12日に86名参加し、昨年度よりも増加した。  
満足度で、「大変有意義であった」よりも「有意義であった」の方が多かったので、改善の余地があると考ええる。これまでの活動がビジネスに繋がるかが課題となっており、直接会って話すことや企業との関わりの大切さを認識した。

## (二) 3年間を通じての生徒の変化

議長により本校が取り組んだ実践活動についてのアドバイスをいただいた。

[北村友人教授]

生徒達が自ら考え動き、アイデア先行だったところから、3年間で学び合いに変わってきた。より多くの生徒達へ影響を与え、学びの姿勢が広がっている。また、国際的なネットワークの繋がりが素晴らしい。ユネスコスクールの言葉は日本だけの言葉で、このネットワークを大切に、他の学校へも波及効果を狙いたい。学術的な学びもさらに期待できる。SDGsを研究としてもう一步深めていく。組織で教育していくとおもしろい。

[岡田 あつみ氏]

皆さん教員の方々はずばらしく、名古屋国際の活動がみんなに知られてきた。新しい名古屋国際の生徒も今回の内容を引き継いでいけると良い。

[伊藤 博教授]

コロナ禍で、オンラインの活動は素晴らしいものであった。WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアムの構築支援事業(以下、「WWL」とする。)への申請を今度していくことも含め、チャレンジすることが脱帽である。SDGsに関して、名古屋国際はエコシステムに近い気がする。名古屋国際には交流する場があり、素晴らしい。Sustainable!の石けんは様々な改善余地があるが、生徒達の発表には感動した。

## (二) 3年間を通じての生徒の変化

[亀倉正彦教授]

生徒の成長として1年目は生徒達が緊張の中、精一杯発表していた。2年目は、水や環境について学習を深めたとする発表があった。3年目は、カンボジアやモロッコで、生徒一人一人が強く意見をもっていた。

「水と川」をテーマに3年目では少しトーンダウンした部分がある気がした。社会課題(水



や環境保全)への着眼点は100点以上であるが、各科目に繋がることを期待する。理科や社会の科目内に、地域の川や歴史を理解する項目を少しだけ取り扱ってみることを提案する。全校生徒が一科目に拘らず各教科で、社会課題を掲げることで全学生が学びを深めると良い。

### (三) 名古屋国際が今後目指す教育プロジェクトについて

議長より本校がWWLに申請したことを報告した。イノベティブなグローバル人材を目標とし、Meta-Schoolの構築を行い、事業拠点校として取り組む予定である。

[栗本貴行担当部長]

WWLの取り組みで予想される教育の完成形は、本学の中高大の一貫教育カリキュラムである。私たちが今抱えている課題は、スーパーグローバルハイスクール事業の取り組みから始まった全ての推進事業におけるカリキュラム開発と密接に繋がっている。今回は地域協働推進事業グローバル型のカリキュラムを終えた。高校から名古屋商科大学への接続を改善し、教育的なつながりを理想化したものがWWLに申請したプロジェクトであり、それを3年以内に完成させる。2022年4月から高校3年生を対象とする(名古屋商科大学への進学を目的とする)内部進学クラスが始まるが、徐々に高校2年生へとクラスを展開していく。運営指導員の北村先生がさきほど企業との連携について評価されたが、本校は「スタートアップ」に注目したテーマを厳選した。そこで、本校は愛知県庁のスタートアップ推進課と連携しながら新しいビジネスモデルの創出に関わっていく。本校の現在の生徒はZ世代と言われ、柔軟なアイデアを持っており、スタートアップとコラボレートし、地域が抱える社会的な課題を解決するビジネスアイデアを創出する仕組みを作りたい。この取り組みこそが名古屋商科大学へ繋げる第一歩となる。

[伊藤 博教授]

対面とオンラインのどちらか一方のみでなく対面とオンラインでのサンドウィッチにより効果的な学びが可能となり、波及効果が生まれる。

[亀倉正彦教授]

共生協働はコミュニケーションが鍵となる。生徒のやる気を引き出し、大学、県、国と連携することが大切。コミュニケーションは、対面とオンラインとの境界線が重要。調査サンプリングがポイントになるので適切に進めて欲しい。名古屋国際オリジナルで良いと思う。リスクマネジメントとして未来共生で再生エネルギーに期待する。系列校である名古屋商科大学で、インテンシブ教育を行い、学内で学ぶだけでなく、学外でフィールドワークが有効である。

【11】 アンケート結果・分析・改善

本校では地域協働事業を進めるにあたり、「高校魅力化評価システム\_v2.0」(三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社)で取り上げている生徒用質問項目について、学内で意識調査を継続している。以下で示す数値は、「あてはまらない=1」～「あてはまる=4」及び「ほとんどしない=1」～「よくする=4」とした回答の平均値である。

生徒アンケート結果①：

2021年度において、地域協働事業に関わる教育活動への参加項目数による意識比較

(a) アンケート基礎情報

[地域協働事業に関わる教育活動の定義]

2021年度本校で実践した以下の11項目を、地域協働事業に関わる教育活動として定義した。

(授業) SIA特論 I

SIA特論 II

SIA特論 II (演習)

SIA特論 II (高大連携)

(課外活動) オンライン型国際理解研修カンボジアコース

オンライン型国際理解研修オーストラリアコース

SDGs未来倶楽部Sus-Teen!

天白川に関する活動 [ゼミ・フィールドワーク]

モロッコ国際交流

認定NPO法人アイキャン TURAY PROJECT

持続可能な未来への対話セッション2022

[回答者について]

名古屋国際高等学校2・3年生(有効回答数129)

うち、14名が国際バカロレア(IB)履修生であり、地域協働事業の対象外である。

[活動項目数について]

上記で定義した地域協働事業に関わる教育活動に対して、1人の生徒が授業履修した、または、当該の課外活動に参加した項目の数を指す。(例：SIA特論Iを履修し、モロッコ国際交流に参加した生徒は活動項目数2として扱う)

(b) アンケート結果(抜粋)

1. 生徒の学習活動の機会

活動項目数	設 問			
	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	活動、学習内容について生徒同士で話し合う	活動、学習内容について大人(教員や地域の大人)と話し合う	地域の課題の解決方法について考える
4項目以上	3.08	3.25	3.25	3.17
2項目以下	2.23	2.99	2.51	2.36
全体	2.29	3.02	2.60	2.47
IB生徒(対象外)	2.57	3.86	3.14	2.43

## 2. 地域の学習環境

活動項目数	設 問			
	挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある
4項目以上	3.50	3.25	3.50	3.08
2項目以下	3.00	2.48	2.74	2.64
全体	3.05	2.55	2.78	2.67
IB生徒（対象外）	3.64	2.86	3.21	2.93

## 3. 生徒の自己能力認識と行動—主体性・協調性

活動項目数	設 問			
	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	私は、自分自身に満足している	自分で計画を立てて活動することができる
4項目以上	3.58	3.17	2.42	2.83
2項目以下	3.11	2.75	2.52	2.80
全体	3.20	2.77	2.50	2.83
IB生徒（対象外）	3.57	3.29	2.14	3.21

## 4. 生徒の自己能力認識と行動—探究性・社会性

活動項目数	設 問			
	将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	学校で学習することで、自分ができることややりたいことが増えている	地域社会などでボランティア活動に参加した
4項目以上	3.25	3.33	3.42	3.08
2項目以下	2.79	3.15	2.94	2.30
全体	2.86	3.15	2.95	2.40
IB生徒（対象外）	3.07	3.79	3.43	3.14

### 生徒アンケート結果から見えてくること

[地域協働事業対象生徒内における比較考察]

活動項目数が4つ以上の主体的に地域協働事業に参画している生徒 [A] と、活動項目数が2つ以下の生徒 [B] における比較では、ほとんどの設問で、活動項目数が多い生徒ほどポジティブな回答が得られている。特徴をまとめると以下の3つの視点で捉えることができる。

#### ① 正の開き大きい設問

	設 問	[A]—[B] の差
1	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	0.85
2	地域の課題の解決方法について考える	0.81
3	地域社会などでボランティア活動に参加した	0.78
4	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	0.77

## ②あまり差が生じなかった設問

	設 問	[A]—[B] の差
1	自分で計画を立てて活動することができる	0.03
2	複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	0.11
3	将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	0.18
4	家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	0.19

## ③負の開きが生じた設問

	設 問	[A]—[B] の差
1	私は、自分自身に満足している	-0.10

地域協働事業の魅力である、学外連携の成果が大きく出た数値と言える。担当教員として喜ばしいことは、高等学校における学びが、実際に地域社会でのボランティア活動という形で生徒個人がアクションにまで繋げることができている点である。本校の学校設定科目SIA特論はSustainability in Actionの略であり、「高校生が探究的な学びを通じて社会課題を深く理解し、高校生にできる行動に結びつける」という科目設定時の意図を反映した形となった。

一方で、「あまり差が生じなかった設問」は生徒自身の学習に向かう態度に関するものである。アクティブ・ラーニングや学外連携によるフィールドワークはいわゆる「理論と実践」における実践に根ざしたものであり、地域協働事業に主体的に参加する生徒ほどこの経験値が上がっていることは確かである。担当教員の課題として、実践に先立つ研究のステップや、理論的に物事を考える学習の頻度を向上させることが必要であると感ずる。また、自分自身への満足感については、昨年度の生徒意識調査においても同様の結果が見られた。これは、探究的な学びを深めることで、目指すべき自分像を高く設定する生徒が多くなるのではないかと推察している。

### [国際バカロレア履修生との比較考察]

次に、活動項目数が4つ以上の主体的に地域協働事業に参画している生徒[A]と、国際バカロレア履修生[B]を比較した。国際バカロレア履修生は地域協働事業の対象外であるが、本校が今後目指す新たな国際教育の取り組みに向けた興味深い結果が見て取れた。

## ①正の開きが大きい設問

	設 問	[A]—[B] の差
1	地域の課題の解決方法について考える	0.74
2	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	0.51
3	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	0.39

## ②負の開きが大きい設問

	設 問	[A]—[B] の差
1	活動、学習内容について生徒同士で話し合う	-0.61
2	将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	-0.46
3	自分で計画を立てて活動することができる	-0.38

国際バカロレアでは、ATL (Approaches to learning : 学習のアプローチ) と呼ばれる、各教科で学習目標に到達するためのツールが用いられる。これは「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」の5つであり、生徒は「現在自分に身につけているスキルは何か」「どのスキルをさらに向上させられるか」「これから身につけられるスキルは何か」を意識して学習に臨むことが求められる。また、各授業での課題、論文作成、CAS (Creativity、Activity、Services) と呼ばれる自主活動など、様々な活動を計画的にこなすことが求められる。国際バカロレア教育が持つこれらの要素は、地域協働事業において、今後生徒が身につけるべき素養と一致していると言える。

### 名古屋国際高等学校における今後の課題

地域協働事業指定以前の本校の教育課程と比較すると、生徒が学外で学習する機会や、COVID-19の影響下であっても、オンラインを活用することで積極的な学外連携を果たせたという点で、本事業の成果は大きかったと捉えることができる。生徒が学習に臨む態度や、計画的に物事を探究するための自立性など、課題が見つかったことも重要である。この点については、地域協働事業で身につけた学外連携や探究学習のノウハウと国際バカロレアのATLスキルを融合させる手法の構築に向けてすでに国際教育推進部で動き出している。地域協働事業指定終了後であっても本校の国際教育がさらに前進していくように、引き続き努力していきたい。

国際教育推進副主任  
内藤圭祐

## 【12】講評

### 《運営指導委員》

東京大学大学院教育学研究科・東京大学未来ビジョン研究センター

教授 北村友人 先生

名古屋国際中学校・高等学校における本事業への取り組みに、運営指導員という立場から事業に関する所感を述べたい。

第一に、グローバル人材を育てるという目的に対して、本事業は国内外における多様なプログラムを組み合わせるなかで生徒たちの成長を支援しており、優れた成果を上げていると評価したい。国内では、地元の団体である「天白川で楽しみ隊」との連携をはじめ、ローカルな視点からの取り組みを行い、そうした経験を活かしつつ、国外では、学校等の協働でさまざまな学びの機会を創出することによって、まさにグローバルな視点を生徒たちが獲得することに成功している。このことは、2022年2月12日に開催された「未来共生ウォーターコンソーシアム主催による持続可能な未来への対話セッション2022」における、生徒たちの研究発表や質疑応答を通して、確認することができた。多くの生徒が、自分たちで設定した課題に対して、国内外の多様なパートナーとの連携を通して研究や実践を深めている姿が、非常に印象的であった。

第二に、「持続可能な開発目標（SDGs）」において重要とされている「自分ごと」化が、多くの生徒のなかで意識化されていることを評価したい。この「自分ごと」化とは、国内外にある社会課題を自分自身に関係する問題として認識することによって、課題に関する理解を深め、その解決へ向けて主体的に取り組んで行く姿勢を育むことを意味している。上記の点とも関連するが、グローバルな視点を身につけるなかで、国内外に起きている社会問題を「他人ごと」とせず、自分たちにまさに関わる問題であると認識している様子が、生徒たちの研究や実践から見て取ることができた。たとえば、天白川の水の問題に関する探究的な学びや、自分たちなりの工夫を重ねた商品開発、さらには、カンボジアやフィリピンといった途上国の若者たちとの交流などを通して、確実に「自分ごと」化が生徒たちのなかで進んでいることがわかる。

こうした生徒たちの成長は、本事業で設定した5つの能力（コミュニケーション能力、共生協働能力、自己管理能力、情報活用能力、科学的思考能力）が、着実に育まれていることを意味する。何よりも大切なことは、国内外の社会課題と向き合い、問題の原因等を理解し、解決の方策を探ろうという姿勢が根底にある、ということである。そうした姿勢がなければ、これら5つの能力を適切に組み合わせながら活用していくことは叶わない。したがって、コンソーシアムに参加する多様なパートナーたちと連携しながら、多くの生徒たちが「グローバルな視点」を獲得し、国内外の社会課題を「自分ごと」として捉えているからこそ、本事業で重視している5つの能力が十分に発揮することができていることを高く評価しつつ、この所感の締め括りとしたい。

---

## 《運営指導委員》

名古屋商科大学大学院マネジメント研究科 教授 伊藤 博 先生

2019年度に選定された地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）が終わろうとしている。水や環境といったテーマにとどまらず、食料問題や多様なバックグラウンドを持つ人たちとの共生、そしてグローバル・イノベティブ人材の育成など、持続可能な開発（SDGs：Sustainable Development Goals）の達成を目指す名古屋国際中学校・高等学校にふさわしい取り組みが行われ、愛知環境賞優秀賞やSDGsアイデアコンテスト優秀賞など、多くの賞を受賞するなど成果を出してきた。

事業期間の多くはコロナ禍であり、2020年度春に開催された運営指導委員会で「コロナ禍でどのような活動が可能か」という話し合いを行ったのを覚えている。2021年2月に行われた「持続可能な未来への対話セッション2021」はオンラインで開催されたが、2022年に行われた「持続可能な未来への対話セッション2021」は対面とオンラインのブレンド型で開催され、ニューノーマル時代を象徴しているようであった。

コロナ禍において実際にフィールドへ行くのは難しく、できることは限られていたはずだったが、ICTを活用して活動は続けられていった。カンボジア、フィリピン、モロッコなど、海外の学校ともオンラインを通じて交流が図られた。生徒たちの発表では現地の様子（例えばカンボジアの水の汚染など）について伝えるだけでなく、独自の視点や論理が垣間見られた（水が汚染されているため、そこで獲れる魚が臭く、その匂いを消すために大量の香辛料や濃い味付けが必要となり、ご飯の消費が増えるため肥満や糖尿病も多い、など）。

またSDGs推進を目指すSus-Teenの活動においては生徒の新しい発想を実際に形にするという試みが行われてきた。例えば、楽しく手洗いを行えるようにするためのキャラクター入りのオリジナル石鹸や破棄されていた甘エビの部位とうどんの端材を利用したサステイナブルせんべいの開発・商品化などである。また、単に生徒が自分のアイデアを形にするだけでなく（それだけでもすごいことなのだが）、課題についても認識している点に驚いた。例えばこのオリジナル石鹸に関しても、生徒からは「現時点では環境に優しくない原料も含んでいるので、今後はエコな材料だけで作れるように頑張りたい」といったコメントが聞かれた。このようなSDGs達成に対する高い意識とクリティカルシンキング能力は地域と協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）をはじめとする名古屋国際中学校・高等学校が採択されてきたイニシアティブなどにより培われてきたものであろう。

名古屋国際高等学校は多くのイニシアティブに認定されており、現在も文部科学省の

WWL (World Wide Learning) に申請を行っている。グローバル・イノベティブ人材の育成に向け、新たな挑戦を続ける名古屋国際中学校・高等学校をどのように表現すれば良いだろうか？新しい事業を生み出す仕組みのことをビジネス用語でエコシステムと呼ぶ。カリフォルニア州にあるシリコンバレーなどは企業エコシステムが構築されたものである。これに通じるものが名古屋国際中学校・高等学校にもあると考える。その一助として地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）などのイニシアティブが機能している。過去の実績にとらわれることなく、常に新たな高みを目指す名古屋国際中学校・高等学校は今後も歩みを止めることはないだろう。

---

### 《地域協働学習指導員》

天白川で楽しみ隊 代表 岡田 あつみ 氏

今年度はグループ揃ってのフィールド活動が制限されましたが、個別に各自調査に出かけ天白川を歩き、地域の人に会い、インタビューをして貴重な体験を得たことと思う。何よりも行動力で課題解決へ実践する力は輝かしい成果があらわれている。

店頭に並ぶサステナブルえびせんべいを手にして誇らしい気持ちになった。おちょんどの記事を読んで、見たこともないであろうおちょこを、キャンドルに再生する発想に未来は明るいと思った。

成果発表会で紹介された数々の受賞は、本当に素晴らしく、次に続く生徒の目標になり、繋がることであろう。

また、コロナ禍で自由に行動できず、会うこともままならない中でも、オンラインで海外や国内の高校生と積極的に交流し、リーダーとしての役割にも期待できる。

さて、天白川は愛知県の流域環境整備で堤防の木が伐採され、川は浚渫工事が行われ様子が変わった事と、天白川で楽しみ隊の活動も、縮小・自粛・中止も余儀なくされた。活動を再開した7月水生生物調査で外来種のシスクミリンゴガイ（別名ジャンボタニシ）の個体2個を参加の中学生が見つけ「上流域にこれがいることはショック！天白川をジャンボタニシから守ろう！」と声をあげ、その後周辺を調査したところ、田んぼに植えられたイネ科の植物（マコモ）に毒々しいピンク色の塊になった卵が、恐ろしくなるほど見つかった。天白川流域への影響を考えると源流域の課題と受け止めている。他に、水質調査ではアンモニアの数値が若干高く（悪く）なっている事や、ゴミの量は当初より減っているが生活雑排水の流入を抑えることが肝要で、下水を考える事も源流域の課題である。水生生物は多種類、サギやカワセミなどの鳥類も確認できるこの水辺環境を次世代に残したい。

名古屋国際中学校・高等学校の地域との協働に天白川水系からスタートして調査、準備を重ね、若い感性と柔軟な考え方で多角的に実践でき、地域に足跡を残せたと思う。卒業生は培った力を更に前へ歩みを止めないであろう。ここまでを区切りとすることなく積みあげたバトンは次に繋いでもらいたい。在校生はさらにトップリーダーを目指してもらいたい。今後の取り組み、活躍に期待を寄せている。



### 【13】3年間の活動について

予期せぬCOVID-19感染拡大における社会環境及び学習環境の変化に伴い、本事業の活動の計画変更及びニューノーマル時代の始まりへの対応が急がれた3年間である。特に、グローバル型での実践に必要な「海外研修」「フィールドワーク」「地域との協働」「発表や議論」「交流」というキーワードが難しい状況となった。活動計画の変更をしながらもこのキーワードをどのように解決をして実践活動をしていくかが課題となった。その課題を解決するための新しい手法による活動方法の挑戦的な実践、そして、こうした環境でしかできない新しい学習方法やしくみの構築をさらに目指すことが本校の事業達成の目標となった。その一つのオンライン化の推進である。初めて愛知県に緊急事態宣言が発令され、数日後には本校ではオンライン授業が始まった。その数ヶ月後にはオンライン型国際理解研修が計画され、実践しながら内容を改善していった。そうしたオンライン環境についての実験的な取組を積み上げることにより、「海外研修」と「交流」においてその実証ができたと言える。特に、海外研修をオンラインで実施することのメリットが発見できたのは大きな成果ではないかと考える。ここで得られたメリットは、海外渡航ができない生徒や一般の方に新しい形の海外交流のやり方を啓発することにもつながるからだ。「交流」に関しては、オンラインを使用することによる人と人との出会いの壁が低くなったことが挙げられる。直接会うよりも画面を通じて話をする方が高校生同士にとって会話がしやすいことも考えられる。また、国内外の高校生との交流も増え、本校独自の事業連携も大きく推進された。「地域との協働」に関しては、「産」「学」「官」「民」の各分野において、繋がりや助け合いを大切にす、あるいは新しい取組への挑戦をする組織が多く、その結果、事業連携がしやすい結果となった。特に、本校所在地である名古屋市昭和区との繋がりが強くなったのも、狭い範囲での「フィールドワーク」ならば可能という社会的な判断もあると考える。また、人が集まらない自然環境での活動も広がり、水源の森林の間伐作業もその一例と言える。「発表や議論」という点に関しては、難しい点も多い。教室で向かい合わせになりグループ討論をする、大人数で集合して発表をするという場を作ることがまだ困難な社会状況である。

本校は、本事業の最終年度において、この「発表や議論」の新しい場づくりを今後の目標として結論づけた。その新しい場は、誰もがどのような社会状況になって参加できる空間である。本事業において、当初の計画通りとはいかなかったが、「厳しい社会状況においても新しい挑戦を重ねたことで、『ニューノーマル時代における新しい学び場を作り上げる』という使命を獲得したプロセス」こそ、この3年間での集大成である。

国際教育推進主任  
黒宮祥男

文部科学省 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

名古屋国際中学校・高等学校

## 2019年度指定 第3年次 研究開発実施報告書

2022年3月発行

発行 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

〒466-0841 愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16

TEL：052-853-5151

株式会社 NPCコーポレーション

〒530-0043 大阪府大阪市北区天満1丁目9番19号

TEL：06-6351-7271





名古屋商科大学系列校

**名古屋国際** 中学校  
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL